CLANNAD～孤高の金～

戦神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＬＡＮＮＡＤ～孤高の金～

【Ｎコード】
Ｎ９９５４Ｇ

【作者名】
戦神

【あらすじ】
光坂高校の不良。三年の『榊原悠（さかきばらゆう）』は友人である朋也と春原を合わせ、三人で日々を平穏に過ごしていた。にも拘らず、ある日突然、様々な方向に人間関係が広まり慣れない悠は目まぐるしく現れるトラブルに翻弄する朋也を見て笑い、騙されては痛い目に遭い墓穴を掘っては痛い目に遭い、自滅をしては痛い目に遭っている春原を見て笑い続ける。高みの見物をキメる悠は、今日もまた自由奔放に日常を過ごす。些細な出来事が思い出に変わる時、人は、少しだけ幸せになる。

本作品はオリジナル主人公が登場します。基本的なスペックはかなり高いです。てか、ほとんど完璧超人です。でもほとんどです、完全ではないのです。だからそれなりの弱点があります。

序章：overture（前書き）

初作品ですが無い頭絞った執筆して行きますので、アドバイス等ございましたらガンガン下さい。更新が途絶えたら携帯が止まったと判断して下さい。よく止まります。

序章：overture

高校三年の春。この『光坂高校』に在学し、不良と蔑まれている少年『榊原（さかきばら）　悠（ゆう）』は今朝から憂鬱であった。三年生になったことで悠の大嫌いな上級生はいなくなり、今まで以上に好き放題出来ると思っていた矢先の生徒指導。

その所為で、一週間に渡り早朝から校門の清掃を言い渡されてしまい、悠の一番幸せな時間である睡眠時間が削られてしまったのだ。これを不機嫌と言わずしてどう言えばいいのだろう。

「クソッ、何で俺が、俺だけが校門の掃除なんか……レレレのオッサンじゃねえんだぞ。第一に朋也とバカ原は何で指導すら無しなんだよ、何だか納得いかねぇ」

ぶつぶつと悪態を吐くが事態が好転するわけもなく、悠の機嫌も一向に良くならない。朋也とバカ原とは、フルネームを『岡崎（おかざき）　朋（と）也（もや）』と『春原（すのはら）　陽平（ようへい）』と言い、悠のクラスメイトであり同じ不良のカテゴリーに属されている。とは言っても、二人とも煙草も吸わなければ酒も飲まない。少しのすれ違いや毎度の遅刻が原因であろう。

時刻は午前六時。この時間帯に、悠が毎回利用する通学路に人影は疎らで、自らの身なりが余計に目立ってしまう。

１８０ｃｍはあろう身長に、腰まで伸びた艶やかな金の髪。その上、キリッとした瞳に鋭い眉。見る者皆が“美形”と口を揃えて言うであろう整った顔立ちは、陰鬱な雰囲気を漂わせて多少劣化している。

「あぁ～もういいや、面倒くせっ。サボろう、良し！　決定、もう学校なんかどうでもいいや」

朋也と春原がやらないのに何故自分だけ、と不公平を感じ一気に元々あまり無かったやる気が完全になくなってしまった。通学路半ばにして進路変更し、近所の公園に歩を進める。朝練を控え学校に向かう部活動のある生徒達は、悠の急な進路変更を訝しげに眺めていたが、金髪で長髪だと分かるといきなり目の色を変えてきた。その目が、明らかに悠を馬鹿にしていた。

視線に気がついた悠は、特に気にも止めず一瞥するだけでその場を去った。春特有の暖かな風が吹き付け、悠の髪を優しく撫で上げる。蔑まれるのにも、馬鹿にされるのにも慣れてる。入学してから今まで、ずっとそんな扱いしかされなかったのだから。

「今更過ぎるぜ……本当」

なんともだるそうに歩き続け、誰も居ない公園にたどり着いた悠は、胸ポケットから煙草を取り出した。箱を開け、煙草をくわえて火をつける動作にいたる間、悠の表情にはもう不の感情は表れていなかった。それ程までに愛煙家な証拠である。

百円ライターで火をつけ、肺いっぱいに吸い込む。数秒のタメの後、一気に大量の紫煙が悠の口から吐き出された。うっとりとした様子で何とも可愛らしい容姿に見えてしまう。

「おっ、良い吸いっぷりじゃあねぇか！」

至福の時を過ごす悠は、背後からの男の声に気がつかない。こういう時の悠は外界との接触を一切受け付けないのだ。

「おいっ、無視か？　無視なのか小僧」

少し苛立った声と同時に男は悠の背中を叩く。

「あぁっ！？　んだよ、俺の至福の時間を邪魔するなよ！」

トリップしていた意識を無理やり呼び戻されて、ご機嫌斜めな様子の悠は一発殴ってやろうかと後ろに振り向く。そしてその正体を目の当たりにし、殴るのは勘弁してやろうかと思った。

悠の背中を叩いた男は、まんま不良がそのまま大人になった感じであった。真っ赤な髪に、ギラギラと輝く切れ目とデカい体躯。唯一の救いと言えば、古川パンとプリントが施してあるエプロンであろう。

「そりゃあ悪かったな小僧、謝るぜ」

「あ、いや俺の方こそ悪かった。いきなり怒鳴っちまって」

と、お互いに謝罪。

別にビビった訳ではない。悠は本能的にこの男には勝てないと思ったのだ。むやみやたらと喧嘩を売っても怪我を増やすだけで、何の得もあったもんじゃない。基本的には平和主義ではあるが、悠はやるときはやる男である。

どうにも気まずい雰囲気が二人の間に漂い始めた。悠はとりあえず男から視線を外してメンソールの煙草をくわえる。

早朝から男二人で公園。

――――嫌すぎる。

欲望に素直な悠は、何故かバットを持つ男の横を通り抜け、公園の端にあるベンチへと腰掛けた。男の横を通り抜けた時

「おい」と、呼び止められたが面倒なのでとりあえず無視すること

にした。が、そうにもいかず、男は悠の前に立ち日差しを遮っている。

「小僧、暇してるだろ？」

「……暇じゃない」

考えること数秒。結論からして断ることにした悠。妙にギラギラとした目が、断る要素となっていたのだ。それに、見知らぬ怪しいオッサンと何かするほどに暇でもない。

悠の返答を耳にした男は、つまらなさそうに口を窄め

「嘘つけ、明らかに暇そうじゃねえか」と抗議してきた。構って欲しいのだろうか、この男は。まるで子供ではないかと思いながら、再び紫煙を吐き出す。

「分かった分かった。…で？　一体何をするんだ？」

降参と言わんばかりに両手を上げ、空を仰ぐ。雲一つない澄み渡る蒼空が眩しくて、思わず右手で遮った。

「そりゃあお前、決まってんじゃねえか。……野球だ！」

何が決まっているのか全然分からない悠であった。

にこやかにバットを振りながら言う様は、小学生のようであり、断りずらい。悠は疑問に思うことが一つあった。それは、この男の格好を見れば一目瞭然。肩から膝下まで長さのある『古川パン』のエプロンが、悠を疑惑へと誘う。本来この男は仕事中なのではないかと、短くなった煙草を地面に捨て、グリグリと足で消火しながらに悠は思った。

「野球やるのは良いけどよ。オッサン…仕事は？」

「オッサンじゃねぇ！　秋生様だ！！」

「分かったよ、オッサン。どうでもいいから、仕事はいいのかよ？」

秋生と言う男の言い分を無視し、悠はあえて『オッサン』で通す。小さな反抗心と言うか、何と言うか、ここは秋生に従うよりは面白いかもしれないと思ったのだ。

案の定、秋生は悠を値踏みするようにジロジロと観察し、悪ガキみたいに口端を釣り上げる。そして力強く悠の肩を両手で掴み大笑いし始めた。

「うははははっ！　面白れぇ小僧じゃあねぇか！　名前は何て言うんだ？」

「悠……榊原　悠だ」

「そうか悠って言うのか。でけぇ態度の割には小っちぇえ名前だな！　……よし、今度からお前は榊原　銀河にしろ！」

無理難題を押し付けてくる秋生に、あきれ顔の悠。

「断る」

即座に拒否し、新たな煙草に火をつける。愉快な人間は嫌いじゃない。悠はグッと背を伸ばし準備運動をし始めた。その様子を見ている秋生は、自分の誘いを受けたと判断しポケットから軟式の野球ボールを取り出し、手元のバットを悠に投げつけた。悠は飛んでく

るバットを片手で受け取り、肩を回す。

「言っとくけど、やるからには全力で遊ぶぜ…俺は」

ニヤリと不敵に笑う悠の姿もまた、秋生と同じ小学生のような笑み。言いようは違っても、悠もまだ子供と言うわけである。

「面白れぇ……上等じゃねぇか。そういう言葉は俺の剛腕を見てから言うんだな」

お互いに口に咥えた煙草を消し、一定の距離を置いて相対した。突風が吹き荒れ、桜の花びらが舞い散り砂埃が舞い上がる。悠と秋生の二人は、そんなことは気にもとめずに真剣な眼差しで睨み合う。遊びの筈なのに、まるで命の取り合いみたいな緊張感がひしめき合う。

始めに動いたのは、ピッチャーの秋生。ピシッとした姿勢から左足が上がり、体が左膝を中心に丸まり始める。その時点で悠は、並々ならぬ気迫を感じ取っていた。

――この男、相当出来る奴だ。

「行くぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

野球のピッチャーは足、腰、肩が重要視される。秋生のそれはまさしく、プロのそれと同等だと素人目の悠からも思えた。左足が地に着いたときの踏み込み音といい、腰の回転から付いてくるようにして肩が見え、鞭のようにしなった腕が見えた。

その時にはもう、手にボールは無かった。

「しまっ……！」

悠が気づいた時には既に遅く、ボールは悠の後方にあるレンガの壁に爆発音にも似た音を出して二人の間に落ちていた。秋生の事を過小評価していたのが悠の敗因で、詰めが甘かった自分に腹が立った。悔しそうに顔をしかめっ面にし、結果に満足し勝ち誇る秋生を睨む。

「ふんっ、まだまだ…だな。俺様に勝とうってのがそもそもの誤りだ。いいか俺様には誰もが勝てない！」

何という唯我独尊っぷり。普段の冷静な悠ならば、ここで呆れて引き下がるだろうがそうも行かない。己の慢心が引き起こした敗北だ。そう易々と引き下がるわけには行かない。

「くそっ！　おいオッサン、もう一回だ！」

「だからオッサンじゃなくて秋生様だっての！　ったく、これだからガキは……」

さり気なく『秋生様』と言っている辺りが、秋生らしい。

悔しさを振り払うが如くバットを下に振って、再試合を要求する悠に秋生は昔の自分を見ているようで、面白いような苛つくような複雑な心境だった。しかし、来る者は拒まない主義である秋生は、目の前で足掻く悠を見て投球のフォームに入った。

「いいかぁ！？　これが打てなかったら、俺様を一っっっっっっっ生『秋生様』と呼べ、良いな！？」

「…上等。なら、俺が打ったら七代先に渡っても俺を『ご主人様』と呼びやがれ」

「んなっ！　てめっ、七代先なんて卑怯じゃねえか！　何で手前ぇのが期間長いんだよ！？」

「言ったもん勝ちだ」

つんつんとこれ見よがしに頭をつつく悠の動作は、暗に“頭を使え”と言っており、それに気づいた秋生の額に青筋が一本立った。

「ハッ、なら俺が勝ったら……早苗の焼いたパンを三食一生食い続けろ！」

「はあっ？　誰だよその早苗って人は」

第三者の名が出て、悠は率直な質問を秋生にぶつけた。

「早苗か？　早苗は俺の女だ」

答が冗談ではないと言うことを裏付けるように、秋生は左手の薬指を悠に見せた。この距離からではよく見えない為、悠はバットを引きずりながら秋生の元へ向かう。そこには確かに婚姻の証である指輪がしてある。

「本当だ……オッサン所帯持ちだったのかよ」

「その通り。早苗は可愛いぞぉ！　変なパンを焼くことを除けば、言うことを無しの女だ。ついさっきもだがよ――」

くどくどとのろけ話を語り始める秋生は、何とも幸せそうだった。勝負の行方はどうなったんだよ、と悠がため息を吐きながら、ふと公園の入り口に視線を向けると一つの人影が見えた。体の曲線からして、恐らくは女性。

「でよっ、早苗の野郎今日は『レインボーパン』とか言う不気味なパン焼いてよ。あれは確実に殺傷能力ありと見たな」

いつの間にかのろけは愚痴になっていた。しかし、殺傷能力のあるパンとは。それはそれで悠には気になる所である。ついでに早苗さんとやらを野郎呼ばわりしていた秋生だが、自分の妻ならば野郎では無いだろうとツッコミたかった。

「……私のパンは」

先程の人影が秋生の後ろに突っ立っていた。悠の目から見ても、それは女性で、しかもかなりの美人であった。クリクリっとした瞳に柔らかそうな頬。そしてグラマラスな体型に、秋生にもあったがたいして気にならなかった頭頂部のアンテナみたいな髪。秋生は二本だったが、この女性は三本も立っている。

女性の囁きに気がついた秋生はこの世の終わりみたいな表情をし、限界まで見開いた眼でもって凝視していた。

「げっ！　さ、早苗」

「うそぉっ！？　この人が？」

悠の今世紀初の驚愕であった。まさかこの美人な女性が早苗だとは、明らかに若く見える。こんな朝から仕事もせずに、不良高校生と野球をやる男のどこが良いのだろう、と疑問に首を傾げた。共通

点と言えば、あのアンテナのみ。
そんな馬鹿げた考えをしていると、早苗の表情がみるみる悲しみ一色に染まっていく。真ん丸な瞳は砕け、形の良い眉がハの字になり目じりからは水晶のような涙が溜まっている。

「私のパンは……私のパンは…っ！　殺人兵器なんですねーー！！」

耐え切れずこぼれ落ちる涙を右の袖で拭きながら、捨てセリフ言うように回れ右して公園から走り去った。

「俺は大好きだぁぁあああああ！」

どこから取り出したのか、秋生の口には虹色に輝くパンがくわえてあった。普段みると虹は綺麗に思う筈なのに、悠はなにやら禍々しい雰囲気を感じ取っていた。そのまま早苗が走り去った方向へと全力で追いかけて行った。

早苗も秋生と同じで変な人だと感じ、秋生の妻であるとようやく納得した時であった。

※

「あぁ～あ、散々な目にあったぜ。あんな屈辱は初めてだ」

結局、あのまま二人は戻らずに時間だけが過ぎていった。このまま無視して学校へ向かっても良いが、バットをどうするべきか悩んでいた。秋生は脇目も振らず早苗を追いかけていたので、悠が持ったままのバットの存在に気が行かなかったのだ。

初めはそこらに放り投げようかと思ったが、後が怖いのでそれは

止めることにした。そして結局、今居る通学路に至る。秋生と遊んでいたおかげで、時間は既に昼頃。進学校と言われる『光坂高校』の通学路には、当然悠以外の人は居らずカラカラとバットの引き摺る音が木霊するだけだった。

「そろそろ朋也とバカ原も登校して来る頃だろ。……てか、初めっからバカ原の所に行けば良かったんじゃん。…バカは俺だ」

今更後悔しても遅い。既に学校の近くまで来ていた悠は、今から春原の住む学生寮の所に行ってもしょうがない。とわ思ってもそこまでして春原の部屋に行きたいわけではない。仕方なく悠は、カラカラとバットを鳴らしながら学校へと歩を進める。

光坂高校は長い桜並木のある坂の上に建てられている。悠はその坂の下で立ち止まっていた。先の未来が全く見えない今の学校生活に、うんざりしていた。朋也や春原と出会わなければ今頃、きっと自分は学校を辞めていた。そう言う意味ではこの学校の老教師である『幸村(こうむら)』に感謝している。かけがえのない友情と出会えたのだから。

「さてと、行きますかな」

ぐっと背を伸ばして歩き始めようとした時。背後から声がした。

「――――あんぱんっ」

振り返ると、そこには少女が一人立ちすくんでいた。不安そうな表情をし、俯いている少女は、悠から見てとても脆く見えた。

「この学校は好きですか」

「はっ？」

いきなりの質問かと思った悠は、素っ頓狂な声を上げてしまった。しかし、その言葉は悠に向けられているわけではなかった。

「私はとってもとっても好きです。でも、何もかも……変わらずにはいられないです。楽しいこととか、うれしいこととか、ぜんぶ。…ぜんぶ、変わらずにはいられないです」

たどたどしく一人言を続ける少女。その姿をただ黙って悠は傍観する。何やら邪魔しては行けないような気がして、儚げな様子が自分によく似ているように思えて。声をかけることも忘れて、じっと見つめていた。

「それでも、この場所が好きでいられますか」

「わたしは……」

「そんなの、見つければいいだろ」

思わず声をかけてしまった。邪魔をしてはいけないと思っていたが、このまま少女を放置していたらずっとここで立ち止まったままじゃないか、と思ったのだ。

少女は、あたかも自分しか居ないと思っていたような反応をして悠の方に振り向く。そこで初めて少女の顔をちゃんと見た。まん丸な瞳に形の良い眉に……頭頂部のアンテナ二本。少女は早苗にそっくりな顔をしていた。

「えっ…？」

悠は驚き顔の少女に構わず語る。

「過去は過去でしかない。過去に縛られて悩んで、今を生きないのは損だぜ。今ある楽しいことや、嬉しいことを……見つけりゃあ良いじゃねえか」

悠は、あまり多くを語るつもりではなかった。だが、いつの間にかこの少女と昔の自分を重ねていた。やはり、この子は昔の自分にそっくりだ。

せめて自分だけでも救いになろう。

「ほら、行こうぜ」

「えっ、あ、はい…」

先を促すように悠は声をかけて少女の隣から歩き始める。つられるように少女も悠を追いかけ隣を歩く。

そう、この出会いが始まりだった。

少女『古川（ふるかわ）　渚（なぎさ）』との出会い。それは悠を平穏な日常から、引き離す序章に過ぎなかった。

一章：平穏な日常

先程の少女とは、三年生の教室が建ち並ぶ廊下で別れた。あの坂の下でのやり取り以降、二人の間に会話は一切無かった。今にして思えば、何故話しかけたのか自分でも不思議でしょうがなかった。悠にしては見ず知らずの人に話しかけることはあまり無い。それなのに、やはり不思議でならなかった。

考えに耽りながら自分のクラスである教室の扉を開く。ちょうど授業中らしく教師が教卓に立って黒板に何か書いていたが、そんなの悠には興味など無く、いくつもの冷たい視線を身に受けながら自分の席へ向かう。

悠の席は窓際の後ろから二番目。ついでに朋也が後ろで、春原は朋也の隣の席になる。悠の後ろの席は未だ空席であった。つまりは、朋也はまだ登校してないと言うことになる。よく遅刻はするが、授業をサボる事はあまりない朋也は、確実に来ていないと悠は確信していた。

席に着き、外を眺める。窓から吹き抜ける風が、悠をいい具合に眠くさせる。

悠は授業を一切聞かずに、そのまま夢の世界に旅立った。

※

悠が目覚めたのは、ちょうど昼休みの時間だった。眠そうに瞼を擦りながらぼやける頭を起こし、周りを観察する。すると悠の席の横に、二人の男が立っていた。一人は悠と同じ金髪の男『春原　陽平』。そしてもう一人、無愛想な顔のまま悠を見下ろす男『岡崎　朋也』である。

「やっと起きたのかよ悠、寝すぎだぞ」

「朋也こそ、やっと来たのかよ、遅すぎだぞ」

図星をつかれ二の句が言えない朋也。そこに、会話に割り込んで来た春原が悠を不機嫌そうな目で軽く睨んでくる。中腰姿勢に手は腰にあてる姿は、春原がやるとどうにも締まりがない。怖く感じないのも当然の事で、悠と朋也は春原の本質を知っているからである。

即ち、ヘタレ。

「なぁ、悠〜。君、僕に何か言わなきゃいけないことあるよね？」

「はっ？　いきなり何だバカ原」

話の意図が読めない悠は、とりあえず思った事をそのまま口にした。急に、言わなきゃいけないこと、と言われても、春原に対してはありすぎてどれなのか選んでるだけで日が暮れてしまう。悠の返答に満足いかなかった春原は、両手で悠の着く机をリズミカルに叩き始めた。

「何を言ってるんですか！？　悠が一昨日、僕の部屋にあった漫画を勝手に売った事だよ！」

春原の熱い演説が終了と同時に、春原の眼から涙が流れ始めた。だからと言って同様するような男では、悠はない。勿論、それは朋也も同じで、同情など欠片もせずに春原の背後で笑いに肩を震わせていた。これが悠と朋也の、春原に対する友人としての対応なのだ。

「あぁ～、あれね。……あれには訳があるんだ」

「何だよ？　内容によっては許してやってもないけど…」

「いや、どんだけ偉そうなんだよお前」

悠が、ワザと弱々しい態度を演出し始めると、春原は調子に乗って上目線で話し始め、朋也はそれにツッコミを入れる。ようやく目も覚めてきたので、悠は椅子から寝過ぎて固まった体を上げ春原を見やる。

「あれは、事件の起こる前日の話だ。いつものように俺は商店街をぶらついていたんだ、そしたら……何が起きたと思う？」

「何？　喧嘩でも起きた？」

「……逆ナンだ」

「何ぃいいいいいいいいい！？」

勿論、これは悠のでっち上げた嘘。それも即興のアドリブ。それを知っている朋也は、背後で声を出さないよう必死な顔で両手を駆使し、口を抑えていた。どうしてこんなにも簡単な嘘に引っかかるのか、だからバカ原と自分は読んでいるのだ。毎度の事ながら、やはり春原は馬鹿だと再確認した。

そろそろ間を開けるにしても限界だろう。春原はもう、悠の虚言によって嫉妬に狂っている。

「まぁ落ち着け春原。逆ナンと言っても、俺にじゃない。…お前にだ」

「えっ？　マジっすか！？」

春原のがっつくような質問に、静かに頷き、悠の虚言は続く。

「初めは俺に、と思ったさ。でもその女の子は春原、お前目当てだったのさ。何でもその子が言うには、お前の少年みたいな所に惚れたらしい」

「ま、まぁ無理もないか。僕って少年っぽい所が隠し切れてないしね！」

「お前って本当に単純な」

我を忘れて調子に乗る春原に、苦笑しながらもツッコミを忘れない朋也。悠としては春原の馬鹿さ加減よりも、この朋也と春原の漫才のようなやり取りの方が笑えてくる。

「それでよ～その子ったら、お前の持ってる者が欲しいって言うからさ……仕方なく部屋にあった漫画を渡したってわけさ。分かってくれるか？」

「なぁ～んだ、そういう事なら仕方ないよね。良いよ許してあげるよ。…それで、その子の名前って？」

どうやら知り合いになりたいらしい春原は、締まりのない顔をしながら悠に訊ねる。自分に好意をもつと言う女性がいるのだ、誰だろうと興味を示すだろう。

悠は少し考える。一体誰の名前を出したら面白いだろうか、と顎

に手を添え考える素振りをする。自分が知りうる女性の名前を、一つ一つ上げてゆく。三秒ほど経って、悠は名案と言わんばかりの意地の悪そうな顔をする。

「……藤林　椋だ」

「マジっすか！？　委員長が！？　俺を！？　うっひょぉぉぉぉぉぉ！」

春原は頬を上気させ、両手を力一杯握り、拳を天高く掲げて気色悪い雄叫びを上げる。隣でボソッと

「幸せな奴…」と、朋也が言葉を漏らす。当の本人には全く聞こえておらず、既にこのクラスの委員長『藤林（ふじばやし）　椋（りょう）』の所へ向かっていた。

「なあ悠、いいのか？　春原の奴、奇声上げながら委員長の所行っちまったぞ」

事の重大さに戦慄した朋也が訊く。恐らく、朋也はこの後の事を恐れているのだろう。クラス委員長の椋には、双子の姉がいる。隣のクラスで、同じくクラス委員長をやっている『藤林（ふじばやし）　杏（きょう）』である。妹の椋が肩より少し上の位置ぐらいの長さの髪に対し、姉の杏は悠と同じぐらいの腰まで伸びた少女である。

双子だけあって髪型を揃えると、恐らく見分けがつかなくなるだろう。椋の性格が大人しく引っ込み思案なのに、杏はまるで正反対。乱暴で勝ち気な性格で、同性のファンがいるほどである。

「大丈夫だろ、藤林妹には優秀なボディーガードが居るんだから」

万が一に春原が感極まって椋を襲わないよう、保険はかけてある。

それが杏なのだ。杏の最も恐ろしい所は、どこからか取り出し光速で投擲する辞書だ。一体全体どこに隠し持っているのか分からないが、下手したら死人が出かねない。

「そこだよ。杏にやられた春原がその後どうすると思う？」
「…逃げるんじゃねえか？」
「そんな訳ないだろ。確実に杏がとっ捕まえて、共犯者を吐かせるに違いない。春原がヘタレなのは杏も分かりきっている、まず単独ではないと思うだろう」

朋也は解説の途中からヤケに熱がこもっている。なのに顔は青ざめてく一方だ。

「……やべぇ」

悠はようやく事の重大さに気がついたらしく、冷や汗を流し始めた。自慢じゃないが悠達三人は友達が少ない。と言うか自分を除いた二人しか友達はいない。二年生の時からの付き合いである杏も、勿論春原には悠と朋也を除いて友達がいない事を知っている。となると結論からして、間違いなく杏は二人に報復の狼煙を上げるであろう。

悠はこれから起こるであろう惨劇に慄いた。

「だろっ…？　そうなったら俺らもタダじゃ済まない」
「あぁ……やっちまったぜ。……春原を止めてく――――っ！」

悠は机の横に立て掛けていた秋生のバットを持って、藤林姉妹がいつも昼食をとる中庭へと走り出した。

――――瞬間。

『ひいいいいいいいいいいいいいいいい！！』

春原らしき絶叫が悠と朋也の耳に入ってきた。どうやら手遅れだったらしい。

「春原…死ぬなよ」

「アイツは……良い奴だった」

二人して、天に登って行く春原をイメージしながら労いの言葉を呟き、成仏しろよと囁いて手を合わせた。

「さて、起きちまったもんはしょうがねぇ。……逃げるか朋也」

「おう、当たり前だ」

手に持ったバットを肩に担ぎ、悠と朋也は退路へ目指し走ろうとする。

――――が。

地を揺るがすような凄まじい足音が二人を遮った。足音は二人のいる教室で止まった。

勢い良く扉が開き、耳に刺さるような音が教室内に響き渡る。

「くそっ、遅かったか……！」

鬼の形相をした少女――――藤林　杏が退路である扉の前に立っていた。

「悠っ！！　朋也っ！！　やっぱりあんた達ね！」

普段は凛とした美少女の部類に入る彼女は、怒りでその顔を歪め

ていた。美しいつり目が仰々しく輝いているのは、悠の気のせいだと思いたい。

「ま、まてっ！　待つんだ藤林姉！」

「そ、そうだ！　俺達がやったって証拠が何処に……あっ」

語るに落ちるとはまさにこの事。墓穴を掘った朋也は、やってしまったと顔をしかめ悠に救いを求める。

「馬鹿野郎……。もう遅ぇよ」

悠は諦めたらしく、大きくため息を吐いた。その間も杏は、じりじりと悠達との距離を縮めていく。

「陽平を拷問してネタは上がってんのよ！　どうやら、主犯は悠のようね。しかも、まだあたしを『藤林姉』と呼んでるし…」

杏の鬼の形相に、少し不満そうな色が浮かぶ。悠が主犯だと発覚し、朋也は少なくとも自分にはとばっちりは無いだろう、と思いそそくさと杏の目を盗み教室を出る。

「いや、名前で呼ぶのには何か抵抗が……」

「あたしが良いって言ってんだから良いのっ！」

とうとう悠の下にたどり着き、胸倉を掴み上げる。どこにこんな細腕にあるのだろう、と疑いたくなるような腕力で掴まれ、悠は再び冷や汗を流す。

呼び名に関してはただの気紛れ、一度そう呼んだからなかなかにタイミングが見つからず、杏に指摘され強要されるのは良くあったが、それだとなんだか何かに負けた気がして頑なに拒否していた。

「まあ、気にすんなよ。俺なんか欠片も気にしてないわけだし」
「あんたが気にしなくても、あたしが気にすんの！　二年からの付き合いなのにいつまでも他人行儀ったらしくて……」

そう言って杏は、悠の拘束を解き
「あぁ～もう！　ムシャクシャするっ」と怒鳴って頭をかきむしる。女らしさの欠片もない仕草に、悠は杏らしいなと痛む首をさすりながら思った。
そんな事を考えていると、杏の動きが急に止まる。不思議に思った悠は、恐る恐る杏の俯いた顔を覗き込もうとする。

「……決めたっ！」

杏はいきなり顔を上げ、悠を指差す。一体何なんだ、と驚きで声を失う悠に一言――。

「今回の件、チャラにしてあげる代わりにあたしと椋を、ちゃんと名前で呼びなさい！」

まさに絶句。
唖然として反論する言葉も無い。杏だけでなく椋までも今後は名前で呼ばなければならないのか、と考えるがそこで疑問を抱く。

「なぁ『藤林姉』は――
「杏っ！」き、杏はともかく、何で藤林妹まで……？」
「そんなの、椋があんたに――」
「――おっ、お姉ちゃんっ！」

杏が二の句を言う前に、二人の間に割り込んでいつの間にか現れ

た椋が遮った。その顔はアタフタと落ち着きが無く、顔が真っ赤に染まっていた。中庭から慌てて走って来たのかな、と悠は判断する。
いらぬ妹の横槍に、杏は不服そうに頬を膨らませて抗議する。

「ちょっと椋、邪魔しないでよ今良いところ何だから」
「時と場所を考えてから発言してよお姉ちゃん。それでも言っちゃ駄目だけど…」
「あっ……！」

ここが教室であったと言うことに、椋に言われてやっと気がついた杏は、とりあえず笑って誤魔化した。
それまで見ていた見物人は、杏が気づく前から鬱陶しく思っていた悠が一睨みしてその視線を排除した。

「と、とにかく！　今後あたしと椋の事は名前で呼ぶことっ。分かった？」
「拒否したら？」
「…死にたいの？」
「……了解しました」

「ならよろしい」と満足げに頷く杏を尻目に、俯き加減の椋は依然として、いや、更に顔を赤くしていた。
春原め、次にあったら覚悟しろ。と、全く自分には一切非がないような事を考えていた。
目的の達した杏は、それまで気になっていた事を悠に訊く。

「そう言えばなんでバットなんか担いでるわけ？　もしかして誰か殺った後なんじゃ…」
「そんな……榊原君」
「んなわけねぇだろ！　登校する前に野球やってたんだよ、変なパ

ン屋のオッサンと」

まさか誤って犯罪を犯したのかと思った杏は、思った事をまんま話し、それを真に受け椋は瞳を涙で潤ませる。悠は慌ててバットを自分の机に立て掛け、杏と椋の双子姉妹を説得するも覆水盆に返らず、椋の目尻に溜まった涙は留まる事を知らず、重力に従って柔らかそうな頬をつたっていった。今ほどニュートンを恨んだ事は無かった。

「なっ、アンタ！　なに椋を泣かしてんのよっ！」
「ちょい待てっ、何で俺になってんだよ！　泣かしたのは杏だろ？　俺は一切、何もしてないぞ！」

確かに何もしていない。にも関わらず自分を責める杏に、悠は反論する。

「うっさい！　問答無用ぉ！」

いきり立った杏は、無手である右手を腰の後ろにやると、さっきまでは無手だったのにそこには分厚い『国語辞典』が装備されていた。

悠が気付いた時にはもう“それ”は投擲されていた。

「理不尽だぁ！」

間一髪回避に成功したが、その代償に頬が切れ血が流れていた。なんとゆう威力だろうか。直撃していたらひとたまりもなかっただろう。妹を愛してやまない杏を宥めるのは、ほぼ不可能と言っても良いだろう。

「お姉ちゃん…」
「椋、待ってなさい。今お姉ちゃんがこいつをやっつけるから」
まるで聞く耳持たない杏。
第二波を恐れた悠は、冗談じゃねえぞ、と愚痴をこぼして鬼の化身から逃避行することにした。一歩下がって背後にある机に右足を掛け、大きく跳躍して杏の頭上を飛び越える。悠に睨まれて視線を外していた傍観者たちも、悠の身体能力に驚愕していた。呆気にとられる杏を無視して、素早く教室から退散した。悠の去った教室は、突風が通り過ぎた後のように静寂に包まれていた。
「相変わらず、あいつの身体能力は化け物じみてるわね」
ポツリと杏が率直な感想を言った。
※
悠は教室を去った後、中庭に来ていた。昼休みも半ば、杏達もここにはもう戻らないだろうと考えての行動である。既に、殆どの生徒が昼食を終え雑談に花を咲かせているところであったが、一人そうではない人物がいた。
「……」
「あいつ…」
寂しそうな横顔は、間違いなく悠が登校時坂の下で出会った少女だった。わざわざ中庭に来て一人寂しく昼食と言うことは、恐らく友達がいないのだろう。もふもふとパンを啄ばむようにして食べる姿は、何やら小動物をイメージしてしまう。さっきの事もあり、少女の事が気になった悠は、声をかけようと少女の座る木を囲うよう

にしてできたレンガに近寄る。

「よおっ、一人か？」

「……」

悠が声をかけるも、少女は依然としてパンを啄ばんでいる。

無視されたのかと思い、悠は少女の隣に座ってショックを受けていると。パンを食べ終わった少女の視線が悠に向った。

「あ……あなたはさっきの」

どうやら少女の反応からして、無視されていたわけではないようだ。本当に気がつかなかっただけで、悠はすこしホッとして胸を撫で下ろすが、少女のポケポケ具合に今後の危機感を募らせた。驚いた様子で悠を見る少女は、やはり悠が今朝見た女性早苗によく似ていた。

「なあ、お前…名前は？」

「えっ？　古川……渚です」

やはりそうだったか、どおりで似ているわけだとは思っていたが本当にそうだとは。待てよ、となると早苗さんって子持ち？　それであの若さは反則じゃねぇか。とブツブツ言い始める悠。話かけられたのに名前を聞いて以降、ただブツブツと何かを呟く悠に渚はどう言えば良いのか困っていた。とりあえず食べ終わったパンのゴミを捨てようと、腰を上げる。

「古川…」

「はい、なんでしょうか？」

ようやく悠が機動したので、渚はパンの包装紙、つまりゴミをもったまま再びレンガに座る。早苗の娘なのか問いただそうとして、自分が未だに名を明かしていない事に、悠は気がついた。

「俺は榊原　悠だ、よろしくな」
「はいっ、よろしくです」
「まあそれは良いとして、本題は……野球好きで、ガキみたいなパン屋のオッサンを知ってるか？」

そこであえて秋生を話題に出したのは、早苗は顔を見ただけで会話もしてないのに話には出せないと判断したからだ。ついでに秋生を名前で呼ばなかったのは、ただ単に呼びたくなかったからである。

「それ、多分私のお父さんです。知っているのですか？」
「あぁ、今日朝っぱらから野球した仲だ」

とは言っても、お互いに生涯を賭けたな、と続けて渚に微笑む。渚は自分の親、秋生と仲が良いのが原因か嬉しそうな顔をして悠に微笑み返す。その顔に、悠が少しドキッとしたのは秘密である。

二章：図書室での出会いと迷惑な来訪者（前書き）

キャラの性格が上手く表現出来ていないかもしれません（＾０＾；）

二章：図書室での出会いと迷惑な来訪者

昼休みの終了を告げるチャイムが鳴る。

「おっ、そろそろ行くか」

「そうですね、ではさようなら……榊原さん」

渚は丁寧に頭を下げてくる。なんとなく気恥ずかしくなった悠は、おう、と呟いて後頭部を掻き、誤魔化すことにした。

向日葵のような笑顔をし、去る渚の背中を見届けながら

「さてと、行きますか」とぼやき悠も中庭を後にする。

学校が終わったら、秋生の所へ行ってバットを返さなければ。悠は午後の授業を面倒くさいの一言で一蹴して、サボることにした。

「とりあえず寝床を探すか」

くあぁ、と欠伸をして今の時間帯に人の少ない図書室へと足を運ぶ。

図書室は古い家のような匂いがして、悠にはお気に入りの場所である。立て付けが悪くなっているのか、扉を開けるのに苦労してしまった悠は、肩で息をしていた。ヘビースモーカーがこういう所で、逆に効いてしまう。

「…やっぱここが一番だな」

クンクンと鼻を効かせて、図書室特有の本の匂いを嗅ぐ悠。部屋いっぱいの本に囲まれ、いい具合に眠くなってきた悠は図書室の中央に置かれたテーブルに腰掛けた。

日差しの差し込む、窓際の床に座る少女に気づいたのはその時であった。床にクッションを敷いて裸足で座る少女は、手元の本をただジッと読んでいた。

「……なぁ」

「……」

渚の時と同じでまたもや無視。悠は心がくじけそうだった。

「もしも～し、聞こえっかぁ～？」

「……」

「……死にたい」

大袈裟にショックを受け、悠はその場に四つん這いになる。窓から差し込む太陽の光が丁度良く悠を照らし、その様は薄暗い図書室で絶望する天使のようだった。言動や行動は飄々として生意気な悠だが、顔だけはかなりの高ランクなのである。ナルシストを気取る訳ではないが、女子に無視をされるとやはりショックなのである。

それを余所に、少女は懐からハサミを取り出し本のページを切り始めた。

「ちょっ！　マジかよ、そりゃまずいぞお前」

「……？」

少女の手を掴んで制止する。流石に本のページを切り取るのは不味すぎる。バレれば確実に停学になる。仮にも進学校である光坂高校はそういう所だ。

自分の手を掴まれている事に気がついた少女は、やっと悠の存在

を確認した。悠を不思議そうに首を傾げ見つめるその瞳は、どこか儚げで、小突けば脆くなった瓦礫のように崩れそうであった。

「あのなぁ、それをやっちまったらお前さん、停学だぜ？」
「……？」
「停学だよ、て、い、が、く！　ったく惰眠を貪ろうかと思ったらこれだぜついてねぇ…」

ハサミを持つ少女の手を掴みながら隣に座り、開いた左手で顔を覆う。渚の時といい、最近になって自分がみるみる丸くなっている事に複雑な気分を抱く。
少女は依然として黙ったまま、物静かな双眸で見つめている。

「あ～、手ぇ握ったままだったな、悪い。俺は榊原　悠ってんだ……お前は？」

掴んだままの手を離し悠が自己紹介した時、少女の瞳が僅かだが反応を示した。少女はのそのそと、座ったままの姿勢を保ちながら悠と向き合う。よく見るとこの少女もなかなかの美人である。

「…ことみ。…ひらがなみっつでことみ…呼ぶ時はことみちゃん」
「ことみか、覚えたぜ。よろしくな」
「……うん」

ふわっと笑みを浮かべることみ。ようやく人間らしい表情になったことみの顔は、驚くほど可愛らしかった。
ことみはバラバラ殺本未遂に終わった本を置き、手元に置いてあったちっちゃな可愛らしいお弁当を手繰り寄せ、ゆっくりとお弁当を包むハンカチの封を解く。解いたハンカチを悠とことみの間に敷き、その上にお弁当を置いてその蓋をとった。中の食材を見て悠は

感嘆の声を出す。小さいながらにその中身は充実しており、卵焼きを主に様々なおかずと桜澱粉を散りばめている御飯が現れた。素直に美味しそうだと悠は思う。証拠に腹の虫が情けない声を上げているのだから。思い返してみると、朝飯も食わずに学校へ向かい、途中で公園で時間を潰し秋生との野球勝負。ようやく学校につけば教師や生徒たちから冷たい目で見られ、昼休みは春原をからかって杏に殺されかける始末。

杏の魔の手から逃れ、渚との会話。授業をサボって図書室に来れば不思議っ娘との遭遇。

「なんか俺って…忙しい奴だな」

「……？」

「いや、こっちの話だ」

悠の一人ごとの意味が理解できず首を傾げることみ。

こうやって考えてみると、今日は食べ物を一つも口にしていない。そう考えた途端、空腹は最高潮に達し悠を襲う。ギュルギュルと腹が鳴り、だるくなってきた体を悠は横にした。床に着いているはずなのに、感覚的にはまだ体が下に向っている。

「悠君……」

「……んあ？」

まだだるい体を起こし、小さなフォークを持つことみに向き直る。ことみはお弁当を膝に乗せ、言った。

「はんぶんつ……」

「マジか！？」

黙って頭を縦に振ることみ。

悠にはことみに後光が差しているように見えた。窮地を救ってくださる女神様だ、と感涙しことみに頭を下げる。一体何をやっているのかことみにはわからず、フォークを持ちながら再び首を傾げる。

「ことみ。困った事があったら……本当に助けて欲しいと思った時、俺を呼べ。どんな事だろうと俺がお前を助ける。これが俺の誓いだ、必ず恩は返す」

真剣な眼差しでことみを見つめ、悠は心の中で固く決意する。決して軽い気持ちで言ったわけではない。悠は腹が減って死にそうなときに、助けてもらった恩は絶対に忘れない。悠の中でそれ程に食べ物は大事なのだ。

刺すような真剣な視線は、ちゃんとことみに伝わったらしく何度も頷いている。それを悠は

「もう良いから、飯食おうぜ」と言いながら、右手でことみの頭を撫でて制した。気持ちよさそうに目を細め、まるで猫みたいに撫でられ続けることみ。いつになったら飯が食えるのだろうか、と内心涙目で訴える悠。

「……気持ちが良いの…」

「ことみさん。そろそろお食事に致しませんでしょうか？　ほら、お腹の子もこの通り泣き叫んでおります」

わざとらしい演技で、ことみの頭から手を離して悠は自らのお腹を妊婦のようにさする。ナデナデを中断されたのが不満だったらしく、ことみは膨れっ面で悠にお弁当を渡して来た。悪いのは俺なのか？　と、悠は声を大にしてツッコミたかった。

「…仕方ないの、今日は我慢するの。……また明日…してもらうの」

「えっ？　いつの間にか、勝手に俺のスケジュール予約済み？」

「……いただきましょう」
「しかも、今度こそ完璧なる無視かよ……」

もう良いやと小さく呟いて、悠も手を合わせる。食事前の礼儀は必ず忘れない、それが悠なのだ。
手を合わせるのを終え、いざ食そうって時に悠は気がつく。目の前でことみは美味しそうに卵焼きを頬張ってはいるが、問題はそこではない。重要なのは、ことみの持つフォーク。それ以外に食べ物を取る道具が無い。

「しゃーない、食べ終わるのを待つか…」

本棚に背中を預け、後頭部で手を組み枕代わりにする。少々ゴツゴツしてはいるが、悠は大して気にもしない。視界から消えたので気になったのか、ことみが悠をジッと見つめている。そして、小さな可愛らしいフォークで卵焼きを刺すと、悠の口へ持って行き
「…あーん」と促した。

「いやいや、それはキツいっしょ。恥ずかしすぎるわ」
「……あーん」
「いや、だから。あーんしなくても飯は食えるし……てか俺って貰う側なのに何生意気言ってんだろう」

ことみはフォークに刺さった卵焼きを食べるまでは、このやり取りを止めるつもりはないのだろう。背に腹は代えられんので、悠は観念して卵焼きを口に入れた。

ことみは満足そうな顔をして、次の食べ物に手をつける。

「ちょ、まだやるつもりかよ？」

「…あーん」

今度は唐揚げを差し出すことみ。その顔はなにやら楽しそうで、とても生き生きしていた。これではまるで、親鳥から餌を待つ雛鳥みたいではないか。悠は、自分の中で何かが崩れていくのを感じた。

「はぁ…今回だけだからな。次はないと思えよ」

「…わかったの、これで終わりにするの」

そう言って、ことみは催促するように唐揚げを押しつけてくる。悠は躊躇しながらも、口を開いて受け入れた。

悠はその後、フォークを使わずに手で食べる事にした。初対面なのにも関わらず仲良く、二人でお弁当を平らげ、ことみは空になったお弁当を見て柔らかい笑みをこぼした。なんで笑うのか、その理由が悠には分からなかったがことみが嬉しそうなので、まあ良いだろうと思い机に向かい睡眠の体制を作るが。

「悠君……」

ことみの呼びかけがそれを阻止した。

「なんだ？　もしかしてもう一つ弁当を持っているとか？」

「私…そんなに食べないの」

ぷぅ、と頬を膨らましてむくれることみに、さっきまで無視されていたのが嘘のようだと、悠は感じていた。

「悪い悪い。で、何だ？」

「悠君……いじめっ子」

俯き顔を伏せてことみは言う。なかなか機嫌を直してくれないことみに、悠は仕方なく頭を撫でて誤魔化すことにした。案の定、ことみはふにゃっと柔らかい表情になって目を細める。撫でられることの一体どこが良いのか、悠にはさっぱり分からないが、春原あたりがこの光景を見たら嫉妬に狂ってしまうかもしれない。

そこで思い出す。春原はあの後どうなったのだろうか。あの叫び声からして常人ならまず無事にすまないレベルだ。だけど、と悠は思い直す。その間もことみに対するナデナデは止めていない。

あのギャグキャラ体質の春原だ。今頃、もう回復して授業も聞かずに寝ているのだろう。

「そう言えばことみ、何か話があったんだろ？」

「……忘れてたの。悠君…悠君って不良？」

恐らく悪気は無いのだろう。悠の勝手なイメージだが、天然ポケポケのことみが人の顔色を伺うようなこと出来るわけがない。

悠は伏し目がちに固く閉じた口を、ゆっくりと開く。

「一応、他の奴らにはそう言われてるな…。なんでそんな事訊くんだ」

昔の事を思い出してしまい、悠の顔に余裕が無くなっていた。透き通るような金色に輝く長髪を撫でる手が、僅かだが小刻みに震えていた。

だが、それに気がつかないことみは、構わず二の句を告げる。

「…だって、今は授業中なの。でも悠君はここに居るの……」

その言葉を聞いて、悠は安堵する。

悠が恐れた、過去に関する話しかと思っていたのだ。

これでも悠は昔、この街で一、二を争うほど有名な武闘派の不良であり、悪行の限りを尽くしていたのだ。しかも、高校一年生の時はこの街の不良の巣窟である工業高校の出身で、二年に上がる前にこの高校に編入してきたのだ。その噂があって何故、この光坂高校に編入出来たかと言うと、単純に編入テストで全教科満点を取ったからである。

「……眠かったんだ。俺はなことみ、寝たいときに寝ないと忽ち体中の穴という穴から血液が吹き出てしまうのだよ」

「……悠君、病気？」

「そうなんだ、余命一時間だ」

おどけた態度で冗談を言う悠だが、ことみは真に受けたらしくガタガタと震え始め、泣きそうになっていた。

「……悠君、死んじゃうの？」

「…悪ぃ、嘘、冗談、虚言です、すいません」

即座に頭を下げる悠。扱いずらい、と頭を下げながら思ってのは内緒である。

嘘だと分かったことみは安堵の笑みを浮かべるが、みるみる顔が赤くなり、頬が膨れていく。

「……悠君、やっぱりいじめっ子…」

涙目で上目遣いをすることみの仕草は、悠に罪悪感を芽生えさせた。

そんなやり取りをしている内に、五時間目の終了を告げるチャイムが校内に鳴り響いた。

「おっ、終わったか。……結局眠れなかったけどな」

はぁ、とため息を吐き悠は重い腰を上げる。それを目で追いながら、ことみは首を傾げる。

「…悠君、どこ行くの？」

「授業だよ、流石に二時間連続ってのは不味いしな。…てかことみ、お前は行かなくて良いのか？」

さっきまで気がつかなかったが、ことみもこの高校の生徒。勿論授業はあるはずだろう。

こんな見るからに真面目そうな子がサボり。違和感がありすぎる、と悠は頭を抱える。

「…わたしは授業に出なくても大丈夫なの」

「なんだそりゃ。特別待遇とかなんかか？」

「……うん」

さも当然だと言わんばかりに頷くことみ。どうやら嘘ではないらしく、本当に大丈夫らしい。ふーん、と興味がいまいち湧かない悠は無愛想な返事をしてクッションに座ることみに背を向ける。

「まぁどうでもいいや。そんじゃあな、ことみ」

「…うん。……また今度、なの」

と言ってことみは手を振るが、その顔はさっきとは打って変わって悲しげな顔をしていた。しかし、背を向けている悠は気づかないまま図書室を後にする。

悠は廊下に出て思ったが、ある種の不思議体験をした気がしてな

らなかった。

※

その後、真面目に六時間目の授業に参加している悠は、頬杖をつき窓から外の景色を眺めていた。

朋也は相変わらず机に突っ伏して眠っており、幸せそうな顔をしていた。隣の席では、すっかり元通りの顔に戻った春原が朋也に消しゴムを投げようとしていた。小心者の癖に、変な所で勇敢だからいつも痛い目にあうのだろう、と悠は春原に憐れみの目で見ながら思う。

春原はそんな悠の視線に気づかずに、小さくちぎった消しゴムを投げようと腕を振りかぶる。

――――が、その消しゴムが投げられる事はなかった。

割れるような轟音が辺りを走り、それに気を取られ春原は消しゴムを置いて立ち上がった。

「なんか面白そうな事がありそうだな！　なぁ悠、廊下に出て見ようぜ！」

「めんどいからパス」

じゃあいいよ僕だけでいくもんね、とつまらなそうな顔をし、春原は廊下へと向かった。つられるように他の生徒達も野次馬根性丸出しで教室から出る。

「こらぁ！　今は授業中だぞ！　戻りなさい！」

教師が声を上げて言うが、大移動をする生徒達には通じず、諦めた教師は現場へと走って行った。
破裂するような音からして改造バイクの排気音だと、悠は判断する。それも複数台来ている。予想としては恐らく六台。あまりの騒音に朋也は、まだ朦朧とする意識のなか瞼を擦りながら体を起こす。

「よぉ、やっと起きたのか」
「んあぁ？　……悠か。何なんだこの音は？」
「どっかの馬鹿が、多分だが校庭に乗り込んで来たらしい」

そう言って立ち上がる悠。
さっき春原には行かないと言ったが、やはり気になってしまう。もし、工業高校の奴らだった場合、それなりのけじめを取らせなければならない。悠の気分と同じで、重くなった足をゆっくりと前に出し、廊下へと歩く。朋也も気になるのか、悠の後をフラフラとした足取りでついて行く。まだ眠いのだろう。

廊下は既に凄い人数になっていた。その中で、一際目立つ悠と同じ金髪が何やら喋っていた。

「うひょー！　よくやるねぇ工業高校の奴ら」
「いったい何なんだ春原？」

テンションの高くなった春原に朋也が訊く。

「なんか工業高校の奴らが因縁つけてきたんじゃねぇの？　その証拠に坂上を出せ！　とか言ってるし」
「ふーん」

朋也はそう言うと、春原の隣に入り窓の所に肘を乗せ前傾姿勢を

取る。
悠は一瞬意識が遠のくのを感じていた。春原は確かに“工業高校”だと言った。しかも『坂上を出せ！』と要求しているらしい。悠はその名前に聞き覚えがあった。
『坂上（さかがみ）　智代（ともよ）』かつて、夜の街を徘徊しては不良達を叩きのめしていた少女の名前だ。

「あっ！　あんた達も見てたのね」
「藤林あ――――杏も来てたのか。……悪かったから、そんなに睨むな」

うっかり癖で『杏』を『藤林姉』と呼びそうになってしまい、それに不満の色を示した杏の眼光が鋭くなったので、悠はすぐさま謝罪する。

「まぁ許してあげるわ。でも！　次はないからね！」
「分かったよ、杏」

なら良し！　と胸を張る杏。その時、周りの野次馬と春原が感嘆の声を上げていた。何事かと気になった悠と杏は、春原を退かして窓から身を乗り出す。

「……坂上…智代」

昇降口から現れたのは、腰まで伸びた銀の髪に、頭頂部に黒のカチューシャをつけた少女だった。その少女こそが『坂上　智代』である。

「ってちょっとぉ！　何するんですか！　悠！　あんたさっき『めんどいからパス』とか言ってましたよねぇ！？」

「五月蝿いバカ原、木っ端微塵にするぞ」
「そうよ陽平！　人類じゃないようにするわよ？」
「さっさと帰れヘタレ」

侮辱と暴言の嵐。三人の言葉が順に耳に入るにつれ、春原の目尻にみるみる涙がたまっていく。哀れな奴、と思いながらも同情しない所はえげつない。

「う、うわぁあああああああああああん！」

込み上げる涙に耐えきれなくなり、春原は号泣しながらどこかへと走り去って行った。

「なぁもしかして、あの女アイツらの所に行くつもりか？」

智代が止まらずに、バイクが走り回る校庭へ向かって歩いて行くのを見ていた朋也は、独り言のように言う。

「らしいな、アイツらの所に勇んで行くって事は、それなりに自信があるって事だろ」
「それでも！　あの子女の子よっ！？　悠、あんた止めてきなさい」
「何で俺が行かなきゃいけないんだよ？　面倒臭いし、そう言うのは朋也がやりゃあいいじゃん」

気だるそうにため息を吐きながら、窓の所に顎を乗せる。

「め、面倒臭いってあんた！　それでも男なの！？」
「……」

悠の態度に、杏は激昂し胸倉を掴む。昼休みにしたような軽いも

のではなく、本当に怒っていた。人を殺さんばかりの鋭い目つきで悠を睨みつけるが、悠には全く動じずに冷めた目で杏を見ていた。

「…しゃあない、俺が行く」

二人の険悪さに、見かねた朋也が助け舟を出す。袖を捲り、準備をすませる。

「朋也！　あんた、大丈夫なの？」

「見たところ人数は八人。まぁ何とかなるだろ」

そう言って朋也は、杏の制止を振り切って校庭へと駆け出した。悠はそれを黙って見届けていた。

「ちょっと、悠が言うから朋也行っちゃったじゃない！　朋也が一人で八人も相手出来るわけないじゃない！」

「……しゃあないな、分かったよ」

「だからっ……えっ？」

悠の発言がよっぽど意外だったのか、素っ頓狂な声をあげ固まった顔で悠を見ている。

朋也が行くのならば、自分が変わりに行かなければならない。行くなら朋也が行けと言ったが、それは言葉の文で、本気で言った訳ではない。

「朋也を怪我させるわけにはいかない。アイツは……何にも変えられない…友達だから」

「……悠？」

その囁きは、確認だった。今杏の目の前にいる少年が、本当にい

つも顔を合わす少年なのか疑わしかった。普段はクールな癖に、変なところでおちゃらけて、飄々とした態度でつかみ所がない。それが杏の、悠の人物評価であった。しかし、今はどうだろう鋭い眼光が、固く紡がれた口が、怖いくらいに真剣な表情が杏の中に居る悠を、ガラガラと崩れていった。

「あんた……本当に…悠？」

訊かざる訳にはいかなかった。悠は、杏の顔を真っ直ぐに見て、口を開く。

「当たり前だろ、お前は馬鹿ですか？　本人に向かって訊くことか？　普通」

その顔は、いつもの悠であった。急な変化に戸惑う杏は、言葉を失いただ見つめるだけだった。

「それじゃあ、行ってくるわ」

片手を仰ぎ、悠は窓に足をかける。

「えっ？　ちょっ、あんたここ三階よ！？」

慌てて杏が制止するが、まるで聞く耳持たず。悠は窓を乗り越え、下の昇降口前に向かって身を乗り出した。

悠の気分は嫌ってぐらいに最悪だった。

三章：殲滅狂の奇刃（前書き）

今回の章は短いです。そのことを念頭に、閲覧いただけると幸いです。

三章：殲滅狂の奇刃

窓から飛び降りた悠は、物理法則にしたがってどんどん落下速度が上がっていった。頭上からは、杏の悲痛な叫びにも似た声が聞こえていた。普通の人間ならばこの速度で落下した場合、骨折は免れないし、最悪死に至る場合もなくはない。その為、悠は落下中に自分の左側に生えている木の枝を掴んで落下の勢いを僅かだが軽減して、バンッ、とものすごい音と共に着地に成功した。

「……やっぱ少し痛い」

調子に乗りすぎた、と悠は後悔する。しかし、こうでもしなければ朋也よりも早く到着する事は出来なかった。傷付く朋也の事を考えれば、このくらいはどうってことない、と悠はギシギシと痛む足を、歯を食いしばって己を奮い立たせる。昇降口前にも野次馬は集っており、悠を好奇と驚愕の顔で見ている。いきなり上から人が落ちてきたのだ、気にならないって事の方がおかしいのかもしれない。

足の痛みが引いてきた瞬間、悠は地を蹴り、まるで弾丸のような速さで群衆の中をすり抜けて目的地である校庭へと抜けた。人ごみを抜け、開けた視界には乗り込んできた工業高校の不良達が、様々なバイクに跨り正面で対峙する智代を威嚇していた。

「坂上ぃぃぃ！　覚悟は出来てんだろうなぁ！？」

「ぶっ殺してやる！」

「逃げようなんて考えるんじゃねぇぞ！？　そうなったらこの学校の奴を標的にするからなっ！」

脅し文句は三者三様だが、智代は怖気づいたりせず、毅然とした態度で不良達を見ていた。不良達の脅し文句を聞いていた悠は、な

んて頭の悪い奴らなのだろう、と過去に工業高校に在籍していたことを軽く恥ずかしくなっていた。

「お前たち、悪いことは言わん。直ぐに帰った方が良いぞ。今なら見逃してやっても良い」

凛とした表情で不良達にある意味での宣戦布告をする智代。四肢に震えなどは一切無く、悠は噂が本当であることを確信した。しかし、杏には女の子の代わりに不良を撃退せねばならない。しかたなく悠は、智代の横に立ち肩を掴んで自分の後ろへとやる。

「てめぇ！　なめたこと言いやがっ―――なんだお前は！？」

「なっ、放せ。いきなりなんだお前は？」

いきなり方を掴まれたのにびっくりした智代は、急な横やりを入れられた不良と同じような文句を悠にぶつけてきた。

「説明が面倒だから簡単に言うぞ。坂上　智代…お前は下がれ、俺が代わりにやってやるよ」

「あんな奴ら、私一人で十分だ。それに、何故私の名前を知っている？　どこかで会ったことがあったか？」

「……説明が面倒だから後にしてくれ。とにかく、女の子のお前がやるようなことじゃない…下がってろ！」

智代は“女の子”と言う言葉に反応し、急に大人しくなる。それに満足した悠は、殺気立った不良達を、目一杯に殺気を込めて睨みつける。

「ひっ……！」

先頭に躍り出た男が、悠の気迫に押され後ずさる。だが、こちらから攻めてきた以上男達にもプライドがある。ここで引いたら末代までの恥。先頭にいた男が、手に持った木刀を振りかざし、体に纏わり付く恐怖を振り払うように雄叫びを上げ悠にその木刀を振り下ろす。

「このやろぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」
「はっ、雑魚が生きがりゃ強くなるわけねぇだろ！」

校庭に出た少女に加勢すべく息を切らしながら校庭に出た朋也が初めて視界に入ったのは、直立不動のさっき見た少女。そして、男が振り下ろした木刀を半歩動いて身を反らし、不発に終わった木刀を握る男の右手を掴み、空いた右手に作られた拳が目にも止まらぬ速さで走り男の顔面を殴りとばす悠だった。

「いったい何がどうなってんだよ…」

訳の分らぬ事態に困惑した朋也は、とりあえず観戦することにした。

悠の拳をもろに食らった男は一瞬で意識を刈られ、崩れるように膝から倒れた。足元に倒れた男の頭を、悠は追い打ちをかけるように足で踏み潰す。既に意識のない男を見下ろし、悠は自分の体が震えていることに気がつく。しかし、決してそれは恐怖ではなかった。むしろその逆で、快感にも近かった。ブルブルと震える拳を眼前に出して見つめる。フラッシュバックしたように男を殴り倒した記憶が、鮮明に色あせることなく蘇った。

そうだ、と自らに言う。その顔が、暴力と狂気に染まっていた。元々自分は、あいつら不良と同じ側の人間だった。そう思っていると、悠の中にある理性というタガが崩れていく。もう、考えるのも

面倒だった。だから、今はこの感情に振り回されようと決意した。

「……お前ら、運がなかったなぁ。せっかく忠告してやろうかと思ってたのに、我慢できなかったこいつの所為で……全員三カ月は病院で離乳食ぐらしだな」

「ふ、ふざけてんじゃねぇぞ！　一人やったぐらいでいい気になってんじゃねぇ！！」

「おい！　ちょっと待てよ……あいつって、もしかして」

智代は軽いデジャヴを見ているような気がしていた。自分の代わりに出た金髪の少年は、どこかで見たことのある顔だった。風になびく金色の長髪も。見れば誰もが声を揃えて美形と言う容姿も。そして、堂々としていて、性格破綻者みたいな口ぶりも。何もかもが、自分のあずかり知らぬ記憶の根底に眠っている気がしていた。

軽い死刑宣告をしてきた悠を見ていた不良達は勿論のこと、守られている側である観客と化した生徒達は、今の普段とは違う悠に少なからず恐怖を抱いていた。悠が編入してきたのは二年生に上がる前の頃。編入生の紹介の時に出た悠を見て、女子たちは悠の容姿に顔を赤らめたりして、舞い上がっていたが。次の日になっていきなりの無断欠席。その後も毎日のように遅刻や欠席を繰り返し、いつのまにか朋也や春原と同じ不良のカテゴリーに入っていた。面倒くさがりで飄々とした不良少年。それが学校での悠の人物像であったが、今の悠を目の当たりにしてそれがガラガラと音をたて崩れていった。

興奮に近い状態にある悠は、煙草の入っているのとは逆の胸ポケットを漁り、一つの髪留めゴムを取り出した。それを手に通し、両手を額にやり前髪をオールバックにして手に持った髪留めゴムですべてを纏めポニーテールを作った。悠がポニーテールになった姿を見て、不良達とごく数名が反応する。

「や、ややっぱりそうだ！　あぁあいつ、『殲滅狂』じゃねえか！」
「遅ぇんだよ、気づくのが。仮にもお前らの元先輩だぜ…」
金と赤のツートンカラーの男の言葉を悠が肯定したとき、その男は得体の知れない疑惑からくる恐怖が純度の高い恐怖へと変貌した。
『殲滅狂』とは昔、悠がこの街で呼ばれていた通り名みたいなものである。その名の通りあらゆる敵を滅ぼすことから、その話が事を大きくし付いた名前だ。
「……殲滅狂」
智代が目を見開いてポツリと言う。
悠が『殲滅狂』だと言うことを、朋也は知っていた。初めて会ったときの悠は、とてもトゲトゲしくすぐに只者でないと分かった。逆に春原は全く気づかずに、自分の同じ金髪で、なのにかなりの美形で見た瞬間に因縁をつけてきた。当然、ケリは一瞬で悠の勝利として終わった。
「はっ、あんなの噂に決まってるぜ！　逃げた奴がそんなに強いわけねぇだろ、行くぞ！」
一人がそう言うと、自信を取り戻した不良達が一斉に悠へと攻めだした。
それからは一方的であった。四方からの攻撃は悉く回避され、悠の拳が、蹴りが、嵐のように不良達を襲い瞬く間に昏倒した人の山が出来上がった。
「はっ！　糞が、身の程ってやつを知りやがれ。これ以上痛い目を

見たくなかったら、二度とここには来るんじゃねぇぞ」

悠の罵倒は、気絶した不良達には届かず静寂に包まれ霧散した。一応目的は達したので、悠は倒れる不良達に背を向け、校内へ戻るべく歩き出した。

「……ちょっと待ってくれ」

校庭に朋也がいるのに気がついた悠は、さっきまでとは違い険のとれた顔をし。立ち尽くす智代の横を小走りで通った時、背後から声がかかった。

振り向くと、そこには険しい顔をした智代の姿が在った。

「なんだ？　俺は久しぶりに動いてしんどいんだ、手短に頼むぜ」

「簡単だ……。私は…お前が嫌いだ」

ただ一言そう言うと、智代は踵を返し校舎へと入っていった。後に残された悠は、先ほどの智代が発した言葉を反芻しながら空を仰いだ。まるで己の心を映す鏡のように空は雲で淀んでおり、より一層欝な気分になる悠であった。

四章：涙の理由（前書き）

今回はちょいと、と言うかかなりシリアスが振り込まれています。

四章：涙の理由

悠は、智代に嫌悪され別にどうでも良いと思っていると、駆けつけてくる朋也を横目にこの後の事を考えていた。

校庭で倒れている不良をやってしまった所為で、教師達は問題児である悠を放って置くわけがない。その証拠に、昇降口付近がさっきからザワザワと騒がしい。恐らくは騒ぎを見ていた教師が、悠を咎めるべく野次馬を押しのけているのだろう。

「悠。お前……なんで」

「気にすんなって朋也。お前はそんなに強くないんだから、俺が出しゃばるのは当たり前のことだろう？　それに、親友の為だ形振りなんてかまってらんねぇよ」

ニカッと不敵な笑みを浮かべる悠。そこには、先ほどまでの凶悪な男ではなく飄々とした金髪の少年が立っていた。

朋也はそこまで喧嘩が強いわけではない。この学校で不良と呼ばれているのは、毎度遅刻や授業中の居眠りが原因なだけでそこまで悪い奴ではない。そのことを知っているからこそ、悠は朋也の前に出たのだ。

目の前の親友は震えていた。しかし、恐怖ではない。耐えがたい程の怒り、憤怒である。朋也は怒っていた。悠の言っていたことは粗方間違いではない。そのことは本人である朋也が一番よく知っている。喧嘩の経験など数えるほどしかないのだから、自分がそこまで強いなんて思っていない。だが、それだから自分を親友と言ってくれる悠を許せなかった。親友ならば共に戦うべきだと間違っていると、朋也は悠に怒鳴ってやりたかった。

「馬鹿野郎！　お前に庇われるほど俺は弱くないぞ！　なんで俺が出てくるまで待たなかったんだよ！？」
「言ったろ、親友の為だって。俺はお前が傷つく姿なんか見たくないんだよ。…言っとくけど俺はホモじゃないぞ、勘違いすんなよ？」
「いや、そう言うわけじゃないから。とにかく、今後は必要ないからな」

真面目な表情が一転して、いつものふざけた態度になる悠を見てこれ以上なにを言っても無駄だと、朋也は経験から判断しため息を吐きながら校庭を後にした。
ちょうどすれ違いざまに体育教師が通り過ぎたが、助ける気の起きなかった朋也は校舎へと入って行った。

「榊原！　これは一体どういうことだ！？」
「見ての通りですよ先生。この人達がなんの理由も無く殴りかかったので身を守ったまでです。校舎から見てたでしょう？」
「…正当防衛だと言いたいわけだな？」

眉を顰め悠に疑いの目を向ける教師。信じる気など一切無い、という目をしているように悠は見えた。実際、本当に正当防衛なのだが、暴力沙汰になったのはひっくり返ることのない事実。現場も目撃されている為、悠の予想が正しければ停学は免れないだろう。

「そう言いたいのはやまやまですが、それでも先生は認めないでしょう？」

どこか諦めたように形を竦める悠。

「当たり前だ！　普段の素行の悪さもある……停学は免れんぞ」
「…ふぅ。分かりました、期間はどれほどで？」

「私が見た限りでも、確かに正当防衛に近い。そのため本来一週間なのを三日間に短縮しよう」

そう言って教師は悠に背を向けて去った。……三日間ちょうど良い休みだ、と悠はポジティブに考え未だ気絶している不良達を起こした。

「おい、起きろ」
「ぐぅっ……！」

倒れている不良達の一人に近寄り、悠は鎖骨より僅かに上に位置する場所を親指で強く押し込んだ。すると、耐え難い激痛に男は意識を覚醒した。苦痛に歪めた顔は、悠の拳の所為で所々腫れ上がっていて痛々しかった。

「二度とここには来るんじゃねぇぞ、分かったか？」
「ひっ…！　は、はい……分かりました」
「ならサッサとお仲間連れて消え失せな」
「は、はいっ！」

悠の鋭い眼孔に恐怖した男は、キビキビと仲間を起こし骨折している者も少なくないのにも拘わらず、バイクに跨り物凄い勢いで校門から出て行った。心なしかバイクの排気音にも、悠と交戦した時より弱々しく聞こえたのは気のせいだろう。

◇

事が終わり、悠は校舎に戻るが。途中、野次馬達に好奇の視線で見られて些か不機嫌になっていた。

三年の階に上がった時、未だ野次馬で溢れている廊下で見知った顔があった。その人物は、悠をけしかけた張本人でもあり、一応友人のカテゴリーに分類される人であった。

「……悠」

「何だよ杏、辛気くせぇ顔して。……生理か？」

そう言って、悠はすぐさま身を守る。今までの杏を見ての判断である。いつもならここで辞書が飛んで来るのだが……。

「ありゃっ…？」

骨を折るような打撃も痛みも来ない。喧嘩をけしかけた張本人である杏は、こんな事態になってしまった事を悔やみ自分に負い目を感じているように見えたから、きを紛らわせようとふざけた事を言ってみたが、どうやら逆効果だったらしい。

「……馬鹿」

「何だよ馬鹿って。せっかく代わりに行ってやったのに、馬鹿はないだろ？　馬鹿は」

「馬鹿って言ったら馬鹿なの！　何よ！　いきなり窓から飛び降りたと思ったらピンピンして！　心配するあたしの身にもなってよ……！」

杏は人の目も気にせず、感情を剥き出しにして叫びながら握り締めた小さな両手を悠にぶつけ、悟られまいと悠の胸板に俯き加減で頭をトンと当てた。泥と汗、それと返り血が混じった臭いが杏の鼻腔をつんざいた。

「バカッバカッ！　あんたなんて…あんたなんて大ッッッッ嫌いな

んだから！」
「おいおい、そりゃ酷くないか？　死なないって確証があったから飛んだんだ。別に死ぬつもりなんかさらさら無かったし」
「うっさい！　あたしを怒らせた罪は大きいわよ。覚悟しなさい！」

そう言って、悠の肩辺りをブリキのように繰り返し叩き続ける杏の目尻には、こみ上げる感情がせき止められず溢れ出る真珠のような涙が出ていた。溢れた涙は、留まることを知らず零れ落ちては悠の制服を濡らしている。
悠と杏のやり取りは、先程と比べては小さな事だが、野次馬達の興味をそそらせるには十分な材料であった。現に、新たな騒ぎを好奇の目で見つめる人が数多くいた。だが、その視線にいち早く気がついた悠は、未だ叩き続ける杏を庇うように抱き“殲滅狂”の部分を己の中から引き出し、殺気の絡んだ瞳で睨みつける。

――――死。

悠の視線がそれを物語っていた。気に入らない相手に、眉を顰めてやるようなガンつけではない。どんな殺し文句でもなく、どんな罵倒にもかなわず、どんな言葉で飾っても決して届かない。

――――圧倒的なまでの死の奔流。

それを体感させるような視線であった。
悠に恐怖した野次馬達は、何も見なかった事にして皆散り散りになり自分の教室へと戻って行く。一分も経たない内に、悠と杏がいる廊下は二人を除いて誰も居なくなっていた。
自分と杏以外誰も居ない閑静な廊下は、一種の異世界に近かった。延々と続きそうに見える通路に差し込む日の光。それを邪魔するように生えている木から、すり抜けるように入っている光がとても幻

想的で、眼前で未だ自分に当たる杏には悪いが心が落ち着いてきたのを感じていた。

「なぁ……杏」

「……なによ？　言っとくけど、許すつもりは無いからね」

「別に許してくれとは言わない。実際、俺が悪い所もあったわけだし。…でもよ、いいじゃねえか……こうやって無傷のままに戻ってきたし、朋也も、あの坂上　智代だって無傷だ。お前が何で怒ってるかなんて、俺には詳しく分かんねえ。当たり前だよな、俺はお前じゃないんだから。人は誰かになんて、なれない。……だから人なんだ。我慢するな、泣きたきゃ思いっきり泣け。我慢して溢れた涙なんてすっきりしねぇぞ」

杏の攻撃が止む。

とても近い距離にいる杏の体を、悠は両手を回して抱擁する。温かい杏の体温が悠を支配し、体中に浸透していく。

本当は、少し前から杏が涙を流していることは気づいていた。あれだけの涙が、制服を濡らしていたのだ、気づかぬ者などいない。涙を流すほどに負い目を感じていたのだろうか、と責任を感じての行動が今に至る。

「あっ……」

杏の反応は、さっきとは打って変わり、まるで借りてきた猫のように大人しくなり悠に体を預けてきた。

“泣きたきゃ思いっきり泣け”悠はそう言った。その言葉は、杏の心に深く突き刺さり理性を決壊させるには十分な言葉であった。

「うっ……！」

誰も居ない廊下と言えど、教室には沢山の生徒がいるわけで。それを気にして声を押し殺して杏は泣いた。ギュッと悠の制服を皺が出来るくらい握り締め、泣き顔を見られまいと悠の胸板に顔を押し付けながら泣いた。

悠は何も言わず、黙って杏を抱き締める。端から見れば恋人同士のように。

◇

「一生の不覚だわ！　まさかあんたの前で泣くなんて」
「まぁそう言うなって。泣いてる時のお前、すげぇ可愛かったぜ」

廊下での一件から十分後。ようやく泣き止んだ杏は、自らの痴態に恥じらい教室に戻れなくなり悠を道連れにして中庭にいる。

「ばっ、馬鹿っ！」

あんたなんかに、と顔を真っ赤にした杏に言われ、少しカチンと来た悠はニヤリと歪な笑みを浮かべながらからかう。　すると真っ赤だった杏の顔は、さらに紅くなり辞書ではなく拳でもって悠の鼻を殴った。

来ることが分かっていたのならともかく、完全な不意打ちに悠は回避行動が出来ないままに杏の拳を受ける形になった。

「がっ！　てめぇ、いきなり顔パンは無しだろ！　見ろよ、鼻血出てるじゃんか」
「あ、あんたが変な事言うからよ！　自業自得だわ」

ふんっ、と鼻を鳴らしてそっぽを向く杏。
その様子を見ながら悠は理不尽だ、と愚痴り鼻を押さえる。血の臭いが鼻をツンとさせ、悠は顔をしかめる。

「ったく、とんだ暴力女だぜ」
「悠が変な事言うのがいけないんだからね。あたしは悪くないわ」

そう言って杏はそっぽを向く。艶やかな長髪が眼前で揺れ、柔らかい香りが血の臭いしかしなかった悠の鼻腔に侵入した。
見た目だけなら美人なのに、と勿体無く思う反面それが“藤林杏”らしいとも思えた。勝ち気で負けず嫌い。でも、女の子らしい脆い部分もちゃんと持ち合わせている。自分に背を向けている少女に、普段人前では決して見せぬ優しい目をして悠は微笑んだ。

「そう言えば、俺明日から学校行かねえから」
「……はあ？　いきなり何よ、サボる気なの？」
「いや、停学になっちまったから、明日から三日は行かねえ…て言うか行けねえ」

それは、悠にとっては何気ない一言だった。
だが、杏にとってそれは罪悪感を持たせるに十分な威力を秘めていた。悠の言葉に驚き、そっぽを向けていた体を定位置に戻す。

「て、停学って……もしかしてさっきのアレで？　…あたしの、所為だ、あたしが……」

悠を殴った時の怒り顔が一変、杏の顔は罪悪感一色に染まり今にも泣きそうだった。
こんなにも泣き虫だったか？　と疑問に思いつつ、どうやって言い訳しようか悠は考えていた。

「答えて…それって、やっぱり私の所為？　だったら……！」
「莫迦、それだったら今頃こうして肩並べるかよ。人の所為で停学くらって仲良くお話出来るほど、俺はお人好しじゃねえよ」

そう、杏の所為ではない。これは自分の所為。杏が気に病むことではないのだ。仮定の話だが、あの時、杏がけしかけずとも自分とは違ってお人好しな朋也は必ず助太刀に入った筈。そうなれば、やはり悠はあの窓から飛び降りただろう。

過程は違えど、結果は変わらず“停学”になっていたのだ。
それでも納得のいかない様子の杏は、睨むように悠を見据える。
その視線にやれやれ、と悠は小さく囁き肩を竦めた。

「気にすんな。たまたまお前がああ言っただけで、どの道俺は朋也の代わりに出ていたんだから。この結果に不満はねえよ」
「……うん」

喉につっかかりのあるような返事。思い詰めた表情は、以前の杏ではなかった。怒ったり笑ったりはするが、決して人前で泣くことのない彼女は此処にはいなかった。恋する乙女のように感情の浮き沈みが激しい、普通の少女だった。

女の扱いに長けていない悠には、この状況はまさに針の筵（むしろ）と言えよう。彼女がうん、と頷いて以降言葉のやりとりが一切無い。
ふと、いつもより視界が広いと違和感を感じた悠は、自らの頭を触って確かめる。

「……あ」

忘れてた。
そう言えば髪を結んでいたのだ。普段はうざったいくらいに長い金髪は一つに纏められ、ポニーテールのままであった。

悠の中には二つの人格を持ち合わせている。と言っても、二重人格ではない。自己の中に眠る“殲滅狂”と言う存在を、脳内にあるスイッチを切り替える事によって表に出す。今ある“榊原悠”は“殲滅狂”としての本来の自分から滲み出た理性と言う名の偽りの人格に他ならない。
前髪を下ろした状態を“榊原悠”とし。前髪を上げポニーテールの状態を“殲滅狂”とする。

視界の有無によって、スイッチを切り替えているのだ。

とは言っても、簡単に女性の前ではそのスイッチが切り替わる事はない。手早く後頭部にあるゴムを解き、いつもの髪型に戻す。

「……眠い」

杏に届くか分からない小ささで、朗らかな春空の下気だるげに呟く。

それまで無言だった杏が言った。

「…ねえ、悠」

囁き、こちらを向く。
瞳には淀みが無かった。

「あんた、椋のことどう思ってんの？」

「藤林――いや、椋？　別に、いい奴ではあるな。面倒見が良いし、不良の朋也や俺に対しても態度を変えない。そういう所は好意的に思ってるけど、それがどうしたんだよ？」

藤林と言った瞬間、またも杏が不機嫌そうにこちらを睨んできたので慌てて訂正する事に。

「そうじゃなくて、女として……どう思ってんの？」
「女として？　何いきなりわけ分らんこと言ってんだ、お前は」
「いいから答えて――」

真剣な眼差し。冗談は言わせないと、その眼が語っていた。
何だか今日はついてない。本気でそう思えてきた自分が可哀想で仕方がない。

「――正直女として、なんて考えたこと無い。俺は誰に対してもそうだ。線の外側にいる奴らには隔てなくそうなんだよ。第一何でそんなことを聞くんだ？」
「なんでもない！　ただ気になっただけよ、気にしないで」

この話はおしまい、と言って杏は立ち上がった。その時、スカートがひらりと舞い、パンツが見えそうになった。美味しい光景を、男である悠が当然見逃すはずもなくギリギリで見えなかった事に、少しガッカリしていた。

「じゃあ、そろそろあたしは行くわね。…と言うか授業終わっちゃうし」
「あいよ、そんじゃあな」
「また明日！」

元気よく言い、杏は軽く右手を上げ身を翻して中庭を後にした。
走り去る杏の後ろ姿を眺めながら、悠は彼女が言った“また明日”と言う言葉の意味を考えていた。複雑に捉えなければ、何て事無い普通の挨拶だ。しかし、明日から三日間停学の悠に対し“また明日”と杏は言った。明日は家に居るのに……どういう事だろうか。

「訳分からんわ。まぁいいか、俺もそろそろ教室に戻るかな」

深く考えるのも馬鹿らしい。
思考をカットした悠は、立ち上がり軽く伸びをして、ぶはぁと大きなため息を吐き出した。

ちょうどその時だった。
授業終了を告げるお決まりなチャイムが、校内に鳴り響いた。
六時間目が終了した。それと同時に、悠が今日一日まともに授業を受けていないのが決定した。

「あぁ～鬱だ。これじゃ来た意味が無いじゃんか――――いや、そうでもないか」

今日の出来事を思い返してみる。
掃除当番の所為で朝早くから学校へと登校。その後、行くのを断念し近所の公園へと行き、古河渚の父である秋生との死闘。昼頃になってようやく登校したと思ったら、昼休みにすぐ突入し春原をイジメて杏にイジメられた。騒動もようやく収まり、中庭に行くと今朝坂の下で出会った儚げな少女、古河渚と出会いそこで初めて秋生の娘だと発覚した。

あの時の驚愕ときたら、もの凄かったと悠は中庭から一歩も動かずに感傷に浸っていた。

中庭で古河渚と別れ、五時間目は図書室でサボることにして入ったところ不思議な少女、一ノ瀬ことみと出会った。何をするにもどこかずれていて、でも賢そうな良い娘だと悠は思った。昼ご飯を分けてもらい、頭を撫で、また明日と言っていた。

「――――やべっ、明日行けねえじゃん俺。……でも大丈夫か、来なかったら来なかったで諦めるだろ」

と言いつつ、言い切れない自分がいる。ポケポケとしたことみを見ていると、放課後まで待っていそうな感じがしてたまらなかった。

でも、と脳内の不安要素を振り払い再び一日を振り返る。

ことみと別れ教室に戻ると、タイミングを見計らったように不良が押し寄せてきた。そこに坂上智代が現れ、杏が自分に行けと強要し変わりに朋也が出た。だが、親友の朋也に傷つかれては困る悠が朋也と智代の変わりに出て事態は収まり、悠には停学が言い渡された。

そして、智代の敵意剥き出しに言った“嫌い”という一言。

今になって考えてみると、何故そう言われたのか分からない。

――――そして、杏の泣き顔。

「……そう言えば、杏にも大嫌いって言われたっけ。…止めよう。余計鬱になりそうだ」

苦しい表情で呟いた言葉は、悠の心をさらに重くさせた。

言葉は時として呪詛となり呪いと化す。

今の悠にはピッタリの言葉であった。

五章：改名『榊原悠エターナル』

「まったく、悠も馬鹿だよね本性剥き出しにして停学くらうなんて」
「ウルトラ馬鹿のお前が、悠を馬鹿って言っても説得力無いからな」
「アンタ言い過ぎじゃないですかっ！？」

平常授業が終わり、悠、朋也、春原の三人は学校の近くに建っている学生寮内にある春原の部屋で、いつものように集まって惰性の限りを尽くしていた。七畳くらいの部屋に男が三人で、悠はむさ苦しくも思っているが、それが悠にはちょうど良かった。

春原の部屋は、己の性格を具現したようなレイアウトである。窓際にシングルベッドが設置してあり春原はそこを陣取っていて、シーツや掛け布団がしわくちゃに丸めて隅に追いやられていた。その上、洗濯物が床の至る所に放ってあり見るからに男の部屋と言った所である。

「しゃあねえだろ、成り行きでそうなっちまったんだから。それに本性は出してないぞ……誰も死んでなかっただろ？」
「いや、アンタ何あっさりと恐ろしい事言ってんですかっ！？」
「何だろうな…この俺の中で眠る狂気は春原で発散しなくちゃ気が済まない気がしてさ。喜べ、お前の為に残してやったんだぞ！」
「やったな春原！　お前幸せ者だぜ！」

朋也と悠は、これ以上に無いくらいの笑顔で冷や汗を掻く春原にサムズアップする。

「アンタら鬼っすねぇ！！」

悠の容赦ない両断を、春原は経験で本気でやりかねないと感じ取

った。出会ってから一年が過ぎたが、相変わらず悠は春原に対して容赦がない。春原と悠のファーストコンタクトは、春原が
「僕と同じ金髪なのが気に入らねえ！　しかも、僕よりモテてやがるぅぅ！」と一方的に因縁をつけてきたのが始まりだった。それから一年。朋也と春原と悠は、お互いを親友と呼び合う仲になっていた。……春原に関しては主従関係に近いが。

本気でビビる春原を見て、朋也は
「お前、ヘタレだなぁ」と更に追い討ちをかけて楽しんでいた。
いつも通りの平穏な日常を眺めながら、口が寂しくなった悠は制服の胸ポケットからメンソールの煙草を取り出す。

「あっ、また吸うのかよ。ほんとヘビーだよな、悠って」
「あんま吸いすぎるとそのうち肺癌になるぞ」

煙草をくわえようとしたところで、二人に難癖をつけられむくれる悠。この部屋で吸うのは、初めてではないがその度にこうやって文句を言われるのだ。

「いいじゃんか、俺の体は俺が一番よくしってるよ」

投げやりに言って、部屋に煙草の煙が充満しないよう窓を開ける。学生の身である為、喫煙がバレたら停学どころか退学になるかもしれない。もしかしたらの事を考えての、悠なりの配慮である。その時に、横で非難の目を向ける春原をベッドから蹴落とすのを忘れない。
ドゴッと春原の鳩尾に鈍い音が極まり、おげぇ！　と気色悪い悲鳴を上げて転がり落ちた。

「…なんで……お…れだ……け？」

「不幸の星の下に生まれたお前が悪いんじゃないか？」
「蹴りやすい位置に居るお前が悪い」

しどい、と遺言を残して春原は意識を手放した。
気絶した春原を尻目に、悠は煙草に火を灯し、朋也は部屋に転がっていた漫画に目を通す。
――――いつもの光景であった。

◇

春原が昏倒してから数分後、相変わらず煙草を吸っている悠に、さっきまで漫画を見ていた朋也が読み飽きたのか悠に話しかけた。
「そういえばお前、一ノ瀬ことみって知ってるか？　俺達と同じ学年なんだけど」

その名前には聞き覚えがあった。

「知ってるよ。今日の五時間目は、図書室にいたからな」
「やっぱりか……、お前が中庭で杏と話してる時、普通に授業出るのが馬鹿らしくなって図書室に行ったんだよ」

根元近くなった煙草を、あらかじめ用意した少量しか残っていないペットボトルに入れ朋也の方を向く。ペットボトルの底に残った液体が煙草の火を消し、簡易的に灰皿の役割を果たしているのだ。
「無視されたかっ？」
「何でそんなに嬉しそうなんだよ…」

一瞬だが朋也の表情が曇ったのを、悠は見逃さなかった。

ベッドから飛び降り、下で眠る春原を踏み潰し再び蛙を踏み潰したような悲鳴が響いたが。そんな事、悠は気にせずこれ見よがしに追求する。その表情はとても輝いていた。

「…されたよ。最初は何言っても心ここに在らずって感じだった。けど、本を切り取ろうとしたのを止めたら、嬉しそうに振り返って“…悠君？”って言ってたからさ。少し気になったんだ」

「そうかそうか。お前もやっぱりされたか…、ってかアイツまた切り取ろうとしたのかよ。懲りねえやっちゃ」

感慨深く頷き朋也に激しく同情する。ことみが誰彼構わず無視する奴なのだと分かり、自分にのしかかっていたダメージが降りて嬉しかったのだ。

悠の不可解な行動に呆れつつも、朋也は構わず話を続ける。

「実はな…俺、アイツと昔会ったことあるんだよ」

「はっ？　昔？　それって、あれか？　小さな頃遊んでたら道に迷って、ちょうど目に入った家に好奇心で勝手に入ったらことみん家だったとか……そういうフラグ的な何かか？」

「…何でそんなにピンポイントなんだよ、ことみから訊いたのか？

…それと、今の台詞、春原みたいだぞ」

「…謝るからバカ原と一緒にしないでくれ」

頭を下げ謝罪する悠。

だが、悠の言ったことは本当だったらしい。朋也が本当に驚いた顔をして、頭を下げている悠の頭頂部を見ている。

冗談で言ったつもりなのに、見事に的中した事には悠自身も驚いていた。

「……このラブコメ野郎」

頭を上げ恨めしそうな眼差しで朋也を睨む。困ったような顔をして朋也は肩を竦めるが、悠にはそれすら自分に対する皮肉にしか見えなかった。

羨ましくなんかないぞ、と自分を叱咤して再び春原を蹴飛ばしベッドに飛び乗る。

「ぐぺぇ！　人が気絶してるってのに容赦ないっすねアンタ！」
「五月蝿いぞ、サンドバックのくせに人語を喋るな」
「ぼ、僕がいくら温厚な性格だからって……言い過ぎじゃないかな？」

そう言った春原の口端はつり上がって、ヒクヒクと震えていた。
巻き込まれると面倒だと思ったのか、朋也は既に手元にあった漫画を読み始めていた。
悠は春原を無視して再び煙草を吸い始める。後ろで春原があーだこーたとブツブツ文句を言っていたが、そんな些細な事より満天に広がる星空を眺めている方が百倍良いと思っている悠は、空から見下ろす風景はどんな気分を湧かせるのだろう、と呑気に闇が支配する世界に浸っていた。

忘れかけていた質問を、朋也が思い出したのはその時だった。

「そういえば、お前なんでバットなんか持ってんだ？　まさか、これから喧嘩しに行くわけじゃないよな？」

扉の角に立て掛けてあるバットを顎で差しながら、朋也は言う。
放課後、学校から春原の部屋へ行く途中から気になっていたが、な

にやら考え事に耽っている悠にタイミングを外され訊き逃していたのだ。

「……」

「……悠？」

返事は無い。

心なしか悠の体は小刻みに震えていた。

まさか本当に喧嘩しに行くのだろうか、と一瞬怪訝な眼差しで悠の背中を見つめるが杞憂であった。

「忘れてたぁ！　あのオッサンに返すの忘れてたぁ！」

「はっ？　返すって、オッサンって、なんだ？」

とんでもないことを忘れていた。

春原の部屋に立て掛けてあるバットは、今朝秋生とやりあってそのまま持ち出した物だった。本当は、放課後にでも『古川パン』に寄って返そうと思っていたのだが、いつもの流れでここまで持ってきてしまったのだ。

まだ吸いかけの煙草をペットボトルに入れて消火し、未だぶつくさ言ってる春原を膝で蹴飛ばしながらバットを手に取る。

時刻は八時を回って、もう直ぐ九時になる所。一般家庭ならまだ起きているだろう。

「わりぃ、今日はもう帰るわ。このバット人のだからよ、返しに行かなきゃ！」

「ちょっとぉ！　それより、僕にニーキックしたことを謝ろうよ！」

三度目の打撃に、顔を腫らした春原が抗議する。

だが、そんな事には目もくれず悠はバットを持って春原の部屋を後にした。

「……可哀想な奴だな、お前」

朋也の哀れみは静まり返った室内に霧散し、静寂が支配した。

◇

道にポツポツと建つ夜の街灯の中、バットを抱えた一人の変質者が疾走している。この姿を一般人に見られでもしたら、変質者――――悠は即座に通報されるだろう。

途切れ途切れの呼吸で走る悠は、古川パンを目指していた。場所は正確に分かっているものの、実際到着したところでどうすれば良いのか悩みながら。

いきなり入って秋生を呼びつけようか。

それとも、こっそりと店の前にでも置いておこうか。いや、それじゃあ誰かに盗られてしまうかもしれない。

結局、決まらないままに走ること数分。悠の足は古川パンの前で立ち止まっていた。店内にはまだ明かりがついてはいるが、レジには誰も居ない。

やはり遅すぎただろうか。普通に考えれば当たり前だ。夜に開いているパン屋など、在りやしないのだから。が、悠は構わずにガラス戸を開け中に入る。

「ちわー、榊原運輸でーす。オッサンのバットお届けに参りましたぁ！」

と叫んでから数秒後。は～い、と返事が帰ってきて、レジの奥にある階段から一人の女性が降りてきた。その女性は豊満な胸の前で両手を合わせ、慈愛に満ちた表情をしていた。

「秋生さんにお届け物ですか？」

柔らかな笑みを浮かべ、女性は悠に訊く。その女性は、今朝秋生と一緒に野球をした際に現れた、秋生の妻『早苗』だった。

悠は手に掴んでいたバットを早苗に私言った。

「これ、朝オッサンと野球をやった時に持って行っちゃたやつ。遅れてスマン」

「ありがとうございます。秋生さん、朝からバットが無いって落ち込んでいたので助かりました」

そう言ってバットを受け取る早苗。

落ち込んでいたって、子供かよ、と悠は呆れるが秋生が落ち込む姿が、手に取るように思い浮かんでしまうのがなんだか嫌だった。

「秋生さ～ん！　今朝言っていたバットが帰ってきましたよ～」

「ちょ、別に呼ばなくても！」

バットを届けてきただけで秋生に会うつもりなど一切無かった悠は、慌てて早苗を静止しようと試みるが、時既に遅し。二階から、ドドドドドドドッ！　と地鳴りのような音と共に煙草を咥え、鋭い眼光の秋生が駆け降りてきた。正直、悠は秋生に会いたくなかった。朝の野球での屈辱もあるが、何より秋生と接していると己の中に隠している“ナニカ”を見透かられそうで……嫌だった。

「なぁにぃぃぃぃぃぃぃぃ！　見つかったのか！？　…って、お

前は今朝の負け犬野郎じゃねぇか。なんだ、また俺様にやられに来たのか？」
「誰が負け犬だ、別にアンタに勝負を挑みに来たわけじゃねぇよ。朝置いてったバットを持って来たんだ。感謝しな」

負けず嫌いな性分な所為で、憎まれ口を叩いてしまう悠だが。その態度に起こる様子は無く、逆にニカッと笑みを浮かべ秋生は悠の肩を抱きよせる。

「かーっ！　素直じゃねえなあ！　そうか、お前が持ってたのか。…よしっ早苗、コイツに飯食わせてやろう！」
「それは良い考えですね秋生さん！」
「……おい、なに勝手に決めてんだよ――――って聞いてねえし」

抗議の声も聞く耳持たず、秋生は悠の肩を掴んだまま離さずにグイグイと二階へ上げようとする。回された腕を外そうと抵抗を試みたが、それも叶わず、仕方なしに悠は古川家での夕食を余儀なくされた。

木の軋む音を聞きながら、ふとあることを思い出した。古川渚の事である。渚は確か隣で豪快に笑っている男、秋生とそれを笑顔で見守る早苗の娘。

「――――ってことは、上に古川が居るって事か？」

“昨日の今日”より質の悪い“今日の今日”だ。まさか学校で軽く話した程度の人の家にお邪魔する事になるとは、夢にも思ってなかった。完全に渚の存在を見落としていた悠のミスだ。

「なんだなんだ？　湿気た顔して。…と、そういやぁ家には俺と早

苗に、もう一人家族がいるんだ。娘でな、名前は――――」
「渚……古川渚だろ？」

遮るように呟く。秋生は、なんで知ってる？　と言いたげな顔で悠を見据えている。
階段を登りきり、居間と廊下の境界である襖の前に立つ。隙間から微かに夕飯の香りが漏れていて、匂いを嗅いだ悠は今夜はトンカツだ、と予想する。

「お前、渚の知り合いだったのか？　よく見ると同じ制服着てるし」

ジロジロと観察するように悠を見る秋生に、今に分かると言って、秋生でも、早苗でもない人の気配がする境界を開いた。
予想通り、居間には渚が一人正座で両親の帰りを待っていた。襖の開いた音に気がついた渚は、花が咲いたように笑顔になり、

「あ、おかえりなさいお父さん…と、榊原さん？」

と、前半笑顔だったのだが、悠の姿を確認するや否やその表情が石のように固まった。途轍もなく分かりやすい奴、と悠はからかいたくなるが、厭な予感しかしないので渋々我慢する事にする。

「よっ、不本意だが上がらせてもらってる」
「あ、えっ？　どういう事ですかお父さん？」
「見たまんまの通りだ、娘よ」

ふんぞり返って秋生は言った。が、それでは説明になっておらず、渚は
「お父さん訳が分かりません」と困惑した顔で再度説明を求めた。

「オッサンのバットを返しに来たんだけど、何故か一緒に飯を食う羽目になった…って感じだ」

横から悠が補足説明をし、渚の真ん前、向かいの席に座る。かなり堂々とした悠の振る舞い。しかし、誰も不快には感じなかった。逆に、そうしていなければ違和感を感じてしまう、と知り合って一日と経っていない秋生と渚は何故だか自分にも分からぬが、そう感じていた。

そこらに溢れかえっている女性より美しい髪や、何者にも決して畏れぬと言っているような顔の表情が、秋生と渚に今のような印象を植え付けたのだろう。

「そうだったんですか。いきなりでしたので、ちょっとビックリしてしまいました。…えへへ」

「ふっ…俺からの愛娘に捧げる、ちょっとしたサプライズさ。さぁ、遠慮無く『お父さんカッコ良いです！　もう、大好きですぅ！』って叫びながら抱きついて良いぞ！」

ガバッとこれでもか、と言うぐらい両腕を大きく開き秋生は弛んだ笑顔で言う。

自意識過剰と言うより病気だ、どうしようもない親バカだ、と悠は呆れて肩をすかすが、渚がどういった反応を示すのかはかなり気になる。実際、悠の見たところの渚は“顔は可愛いし礼儀正しいが……結構変な奴で危なっかしい”といった感じ。

気になって渚を見ると――――。

「そんな恥ずかしい事出来ません！　私、もうそんなことする年齢じゃありません……それに、榊原さんが見てます」

「よし小僧、お前は帰れ」

「無理矢理呼んどいてそれかよ。自分勝手すぎるだろ」

「そうですよ秋生さん、折角渚のお友達がいらっしゃったのですから。ゆっくりしていってくださいね『神原さん』」
「…俺、『榊原』なんすけど」

台所から戻った早苗の天然ボケに、なんのリアクションもせず正論を述べる悠だが。聞く耳を持たぬ古川家は、唯一まともな発言をする悠を放置し話は進み始める。

「そうだぜ早苗。この小僧の名前は……『榊原銀河』だったよな？　てか、もうそれでいいだろ？」
「おいオッサン。銀河ってなんだ？　銀河って？　……それ虐められるから。確実に虐められる名前だから」

絶対にワザとだ、とも言い切れない。何故ならそう言った秋生の顔は自信に満ちているのだから。
よくよく考えてみると、秋生にはちゃんと自己紹介をしたはず。しかも、あの時も『銀河』と呼ばれていた気がする。だからといって『銀河』は……。

「じゃあなんて名前なんだよ小僧」
「小僧じゃないからな、オッサン。前も言ったけど俺は榊原悠って名前があんだよ」
「悠だぁ？　けっ、みみっちい名前だなぁ。いっそのこと……そうだな『大宇宙　銀河』にしろ。格好いいだろ？」
「良いですね。『銀河さん』とお呼びして良いですか？」

にこやかな顔で早苗が言うが、悠は嬉しくない。
この家族は変な奴しかいないのだろうか。と、頭を抱える悠。名前に大きいも小さいも無いだろうに。

「断る。俺は榊原悠であって、大宇宙でも銀河でも無い」
「ちっ、文句の多い奴だな。おい早苗、なんか良いのはないか？」
悠は、秋生の理不尽な言葉にツッコミを入れたいのを我慢し、早苗に助けを求めるように見やる。
当の早苗は
「そうですねぇ…」と言って、目を瞑り真剣に考え始めた。
「名前の下に何か付けると言うのはどうでしょう？　大きいだけでなく、時空の流れも超越した存在と言うことで…『榊原悠エターナル』」
ピッと右の人差し指を上げ、自信満々にそう言う早苗は、悠から見ても高校生の娘が居るとは思えないくらい若く、可愛いかった。が『エターナル』は無しだろう。これでは『悠』がミドルネーム扱いになってしまう。
「おっ、良いじゃねえか！　これからはそう名乗れ『エタノール』」
「ものの数秒で間違えてんじゃねぇよ。それでもこの名前は認めないけどな」
ポンと肩を叩いて秋生は誤認した名を言うが、悠は認めない。恐らく認めてしまったら最後、秋生はともかく早苗は永遠に『エターナルさん』と呼ぶだろう。
知り合って間もないが、見るからに天然の渚を遥かに超越している。
「榊原さん凄いです。もうお父さんとお母さんと仲良しさんです」
「嬉しそうな所悪いんだが。これのどこが仲良しに見えるんだ？」

悠と秋生に、早苗のやり取りを微笑ましく眺めていた渚だが、その発言は誤りだ、と悠は思う。
ツッコんだ途端、秋生は笑い。早苗と渚もまた吊られたように笑いだす。
絵に描いたようなアットホームな家族の光景は、悠にとって自分には無いもので羨ましく思ったが、同時に憎らしくもあった。

六章：停学初日（前書き）

久し振りの更新。
朋也と春原の出番は次回まで、と言うことで。
ちょいとスランプ気味な気がするのは……気のせいじゃない！

六章：停学初日

古川家で夕飯をご馳走になった悠は、途中まで渚に送ってもらい帰路へと向い、一戸建ての自宅へと帰っていた。

「ただいま……なんて言っただけ無駄か…」

玄関を開けると家の中は暗闇が支配し、人の気配は一切無かった。玄関先にあるスイッチを押し電気を付ける。パッと明かりが点灯し、廊下と悠を照りつける。ローファーを乱暴に脱ぎ捨て、廊下の左側にあるリビングには向かわず右側にある階段を上り、突き当たりにある『ゆーちゃんの部屋』と可愛らしい文字がプリントされた板のぶら下がった扉を暗い表情で開く。

室内にはテーブルとベットのみで、他に家具は見当たらない。途轍もなく殺風景な部屋で、悠は学校指定の制服を脱ぎ捨てドカッとテーブルの前に座り込んだ。

物音一つしない部屋は、まるで悠以外は誰も存在しない世界のようで、それは悠そのものを表現しているようであった。

「…暇だ。停学くらって学校が無くなったのは良いが、こうも暇じゃしょうがない」

脱ぎ捨てられた制服を手繰り寄せ、胸ポケットから煙草を取り出し火をつける。もわっと広がる紫煙は視覚できない範囲で霧散するが、それは臭いとして室内に居座り続けている。

真っ白な天井を見上げ、さっきの出来事を思い返してみる。

笑顔に囲まれた食事。家族みんなが幸せそうに暮らしている。それは、悠には叶わぬ夢の欠片。

「なに感傷に浸ってんだろ、俺。馬鹿らしい。もう寝よう」

煙草を消し、灰皿に入れ、身に着けた服を脱ぎ捨て、スエットとTシャツに着替え、もぞもぞとベットに潜り込む悠。

煙草の臭いが染み付いた布団は、少し黄ばんで汚らしく見える。

寝ぼけ眼になりながら、悠は明日からの事を軽く考えてみる。

停学期間中は、基本的に外出は禁止されている。が、悠がそんな事守るわけもなく、何処へ行こうかと考えている。選択肢としては春原の部屋があるが、個人的に行きたくはない。行った所で春原は学校があるし、遅刻はしてもまず休みはしないだろう。それに、朋也の家も相手方の事情が事情なので上がるわけにはいかない。

……これでは行くところが無いではないか。

つくづく自分には友達がいないのだと痛感する悠であった。

意識はちょうどここで、テレビの電源が落ちるように途切れた。

◇

翌朝、目覚めたのはインターフォンの鳴る音だった。

始めに一回。そして二回、三回と繰り返し鳴る音に、居るのは分かっているのだから早く出ろ、と言う相手方の心意が読み取れる。

「んっ……はいよ〜。んだよ、鍵なら開いて……ないか」

寝起きと言うこともあり、少々不機嫌になりつつ寝ぼけ眼の三白眼で玄関の小さな覗き窓を見る。

小さな円を描いた窓の覗き窓には、今の悠と同じ三白眼をした杏が立っていた。本来学校があるはずの杏は、制服ではなくジーンズに長袖の服を身に纏い、まるでこちら側が見えてるのではないかと疑いたくなる程的確に覗き窓を睨みつけていた。

「…なんで居るんだよ」

呟く。でもそんなんで杏は居なくなるわけでもなく、再度インターフォンを鳴らし板一枚挟んだ先に居る悠を呼び続ける。

正直会いたくない、と言うのが悠の本心。昨日、なんだかんだあって拗れたりしたものの、一応仲直りはした。そもそも喧嘩かどうかも分からない所だ。そんな事があった翌日こうして学校をサボって家に来る、と言うのが悠には信じられなかった。傍若無人で唯我独尊、その上に猪突猛進な彼女が我が家に来た。

「…厭(いや)な予感しかしてこないんだけど」

ため息をし玄関のノブを掴む。早くこの境界を開かなければ、悠の明日は無いと言えよう。

気だるげに扉を開けると、やはり不機嫌な顔をした杏が仁王立ちして悠を睨んでいた。

「ちょっと、あたしがチャイム鳴らしてんだからサッサと出なさいよね！」

「そんな事言われても……いきなりどうしたんだよ。今日は学校の筈だろ？」

「サボったわ」

キッパリとそう言う杏に、悠はある意味の関心を持てた。言い切った杏は

「もう良いでしょ？」と言って家主の許可無く家に上がりこんだ。
なんだか色々すっ飛ばしていておかしい、とズカズカと歩く杏の背中を見ながら悠は思った。

◇

「説明を要求する」
「だから、サボった。それでもってアンタの家に来た。以上」
「端折りすぎだ馬鹿野郎！」

いきなり悠の部屋に侵入を試みた杏を、どうにかして妨害しリビングに落ち着いた。別に見られて困る部屋ではないが、悠は他人に自分の何かが見られるのを何より嫌うのだ。その為、それが例え朋也であろうとも絶対に招き入れたりはしないのだ。

悠の部屋に入れなかった事に、些か不満なご様子の杏だが、真剣に拒否するので仕方なしにガサ入れは諦めたようだ。

「…お礼と、謝罪に来たのよ」

本当に申し訳そうな面持ちでそう言い、悠がもてなしとして出したお茶を啜る。途端、杏は渋い顔をして
「苦っ！」と言葉を漏らした。

「何これ！？　すんごく苦いんだけど！」
「嫌がらせにお茶の葉を三倍にしてみました」

ゴスッ、と嫌な音がした。
説明すると、嫌がらせを告白した悠に怒った杏が、どこからともなく六法全書を取り出し悠の顔面に投げ当てた音である。

「〜〜……っ！」

あまりの痛みに声にならない叫び声を上げ、床を転がりながら悶絶する悠。結果が解りきっているにも拘わらず、それを実行してしまう。なかなかのチャレンジ精神である。

「ったく。くだらない事やってないで、さっさと新しいお茶出しなさいよ」

「おい、なんでいつの間にか命令口調になってんだよ。お前はあれか？　姫様か何かと勘違いしてないか？　せいぜいお前はハイジに煩く躾るロッテンマイヤーさんみたいなもんだ」

ふんぞり返りながら、未だ杏の辞書に脅えているにも拘わらず悠は憎まれ口を叩く。

杏の面が引きつっているが、構わない。これぐらいの事をしなければ悠の気が済まないからだ。

「ねぇ、悠。…もう一度くらいたいの？」

「いや、本当もうすんません。マジで勘弁して下さい」

本日の教訓

「無闇に杏を怒らせるな」

憤怒の表情を浮かべる杏に、悠は即座に平謝りをする。殲滅狂としての威厳は何処へやら、今の悠はただ杏にひれ伏すだけの家畜に等しかった。

◇

寸劇と大差ないやり取りが終わり、今度こそ悠は本題に入った。

「なぁ、今度こそ本気で訊くけど…何で来たの？」

麗しく流れる金髪をゴムで纏め、ポニーテイルにし、新しく出したお茶を飲む杏に訊く。さっき出した三倍茶とは違い、ちゃんとしたお茶の味に満足気な杏は機嫌良く切り返した。

「言ったでしょ？　償いと、御礼だって。昨日のいざこざでアンタは停学になった。でも、それはあたしがアンタをけしかけた所為であって、アンタに非は無い訳。だから償い。だから御礼なの。言っている意味、解る？」

杏が言いたい事は、不良である悠にも直ぐ解った。と言うのも、悠が杏の事を理解しきっているわけではなく、悠の頭脳がずば抜けて良いからである。以前、悠がこの光坂高校に編入した際に満点を取ったという事実。それは決してまぐれと言うわけではなく、悠の知能指数が二百を超えているからである。

杏は悠が喧嘩をし、停学になった結果をけしかけた自分の所為だと思った。その為に“償い”。

結果はどうあれ、悠は杏の願いを聞き入れ智代を助けた。その為に“御礼”。

“償い”と“御礼”二つの感情を手っ取り早く一度に済ませる。それが杏にこの様な行動を起こさせたのである。

「言いたい事は解った。だからって何をする？　何がしたい？　俺に分からない事と言ったらそれくらいだが、これ以上の謎なんか無いぞ」

「そうねぇ…。悠はアタシに何して欲しい？」

唸るような声を出し首を傾げ、わりと機嫌良さそうに杏は訊く。
何をして欲しい？　そう言うとゆう事は、何を命令されても承諾するということだろうか。それならば……、と邪な考えが悠の頭をよぎる。

「……」

が、そんな事言うのは自分のキャラではない。例え駄目元で言ったとしても、何をされるか分からない。
結果が鮮明に想像出来、ゾクッと悠の背筋が凍る。杏自体に劣情を抱いているわけでも無いのに、自ら死地に赴くなど愚の骨頂。喉まで出かかった『一発ヤらせろ』と言う言葉を、熱いお茶と一緒に飲み込む。

突然の行動に、杏は悠を訝しむがコイツがおかしいのはいつもの事だ、と即座に切り替え黙って悠の言葉を待つ。

「……なぁ、杏。それは絶対に言わなきゃならないのか？　俺は別に、お前に対して恨みなんか持ってないし、この結果に後悔はしてない」

鋭い瞳を更に細め、湯呑みを両手で包むようにして持っている杏に確認する。出来れば無しにして欲しい。自分には、そんな願いも無ければ欲と言うものすらほぼ皆無なのだから。人並みに性欲は持ってはいるものの、理性で抑えられるレベルだ。よって今現在の悠に、杏にお願いする事など無い。

『まぁ、悠がそう言うなら無しでも良いわよ。アタシも面倒くさいし』に近い意味合いの言葉を望んでいた悠だが、その期待は簡単

に敗れ去った。

「駄目よ。アンタに借りを作ったままなんて、このアタシのプライドが許されないの。……それに、こうでも言わないと…アンタこのまま学校、辞めそうだし」

「…杏……お前…」

何処かのラブコメ主人公みたいに最後だけ聞き取れない、なんて都合の良い引き延ばしスキルなんか持ち合わせていない悠は、杏の本心を聞き――――阿呆ではないか？　と思った。

「…阿呆かお前。なんで高三になってまで自主退しなきゃなんねぇんだよ」

「なっ……阿呆って何よ！？　阿呆って！　アタシなりに考えた結果なんだから、ちゃんと考えてよ。悠が望なら……アタシ…」

美少女の部類に入る杏は、顔を紅潮させ恥ずかしそうに俯いた。

その光景を見て、悠は思った。これが杏でなく――――なら自分は我を失い襲っていたであろう、と。何故杏がそこまでして願いを強要するのか分からないが、そこまで言うのであれば……。

「なら…一つだけ頼みたい」

「何？　言っとくけど、金関係は駄目よ」

「簡単だ。…停学明けの一週間で良い、俺に昼飯をくれ」

それなら問題無いだろ？　、と後に告げ残り少ないお茶を飲み干す。ふわりと和の香りが口腔内に広がり、体の芯から熱くなってくる。

悠は杏が料理を出来るとは思えない為、あえて“作って”とは言

わなかった。彼女のような性格上、八割の確率で料理は出来ないだろう、と今まで知り合ってきた経験を生かしての予想であった。例え作れなくても、彼女には双子の妹である『藤林　椋』がいるので大丈夫であろう。我ながら用意周到だな、と自画自賛するのであった。

「昼飯？　そんなんで良かったら良いわよ。今更一人分くらい増えた所で大差ないし」

本当にいやらしい事を命令されるのかと思っていたのか、杏は一瞬ポカンとした表情をしていた。発言の内容が少し気になる悠だが、あまり突っ込んで訊くと後悔する気がしたので気にしないことにする。

さてと、と言いながら悠は腰を上げ自分を見上げる杏を見る。紫に近い色合いの長髪は、まさに杏といった感じでよく似合っている。妹の椋より若干つり目気味の瞳は、悠の行動に疑問を持っているのかいつもより僅かにだが細くなっている。

悠と杏以外誰も居ない居間。時刻は正午を過ぎたばかり。今ならば杏を学校に向かわせても五時間目には間に合うだろう、と悠は思い告げる。

「話は済んだんだ、流石に学校に行ったらどうだ？　クラス委員長がサボったらいかんだろ」

「そんな事言ったって、今は私服だし、一度家に帰らなきゃ制服は無いわよ？」

「原付があるだろ、原付が。知ってんだぞ、お前が原付で学校に通ってるの」

悠の思わぬ言葉に、杏の表情が歪む。何故知っていると言いたげな顔で悠を睨む。
何故に知っているかと言うと、遅刻ばかりの悠には同然の事なのだ。時たまに早め……と言っても遅刻寸前なのだが。悠が、案の定誰も居ない通学路を歩いているとき、原付に跳ねられる朋也を見かけたのだ。始めは、どこのどいつが朋也を跳ねたのか確かめて病院にでも搬送してやろうか、とも思ったが相手が分かった瞬間にその考えは消え去った。

『ごめんごめん。まさか朋也だとは思わなくって』
『それは暗に俺じゃなかったらひき殺してたって事か…？』

新人芸人のコントみたいな事を、道のド真ん中で繰り広げる二人。その光景を目の当たりにした悠は、見方を変えたら恋人同士にも見えなくもない二人に駆け寄ることはせず、滅多に見せない柔らかな微笑みを浮かべ、静かに去った。

「な、なんで悠がその事を……。アタシがバイク通学してるのは椋と朋也しか…」
「だから、その朋也が被害に遭ってるのを見てたからだよ」
「なっ……！」
「それにしても、お前らよく似合ってたな。まるで新人芸人か…恋人同士みたいで微笑ましかったぜ」
「んなぁっ！　こ、恋人同士ですってぇ！？」

二度頭を頷き、反芻するようにうんうんと唸る悠。
一方杏は何が気に入らないのか悠には分からないが、顔を真っ赤にしながらみるみる鬼のような形相へと変貌していく。

嗚呼、これが俗に言う地雷を踏んだと言うやつか。何がいけなか

ったのだろう、と後悔するが時既に遅し。杏はお約束の辞書を取り出し、投擲の体制に入る。

「ま、待て。待つんだ杏！　一体俺が何をしたというんだ？　芸人か！？　芸人に例えたのが悪かったのか！？」

必死の抵抗を試みるが、杏は止まらない。大砲のように、一直線に悠との距離を詰め眼前へと迫り来る。回避行動をとろうとするが、足が動かない。

否、動かせない。

殲滅狂と畏れられた自分が、たかだか普通（？）の小娘一人に恐怖し足が動かないなど、悠は認めたくなかった。

「この！　…朴念仁の、唐変木がぁあああああ！！」

「へぶっっ！」

投げるのかと思った杏の辞書は、手から離れる事無く悠の頬を殴打した。

――角は……硬くて、かなりの威力だ。薄れ逝く景色のなか、そんな事を考えながら仰向けに倒れる体を踏みとどめようとして、頭を起こそうとする。

――あ、水色。

意識が炸裂する最中、最後に見た水色の生地が悠の眼球は疎か、脳髄にまで焼き付いていた。

こうして、悠の有意義な停学と言う名の休日初日の巻くは、閉じた。

七章：停学二日目～友達～（前書き）

なんかもう支離滅裂（＿＿＿＿＿＿）
色々ごめんなさい（T＿T）

七章：停学二日目～友達～

杏との一件が終わり、目が覚めた頃には既に夜になっており、杏の姿も無かった。

閑散とした居間で悠は杏を探すが、それは叶わなかった。いつまで経っても目覚めない自分に嫌気が差したのだろう、とも思ったが、それは居間のテーブルにあった一枚の紙切れを見て無くなった。

『今日は帰るね。約束通り悠が学校始まったらお弁当作るから、楽しみにしてなさいよね！　追伸……殴ってごめんね……やっぱアタシが謝るっておかしいと思うんだけど。悪いのはアンタなんだからね！　以上。』

「可愛くねぇ奴。最後までツンツンしやがって」

くしゃっ、と杏の書いた置き手紙を丸めてゴミ箱に捨てる。なんだか腹もあまり減らないから、今日のご飯は抜きに決定し、悠は自室へと戻った。

――今日も家には悠以外、誰も居ない。

自室に戻り、悠は最近の自分を考える。過去の自分に嫌気が差し、この光坂高校へ編入して一年が経った。親友と呼べる人物とも出会えた。工業高校に居た時とは大違いである。

「丸くなったよなぁ…俺も」

昨日来た工業高校の不良達。立てる程度に抑えたのには、自分自身も驚いていた。昔の――普段の自分ならば両足を折っていただ

ろうに。
でも、そんな自分に、何故だか嫌な感じはせず、逆に心地良かった。まるで胸にぽっかりと空いた穴に、何かが入って満たされる感覚。

「アホらしい。本当に穴が空いている訳でもないのに」

ベッドに身を投げ出し、ヤニで少し黄ばんだ白い天井を見上げる。
明日は何をしようか。

微睡んで行く意識の中、悠は――――ことみの事を考えていた。
本来なら今日、図書室に行きことみに会いに行くはずだったが、生憎今は停学中。放課後まで待ってはいないか、と考えると胸が罪悪感に締めつけられる。

気を紛らわす為に煙草を吸おうと、上半身を起こそうとするが…睡魔がそれを許さなかった。

◇

――――夢。

――――夢を見ている。

――――とても苦しくて……悲しい夢。

――――次々と昏倒していくガラの悪い男達。その中心に立つ、金髪の美男子。

――――狂ったように大笑いする彼の名は――――『榊原　悠』

――消えろ。
誰かが言った。
――消エロ。
誰かに言った。
――キエロ。
振り払うように、血に染まった拳を振りかぶる。
“ごきゃっ”と肉と骨が潰れる音がする。感触が、血の臭いが、悠を更に狂気へと導き、更に狂喜する。

――狂ってやがる。
誰かが言った。

どうやら場所は河原らしく、悠の髪はぐっしょりと濡れていた。肌に纏わりつく髪が邪魔だ。そう思い、悠は倒れた男が付けていた髪留めゴムを乱暴に外し、少し躊躇した後、付けた。前髪から襟足まで、全ての髪を後ろに纏めポニーテールにする。

時刻は深夜。
雲に陰った満月が、邪魔者を押し退けるように顕れ悠を照らす。

――血染めの金髪が月明かりに照らされ、歪につり上がった口が良く見える。

――口端に付着している返り血を舐める。

――始めて知った血の味は、狂おしい程に……旨かった。

◇

厭な夢を見た。

悠の目覚めは最悪だった。
過去の自分の夢。まるで、いくら変わろうと過去を消えることは出来ない、と誰かが忠告しているみたいに。

ベッドから気だるげな体を起こす。途端に立ち眩みに襲われよろけてしまう。

「あぁ～最悪な夢見だ」

こんな時はスッキリするに限る、とベッドから降り一階の洗面所へと向かう。静寂のみが存在するこの家の中、唯一の住人である悠の足音だけが鳴っていた。
洗面所で顔を洗ったお陰でスッキリした様子の悠は今、居間でニュースを見ながら煙草を吸っていた。
バラエティーやドラマを好まない悠が見る番組は、専らニュースだけである。偶に映画などを見たりするものの、それは鑑賞と言うより傍観に近い。だからして、映画館に誘われたとしても絶対に断る。とは言ったものの、悠を映画に誘う人間は未だいない。単に今まで彼を誘う程友達がいなかったのだ。

呆と様々な事件や政治について話すニュースを見続ける。右手にある煙草は、もう根元近くまで無くなっていた。ちょうどニュースではこの近隣で殺人事件が起き、未だ犯人が見つかっていないと話していたが、頭に入らない。

「……もう昼かよ。通りで腹が減ってる訳だ…」

人間の三大欲求である食欲が悠を突き動かし、徐に立ち上がる。もう無い煙草を灰皿に押し付けて火を消す。昨日、杏が来た所為で結局一日何も食べてない。悠でなくても腹が減るのは当然のことで

ある。

何か作ろうにも、自分には料理の技術があまり無い。よって自然とインスタントやレトルト食品に手が伸びる。

昼飯にはやはりラーメンだろう、と何がやはりなのか分からないが、悠はインスタントラーメンを一袋取り出し封を開けようと掴む両腕に力を込める。

「――――お邪魔しまーす！」

この来客が“お邪魔します”と言う言葉に、本当にお邪魔だと思ったのは今が初めての事だった。そして、これほど食に対する欲求が増したのも初めての事だった。

迷惑な来客は声色で判断する所、どうやら男らしい。しかも呼び鈴を押さずに上がり込むという、泥棒じみた事をする男。一人だけ心当たりが悠にはあった。

「あはははははっ！　なんだよこの絵、ヘッタクソだなぁ。見ろよ岡崎。この絵顔が歪んでるし、なんかおっぱいも変な形してるぜ！　きっと名も無き画家が酔っ払って描いたに決まってるぜ？」

悠の心当たりは見事的中した。

「お前、それピカソだからな」と冷静に突っ込む朋也の声と、春原の馬鹿笑いと馬鹿な発言。今正に開けようとしたインスタントラーメンの袋を台所に置き、非常識な客をもてなすべく廊下に出る。

「お前ら、非常識にも程があるだろ。普通なんの予備動作も無く友人の家に入るか？　…春原は友人でも何でもないから、今すぐ出て行くかポリ公の小屋に行くかどっちが良い？」

「悪いな悠。こいつが『岡崎、今から悠の家に言って小便まき散らそうぜ！　あはははははっ！』とか言うもんだから」
「それじゃあ僕ただの頭のおかしい人じゃん！　てか悠！　その選択肢どっちにしろ出ていくことになりますよねぇ！」
「今決めた。俺が一発殴った後にポリ公行きな。覚悟しな」

拳をゴキリと鳴らせ戦闘態勢をとる悠。本気ではなく演技。にも拘わらず、春原は
「ひぃいいい！」と怯え顔を悠から背け、両手を突き出し顔面を守ろうとする。まるで穴だらけな防御だ。

「嘘だよバーカ。ほら、居間に来いよ。ラーメンで良かったら食わしてやる。春原。お前は犬の餌で良いよな？」
「良かったじゃないか春原。ようやく化け物から家畜に格上げされたな」
「…僕って、こんな役ばっか」

寸劇も終わり、三人の落ちこぼれが居間に集結する。朋也と春原がこの家に来るのは初めてではない。

高校二年生の夏。詳細を語るなら、朋也と春原の二人相手に喧嘩をした日である。
悠はその前から二人と友人関係を築いてはいたが、色々とすれ違いや勘違いがあり一度は仲違いしたのだ。この件を詳しく語るには――まだ早い。

兎に角、色々紆余曲折あった結果。仲直りし二人を家に招き入れたのだ。勿論、その時も悠は二人を自室に入れたりはしなかった。

準備したままのインスタントラーメンを沸騰したお湯で悠が調理

している間、二人は春原が持ってきた…と言うか借りてきたＡＶを見ていた。
朋也は乗り気ではなかったが、春原が拝み倒した結果折れることにしたのだ。と言うのも、春原の部屋にはビデオデッキが無く、今まで見たくても見れなかったのだ。鑑賞中のＡＶは町にあるレンタルショップで借りてきた物だ。まだ十八歳でもない春原が、どうやって借りてきたのかは朋也と悠にも分からない。

「おい見ろよ岡崎ィ！　この女優…おっぱいが……すごく、大きいです」
「なんでいきなり敬語なんだよ」

自慢ではないが悠の家に設置されたテレビは、結構な大画面だ。その事もあって春原の興奮度は最高潮に達していた。鼻の穴を大きく広げ、画面を食い入るように見つめている。

「見る分には構わないが、音量を上げるなよ。近所に真っ昼間からＡＶを見てるなんて、思われたくないからな」

と言って悠は、完成したラーメンをテーブルに並べる。ゆらゆらと湯気が立つラーメンが三つ。意地悪をせずちゃんと春原の分も作っていたが。

「ほら、飯できたぞ春原。いつまでも見てないで、サッサと消せよ」

と言う朋也に春原は、
「今はいらない。これ見終わるまでちょっと待って」

などと、ふざけたことをぬかしていた。

「…おいバカ原」
「なんだよ、今僕は忙しいの。邪魔しないでよ」
「…バカ原よ。天に帰る時が来た」

ゆらりと悠が春原の背後に立つ。両腕を力無くぶら下げ無表情な姿は、まるで幽鬼のよう。それに気づかずに、己が欲望に夢中の春原はＡＶに夢中だ。
春原の命運は決まったとばかりに、朋也はその哀れな背中に合掌した。

ひぃいいいいいいいいいいいいいいいいいい！

悠に鉄槌を下され、家には春原の悲鳴が響き渡った。

◇

色々あったが、一名を除き昼食を終えた彼等はテーブルを囲うように座って雑談に興じていた。

「で？　今度は渚にフラグを建てたわけか」
「だから、なんでそうなるんだよ。俺はだだ、古川が一人で飯食ってるのが気になって話しかけただけなんだから。…と言うか、そのフラグってのは何だよ」
「フラグってのはな……俺にも良く分からない。けど、女を口説くにあたって最初の段階がクリアして、後は仲を深めりゃ晴れて恋人同士って訳。みたいなものじゃないのか？」
「いや、俺に訊かれても分かんないから。それに、そのフラグってのを建てたのは、どっちかって言うと古川を呼び捨てしてる悠の方

じゃないのか？」

朋也の諭すような発言が意外だったのか、悠はキョトンとした顔をして数秒固まった後、堰を切ったように笑い出した。

悠の反応に不満を持った朋也は、不機嫌そうに眉を顰(ひそ)める。

「何だよ。俺、変な事言ったか？」

「あっ、当たり前だろ！　あははっ…ひぃっ……くぅー、あはははっ！　俺を笑い殺す気か？」

余程可笑しかったのか、悠は床の上で笑い転げている。

何故そんなにも笑うのか分からない朋也は、ついカッとなり立ち上り鋭い目つきで悠を見下ろす。

先程から約一名静かなのは、悠が裁き鉄槌――と言うか単にせっかく自分が作ったラーメンを無碍にした事に腹を立てただけなのだ。

「それ以上笑うと流石に怒るぞ！」

“空気が痺れた”と言うのだろうか。朋也の怒号はそう形容するにふさわしかった。

「悪い悪い。つい、な。ったく、それぐらいで怒ってちゃ先が不安だぜ」

「お前は親かよ」

「いーや、親友だ。少なくとも、俺はそう思っている」

朋也の表情から険(けん)がとれる。悠の真剣な表情と言葉に、自分も子供みたいに怒っている場合ではないと思ったのだろう。

笑いすぎで痙攣する体を起こしながら、悠は

「いや～笑った笑った」と言いまた微妙に笑む。

そして真剣な金色の眼差しで朋也を見据える。

「俺が可笑しかったのはな。渚の事なんだよ」

「どこが可笑しかったんだよ。何も間違ってないだろ？　呼び捨ても、そのフラグってのも。例え話だけど、もし古川と付き合うなら悠の方だろ」

「そんな訳無いだろ。アッチは一般の学生で、コッチは…自分で言ってちゃ世話無いけど、不良も不良の超不良の落ちこぼれ。話したのもほんの数十分だ。そんな可能性、あったとしてもあるわけがない」

教師が生徒に教えるように優しく、正すように言った。

有り得るはずがない。彼女と自分は、あまりにも違いすぎるのだから。

「お前って……鈍いのな。それに、古川は一般で括るには少し…」

どこか諦めるように呟く朋也。最後の言葉が少し気になったが、それより“鈍い”と言う言葉が頭に残った。確かに事実である。悠は人に対しても、自分に対してさえも無関心なのだから。

心のどこか自信の預かり知らぬ所で自覚していた。だから、言い返せなかった。否定してしまえば、それは忽ち虚言へと成り変わってしまうのだ。

優しい嘘と、冷たい現実。どちらが正しいなんて分からない。けど己を否定することだけは、赦されないと思っていた。

「そう……だな。そうかもしれない」

「何だよ？　いきなり辛気くさくなって。それより、頼みたい事があるんだ」

朋也が頼み事をするのは珍しい。今までの過去。悠や春原と同じ拭えぬ傷痕を持つ彼は、悠と出会うまで自分が抱える悩みや障害は一人で解決してきた。

春原と悠の二人に出会うまで、朋也は独りだったのだから。

膝の上に両の肘を乗せ手を組んで、ポツポツと話し始める。話は渚の事だった。

始めはやっぱりフラグじゃないか、とも思ったがそうではなかった。

どうやら渚は留年していたらしい。だから一般で括るには――と言ったのだ。あの見るからに真面目な少女が、何の理由で留年になったかは気になるところ。だが、それを訊くのは、どこかいけない気がした。

誰にだって振れられたくない言はある。自分にだってそれはあるのだから。

「でも、放課後に演劇部の部室の前で突っ立てる古川を見つけたんだ」

そこまで聞いて、悠は事の次第を理解した。

「つまりは、何らかの形で演劇部の部室の扉を開けたが、そこは蛻（もぬけ）の殻。訊けば演劇部は以前廃部になった部だった。そこで、どうしようかと思案した所無くなったなら作れば良い、ってな訳でどうすりゃ良いのか分からないから手伝ってくれってわけだな」

「悠って、よく説明しようとすると先読みして逆に説明するよな」
まぁ良いけどさ、と言って目の前に置いてあるお茶を飲み干す。
確かに朋也に指摘されたその癖は未だ拭えずにいる。
良く言えば察しが良いのだが、悪く言えば話の腰を折る奴。でも、悠にも言い分はある。
「癖なんだ、しょうがないだろ。それに、誰かが説明するより俺が説明した方が聞く側の俺としても楽なんだよ。しかも演劇部が廃部になった事は以前から知ってたからな」
朋也以外の人間が聞いたら馬鹿にされたと思うだろうが、付き合いの長い朋也は悠の性格を把握している為怒りは湧かない。代わりに呆れるだけ。
それに、と悠は話を続ける。
「部活関連の事なら俺よりも、同じクラスの委員長である藤林いも――椋の方が詳しいだろ」
“藤林妹”と言いそうになって、慌てて訂正する。今この場に杏は居ない。にも拘わらず言い直してしまうのは、杏の鬼のような眼光を恐れているからなのだろうか。
朋也は吹き出すように笑い悠を見る。
「お前、随分と杏に叩き込まれたようだな。いや、もうこれは調教だろ」
「うるせぇやい。俺だってまさかここまでとは思わなかったんだから」

ブスッと膨れっ面になる悠。それでも美少年には変わりがない。相変わらず整った顔立ちをしている、女性にも間違えそうな顔立ち。
ようやく朋也は座り
「まぁ、確かに悠の言うことにも一理あるな」と言った。
「じゃあ、悠の停学が明けたら訊いてみるか」
そこで一つの疑問。
「ちょっと待て。なんで俺の停学が明けたらなんだよ。別に明日でも良いだろ？」
悠の質問に、朋也は珍しく馬鹿を見るような顔をする。
何か変な事を言っただろうか、と自分の発言を思い返してみるが誤植すら見当たらない。
悠が考え込んでいると朋也が言った。
「あのな、藤林には杏がついてるだろ。演劇部について訊いても、多分杏はひっちゃかめっちゃかに……いや、其処までしなくても杏がいると話ずらいだろ？　だからどうにかして藤林を杏から離さなきゃならない。でも俺にはそんな上手い考えが浮かばないから、頭の良い悠に頼みたいんだよ」
そこまで言って朋也はふう、とため息を吐く。
「今説明してたのに先読みして介入しないなんて、本当気紛れだよなお前って」
「不器用ですから」
何がだよ、とツッコミを入れて笑い出す。釣られて悠も笑い出し

た。
春原一人を抜きで更なる友情を深めた朋也と悠であった。
「分かった分かった。朋也…お前の言いたい事。頼み事は受けよう。他ならぬお前の頼みだからな」
「サンキュー悠。頼りにしてるぜ」
そう言って微笑む朋也。
話もひと段落した所だしそろそろ、と悠は煙草を加えてその先端に火を灯した。メンソール特有の清涼感に肺が満たされ、吐き出す。それだけの動作に、悠は確かなる安らぎを得ていた。朋也や春原と会話している時も安らぐが、やはりこれが無いと。と思う悠であった。

◇

「ん、うんん。…あれっ？　僕、どうしたんだっけ。たしかAVを見てて、それから……」
「発狂したお前が一物を取り出したから、俺と悠で気絶させたんだよ」
朋也が悠にナイスフォロー、と言わせんばかりの言い訳を言う。
おつむが可哀想な春原は、朋也の言葉にコロッと騙された。
「えっ！？　僕…出しちゃったの？」
「あぁ、これでもかってぐらい出してたぞ。臭くてしょうがなかったよ」
悠も追い詰めるように相づちを打つ。
が、それが裏目にでたようで、春原はようやく自分が騙されてい

ることに気がついた。

「って、僕そんなに臭くないですから！　やっぱり騙してたんだな！」

「ったく、面倒くさいから早く帰れよ」

朋也の冷たい一言に、悠は思わず吹き出してしまった。つくづく春原はこういった役が似合っている、と悠は内心思っていた。

――その時、春原が発した言葉が…悠を狂気に走らせた。

「はぁ、最近の僕って…。親友には馬鹿にされるは……明日には妹が来るし。良いことないなぁ」

「……春原。…今……なんて言った」

次章へ。

七章：停学二日目～友達～（後書き）

次章、悠のキャラ崩壊！

八章：停学二日目～本性と本音～（前書き）

むしゃくしゃしてやった……反省は……してない。

八章：停学二日目～本性と本音～

「……春原。今……なんて言った」

春原の心無い発言に、目の色を変え訊いてきたのは悠だった。さっきまで朋也と二人して春原をからかっていた悠とは打って変わって、今の悠は…例えるなら――――獣。

しかも獲物を目の前にした獣のだ。金色に輝く双眸はギラギラと輝いていて、気を抜けば直ぐにでも牙を剥いてくるかもしれない。それほどに、悠は取り乱していた。

茫然と事態について行けぬ二人を尻目に、悠は立ち上がり、がっしりと春原の両肩を自らの両手でもって掴む。春原が悠とは似ても似つかぬ“悠”を見て、本気で脅えていた。

それもその筈。今の悠に己を留める“理性”など無くなっているのだから。一年という時間一緒にいた友が、目前で自分の命を摘み取ろうとせんばかりの“気”を放っている。その事実に朋也は、情けないと思いながらも、手も足も出せずにいた。

「ゆ、ゆゆ悠だよな？　どうしたんだよ、いきなり。そ、そんな本気の眼で睨まれたら…僕、死ぬかもしれないよ」

へ、へへっと苦し紛れの笑いも、苦笑で……いや失笑でしかなかった。

この悠の突如とした変貌ぶり。それにはちゃんとした理由があった。

そもそも悠は、なんの理由も無しに人を傷つけない。相手が悪にしろ、たとえ正義だろうと理由無しには本気で“力”を振るわない。その事を知っている春原は、恐らく手は出ないと思う反面、自分は

彼に何らかの理由を与えてしまったのかもしれない、と疑心暗鬼に囚われていた。
肩を掴む手の力は弛まる、と言うことを知らなかった。ギリギリと音を立て、確実に春原の内部へと指が侵入していく。
「い、いたたたたたたたたたたっ！　痛い痛い！　やり過ぎだよ悠！」
「そんな事……どうでも良い。…それより、お前さっき……なんて言った」
再度に渡っての質問。
言わなければ……。そこまで考えて自己防衛本能が発動したのか。春原にそれ以上思考する事を赦さなかった。ただ必死に、助かりたい一心に二分前に自分が言った言葉を思い出す。
――――が、人間は圧倒的な恐怖に直面すると、思考力に欠陥が現れるらしく思い通りにいかない。
「悠ッ！　いい加減にしろ！　ふざけるにも限度があるぞ！」
流石に見かねた悠の“親友壱”『朋也』が、春原に迫る悠を引き剥がしすぐさま間に立つ。
今ほど朋也の存在が、春原には頼もしく感じた事は無かった。目の前にある背中が、とても大きく広い『ぬりかべ』みたいに見えた。
「朋也……邪魔しないでくれないか？」
「邪魔しないでって悠、お前一体どうしたんだよ！？」
「どうしても春原に訊きたい事があるんだ。それを聞くまで、俺は止まらない。いや、止まったら確実に後悔する！」

一体全体、何が悠をそこまでさせるのか分からないが、ただのおふざけとは朋也は思えなかった。背後で必死になって自分が言った台詞を思い出そうとし、己の矮小な脳みそを呪い右手で自分の頭を叩いている春原には悪いが、少し滑稽に見えた。

朋也の介入で心に落ち着きが産まれた悠は、さっきよりは平静を保てるようになっていた。でも、己が内に潜む“者”が今の悠と言う“殻”を破ろうと躍起になっている。

一連の、悠が起こした行動は決して悪意ではない、とだけは断言できる。誰よりも良く知る自分の事なのだから。 落ち着きを取り戻した悠は、朋也とその後ろで矮小な自分の脳みそを呪い、右手で頭を小突く春原から離れ腰を下ろした。

「もう大丈夫…だと思う。悪いな朋也、あと春原」

「へっ？ もう思い出さなくて良いの？」

「死ぬ気で思い出せ。でないと、死こそが一生の幸福だと思いたくなるような拷問をかける」

死刑宣告にも似た冷酷な言葉が、容赦なく春原を両断する。情けなくもヘタレな春原は

「ひぃいいい！」と叫びその場で四つん這いになり、何故か九九を暗唱し始めた。

――――序盤、二の段で躓いた。

春原の哀れな姿を見かね、朋也が

「仕方ない」と呟き四つん這い状態にある春原の尻を蹴飛ばし悠を見据え、言う。

「コイツはこう言ったんだよ。多少曖昧だけど確か『はぁ、最近の

僕って…親友には馬鹿にされるし。……明日には妹がくるし。最近の僕ってついてないなぁ』ってな感じだったぞ」
「それだっ！　“妹”だよ“い・も・う・と”！　お前に妹がいるだって？　本当なのかよそれ！？」

引っ掛かっていた“何か”が取れ、悠は先程までの“殲滅狂”の時みたいな声色ではなく、朋也と春原が良く知る飄々とした男の声だった。

「えっ？　妹がどうかしたの？」
「今、何歳だ！？　今答えろ、直ぐ答えろ、今直ぐ答えろ！　あと三秒で答えろ」
「えっ、あ、十三歳！」

慌ててそう言う春原。
そこまでして何故訊きたがるのか、春原は疎か朋也も気になっていた。年齢を確認した途端に、キラキラと目を輝かせ再び春原の肩を掴む。が、さっきのように握り潰すような握力は籠もっていない。

春原の、妹がいると言ったのを聞いた瞬間。悠の中で“何か”が弾け、逆ったのを感じた。その所為か、春原には正直悪いことをしてしまったと思っている。

妹の年齢は十三歳と言っていた。

「なる程、十三歳か。ってことは今中学二年生か。良いぞ…かなり良いぞ」
「悠、お前さっきから変だぞ。そんなにコイツの妹が気になるのか？」
「春原、朋也…明日、俺も行くぞ」

「「はぁ？」」

なんの脈絡も無い発言に、名前を呼ばれた二人は素っ頓狂な声を上げた。さっきの発狂したような悠も、悠とは思えなかったが。今の悠もなんだか悠とは思えなかった。

「だから、明日妹が来るんだろ？　俺も行く！　絶対に行くからな！」

駄々をこねるように悠は言う。その間、春原の肩はギリギリと悠の手に握られていた。

暗に、連れていかなかったら……、どうなるか分かっているだろうな？　と言っているようで、それを察知した春原は素早く頭を縦に振った。

肯定の意を認識した悠は、とても清々しい笑顔をしながら春原の肩から手を離した。二度に渡っての小さな拷問に、春原の肩は痛々しい痕が残っていた。

「いってぇ～、ったく、内出血しちゃってんじゃん。…で、今更だけど何でそんなに行きたがるの？　まさか、妹を狙ってる訳じゃないよね？　…って、それは無いか。むかつくけど悠、顔だけは良いから女には困っ――――

「そうだ。狙ってるぞ」――――…え？」

春原が、朋也が目を見開いて信じられないって顔をして悠を見る。さも当然のように腕を組んでふんぞり返る悠に、双方ついて行けていない。

「あれっ？　そう言えば俺、お前達には言ってなかったか？」
「言ってなかったって何を！？　て言うか本当に僕の妹を狙ってるだって？　まだ顔も見てないでしょ。会っても無いでしょ！」
「落ち着け春原。ほら、とりあえずその背中に生えた翼しまえよ」
「んなもんねぇよ！」

本当に同様しているようで、朋也の振りに的確な切り返しが出来ない。いや、出来た所でまた面白がって悠か朋也が再三に渡って口撃をするから変わらない。

悠は、その光景を傍観しながら
「そうか、言ってなかったか」と確認するように呟く。

「聞いて驚くんじゃねぇぞ。驚いた春原は今後目薬をタバスコにしろよ？」
「良いなそれ！　目が良くなるぞ。良かったな春原！」
「失明しますからそれ！」

最早お決まりのやり取り。
やはり話の始めには一回ぐらい春原を虐めなきゃ、と間違った使命感を持つ悠。

「俺な、実はロリコンなんだよ」

――沈黙。

――沈黙。

――沈黙。

――沈黙。

――絶叫。

「「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」」

「あ、春原タバスコな」

「ひぃぃぃぃぃぃぃ！」

◇

悠の爆弾発言から三十分が経過した。

朋也は悠の知られざる本性に驚きを隠せない様子で、今はひたすらにお茶を飲み続けている。

春原もまた、悠の本性に驚愕し、妹の貞操が危ういと感じ今は放心状態に陥っている。

冗談にしては笑えない発言だが、悠は決して冗談のつもりで言っていない。正真正銘、悠はロリコンなのだ。とは言っても、小学生に手を出そうとは間違っても思っていない。詳しく言うならば、中学二年生以上で尚且つ幼い容姿の少女が好み。

「待てよ。いくら妹だと言っても、相手は春原の妹だぞ？　良いの

か悠？　もしかしたら人間じゃないかもしれないぞ？」

長きに渡って続いた沈黙を破ろうと、朋也は言った。

「た、確かにそうだな。よくよく考えてみると、“春原の”妹か……。最悪だな、もし可愛くて可愛くて入籍したら……春原を“義兄さん”と呼ばなきゃならんのかぁ！」

それは嫌だぁ、と頭を抱えて悲鳴を上げる悠に、

「失礼な事言うなよ！　妹は…芽衣は、自慢じゃないがかなりしっかり者だし、世話上手だし、兄思いの可愛い妹なんだぞ！」

可愛い妹なんだぞ――妹なんだぞ――なんだぞ――んだぞ――だぞ――だぞ――（エコー）

空気が凍るとはこの事を言うのだろう。春原はついカッとなり言ってしまったが、それを正すことは時既に遅く、悠も朋也も春原に憐れんだ、憐憫の目で見ていた。

悠の時より若干引いているのは、それが春原のキャラなのだから仕方がない。

「春原…お前って、実は結構なシスコンだろ」

朋也が言う。

「ほぅ、芽衣ちゃんと言うのか。これで会わせないなんて言ったら……分かってるよな」

悠がギラついた眼で睨みながら言う。

「うっ、そんな訳無いだろ。僕がシスコンって、無い無い…アイツ

いつもお兄ちゃんお兄ちゃん五月蝿くてさぁ、本当迷惑してんだよ。しかも、明日来るのだって僕がちゃんと生活してるか確かめに行く、なんて理由だぜ。まったく、面倒だからいいって言ってんのに」
「いい子じゃないか」
「本当だぞバカ原。手前ェ自惚れんなよ？　明日から俺が芽衣ちゃんの“お兄ちゃん”兼“恋人”になってやる」
「……ねぇ、岡崎。僕思うんだけど…悠ってこんな奴だったか？」
「…色々あるんだよ、人間。そこに触れたらおしまいだぞ」

理性が暴発した悠のぶっ飛んだ発言は、春原を正気にさせ、朋也に「友達って何だろう」と言わせる程の威力を誇っていた。

◇

その後、悠の会話は春原の妹である芽衣の話題で持ちきりだった。
どんな子だ、と言ったり。
何が好きだ？　髪型は？　好きなタイプは？　と春原に質問責め。

いい加減にしてくれ、と春原は思ったがそう言った場合、悠に何をされるか分からないし、ここまで自分（？）に熱心な悠に小さな優越感を抱いていた為言わなかった。
もう慣れたのか、朋也は離れた所でポテチを食べながら漫画を見ていた。

時間も言い具合に過ぎ、外は暗くなっていた。

「そろそろ帰れや。俺風呂入りたいし、飯も食ってないからな」
「そうだな、そろそろ帰るか。ほら春原帰るぞ」

蹴っ飛ばす。

「何も蹴る必要ないでしょ！　ちゃんと聞こえてますよ！」

「あぁ～うるせぇうるせぇ！　サッサと出ねぇと頭頂部から丁寧に皮膚剥いでいくぞ」

悠はそう脅して、春原の頭を掴んで

「本気だぞ」と軽く睨む。脅えた春原が

「ひぃいいいい！」と叫んで、悠の家を出ると朋也も追いかけるように玄関まで向かった。

見送りに玄関先まで出た悠に朋也が、

「じゃあ明日は四時に春原の部屋集合な。四時半に妹が来るらしいからな」

と言って悠に背を向け、歩き出す。

その背中に。

「朋也ぁ！」

声をかけた。

振り返る朋也の顔は、いつも通りの清々しい表情。

どうしても訊いておきたかった。

喧嘩無敗最狂最悪の男版才色兼備の自分が…ロリコンだなんて、真正面にいる人間の兄貴的存在でありたかった自分を――嫌わないか。

「俺に……幻滅したか？」

らしくない不安な表情の悠に、朋也はこう言う。

「……やっと俺達に弱みを見せてくれたな。去年の夏だって、いつも不安は表に出さないお前が明かした事だ。例え人殺しの薬中だろうと、俺も…春原だって呆れはしても、幻滅なんて、ましては嫌うことなんて有り得ない。
…安心しろ。いつだって……俺はお前の親友だ」

改めて、朋也にはかなわないと思った。こんなにも大きな器を、自分は持ち合わせていない。

彼の持つ良さは“優しさ”なのだろう。

「ったく、本当にジゴロ野郎だぜお前は」
「なんだよ、藪から棒に」
「いや、何でもねぇ。改めてお前の良さに気づかされただけさ。……誓うよ、朋也。俺も何があろうと、悩み苦しんだら真っ先に俺を頼れ。何をしてでも助けてやる」

深く、深く心に突き刺すは……信念と言う一本の剣。何があろうと彼の味方である、と言う信念。

「だから……あぁもう！　長ったらしい話は嫌いだっ！　俺は帰るからな」
「おう、また明日な」

右手を仰ぐ朋也を見届け、家に入って扉を閉める。
気恥ずかしかったのだ悠は。らしくない自分は嫌いではないが、好きでもない。だから逃げるように、朋也の前から去った。

「全く、本当…丸くなったよなぁ」

天井を仰ぎ、その先にある星空を見透かすように眺めながら悠は独り言を呟く。

満天の星空が…きっとあるのだろう、と思いながら明日の為に今日は早く眠ろう、と自室へ向かった。

八章：停学二日目～本性と本音～（後書き）

ぶっ壊れｖｅｒ悠、どうでしたか？
次章では遂に芽衣登場…かも。ってか芽衣を早く出したかっただけです…すんませんｍ（＿＿）ｍ

九章：停学最終日～邂逅～（前書き）

なんかもう…悠を始めのキャラに修正できる気がしない。
ただのロリコンだ（汗

九章：停学最終日〜邂逅〜

本日早朝、榊原悠は人生最高の目覚めを体験した。昨晩、まだ見ぬ春原の妹である“芽衣”に思いを馳せ、眠れない夜を過ごしていたにも拘わらず目覚めは最高であった。

前章で説明した通り、悠はロリコンである。しかし、生粋とは言えない。

悠が愛すべきは、中学生からで尚且つ小学校のような容姿の少女が好みである。少しずれているのは、例え年齢が同じ歳でも体が小さく幼い容姿なら許容範囲なのである。

「今日は、入念に髪を手入れしなければ」

来るべき芽衣との初対面に備え、まずは身なりを整える事から始めた。

榊原悠以外使用しない階段を、軽快な足取りで下り真っ先に洗面所へと向かう。見る女性の大半を悩殺してしまいそうな、とても輝かしい笑顔で髪を整える姿は、杏辺りが見たら卒倒するかもしれない。

一体どんな髪型にしようか悩みながら、色々な髪型に挑戦している。様々な髪型を試行錯誤した結果、

「やっぱりいつも通りの髪型が一番良いな」

普段の自分で勝負することにした。

悠の朝食は、いつも決まっている。

鍋に適量の水を入れ、沸騰するまで火にかける。沸騰したら乾燥麺を投入して茹で上がるまで待つ。茹で上がったら付属の粉末状の

物を入れ、馴染むまでかき混ぜる。

そして、完成。

完璧なまでにインスタントラーメンである。

「いただきます」

独りきりの食事。悠にとってはいつもの日常であり、不安も不満も無い。

初めから家族を求めなかった悠は、最終的に家族から見放された。ただそれだけの事なのだから。

「…ごちそうさま」

朝食も終わり、約束の時間である四時半までには後、約六時間はある。春原の家に行こうにも、恐らく学校に居るだろう。昨日サボったのだから今日もサボるなんてことは、多分有り得ない。と、なると自ずと選択肢は狭まる。

このまま家で惰眠を貪るか、商店街に出て食料の調達に出るかの二択になる。つまりは、家に居るか居ないかの話。

「……どっちにしろ食料はもう無いから外に出ることになるし、行くか商店街」

思い立ったら吉日。外用の服に着替え、財布に携帯、煙草をポケットに入れ家を出る。

外に出た途端激しく照りつける太陽に、思わず手を翳してしまう。気温は春にしては結構高く、外に出ることに妥協したくなる程だ。

だが、行かない訳にもいかない。食べ物が無いと生きていけない。さっき食べたインスタントラーメンが家にあった最後の食料なのだから。
昨日の迷惑な来客に出してしまった為、予定より早く無くなってしまったのだ。

「ったく、春原の所為でとんだ面倒を……まぁ、そのお陰で芽衣ちゃんと会えるから良いか」

春原への怒りを露わにしたと思ったら、芽衣の件を思い出し、にへっと締まらない笑みを浮かべるのであった。いつまで経っても商店街との距離は縮まらず、家の軒先に立ち尽くし笑みを浮かべる姿は何とも不気味だった。

◇

この町の商店街は、それなりに栄えている。場所が田舎寄りなだけに、住民達の生命線は商店街しか無いのだ。
食材を揃えるには十分だし、ゲームセンターもある。悠にとっては十二分に満足出来る場所なのだ。時間が時間だけに、客は疎らだ。人混みを好ましく思わない悠には、丁度良い。

「さて、まずはラーメンだな」

スーパーに入り、お目当てのラーメンをカゴに入れ、芽衣の為にお菓子などをどっさり買い込む。
これで準備は万全だ、と独り言を言いながらスーパーから出る。丁度出たところでゲームセンターが目に入った。

「まだ時間まで十分あるし、ちょっくら行ってみるか」

スーパーの袋を手に持ったまま、ゲームセンターへと足を運んだ。中にはいるとゲームセンター特有の、煙草に似た匂いが充満していた。あまりゲームはやらない質だが、時間潰しには丁度良いだろう。と思い、財布を取り出す。

悠がやろうとしているのは、単純なパンチングマシンだ。某ボクシング漫画を題材にした筐体で、若者には人気のゲームである。

百円を入れ、ゲームが始まる。難易度は最大にし、サンドバッグが起き上がる。

「久々だからなぁ、そこまで出るかな？」

自信なさげにそう言うが、口はにやけている。やはり、根っこでは殴ることに楽しみがあるらしい。

ゲームセンター内にいた人達が、野次馬の如く集まってくる。スーパーの袋を持ちながら、ゲームセンターに居る事に僅かな興味を持ち見物に来たのだろう。もう一つの意味で、悠が人の目を引くに値する容姿をしていたからでもある。

右手にグローブをはめ、弓を引くように振りかぶる。ボクシングなどでは腕を引かず、構えた所から最短距離を疾(はし)るがボクサーではない悠はそれをしない。

視界が一気に狭まる。標的のみに集中し、強く拳を握る。思考が驚く程にクリアになり、頭の中は真っ白に染まった。

「疾ッ！！」

目にも止まらぬ速さで拳が疾る。一直線にサンドバッグへと行き

当たり、まるで太鼓で叩いたような轟音が、様々な音が混じるゲームセンター内に勝る音が響き渡った。
ほんの刹那だが、店内全ての音が無くなり静寂が訪れた気がした。
得点を確認しようと思いっきり殴った為、下がった頭を上げる。
モニターに表示されたのは……何もない。文字通り何もない真っ黒な画面のみが、映し出されている。つまりは測定不能。
「……壊しちまった」
悠の姿を見ていた野次馬達も、唖然とした表情を浮かべている。恐らく今までの人生で、現実世界において漫画みたいにパンチングマシンを壊す人がいるとは毛ほども思わなかったのだろう。
「あの人機会壊しちゃったよ！」
「すげえ、北〇の拳みたいだ！」
「……かっこいい」
色々な意見が飛び交う中、当事者『榊原悠』は焦っていた。筐体を壊してしまった所為で、店員に捕まってしまったら弁償を要求されるかもしれない。下手をすると警察沙汰になりかねない。
――したがって。
「あっ、逃げた！」
三十六計逃げるに如かず。どっかの偉い人が言った気がしたが、そんな些末な事は今の悠に関係ない。ただひたすらに逃げるだけ。

◇

「…ここまで来れば大丈夫だろ」

ゲームセンターから逃げ延びた悠が行き当たった場所は、人が行き交う近所の駅前だった。

“木を隠すなら森”と言う言葉に倣って、無意識のうちに警察から逃れる場所へと体が向かっていたのだ。過去再三に渡って経験してきた、あまり一般人には為にならない経験である。

ゲームセンターから駅前までは以外と距離がある為、悠の息は上がっていた。

どこか休憩できる場所は無いだろうか、と辺りを見回してみると、お誂え向きなベンチがあった。疲れている体に鞭を打ち駆け足でベンチへと駆け寄り腰を下ろした。

「ふぃ〜、生き返ったぁ…」

ベンチに腰掛け、一服しようと煙草を取り出して火を灯す。

と、気になる光景が目に入った。

小さな小学生ぐらいの女の子が、柄の悪い二人の男に言い寄られている姿。始めは兄弟が喧嘩をしているのだろうか、とも思った悠だが、それは女の子の腕を強引に引っ張る姿を見て脳内会議の結果、否決された。

「あんにゃろう、いたいけな少女に何てことを…！」

即刻に止めさせるべくベンチから立ち上がる。そして盗まれないようスーパーの袋を片手に持ち、矢のように人混みを走り抜ける。

――目指すは、幼女の下。

◇

少女『春原　陽平』を兄にもつ『春原　芽衣』は、約束通り兄の住む町の駅前まで来ていた。

始めてくる場所で、自分が住む地元より都会と言うこともあり、着いて直ぐ道に迷ってしまった。

「どうしよう。このままじゃお兄ちゃんの寮まで行けないよ」

困り果てた芽衣は、誰か人に訊くことにした。

幸いにもここは駅。道を訪ねるには十分に人が居る。一人一人当たっていけば自ずと分かるであろう、と芽衣は考え目の前を通った人に話しかけた。

「すみません、少し道を訪ねたいんです、け…ど」

「何だ、この子？」

「ちょうどいいじゃん拓君、この子を連れてきゃあ一儲け出来るじゃん！」

話しかける人選を謝った様子の芽衣。

男達は芽衣を値踏みするように見た後、ニヤリとどす黒い笑みを浮かべる。欲に染まった瞳は芽衣の顔や、胸、下半身などをジロジロと眺めている。

男達の視線に、芽衣は何とも言えない嫌悪感を抱きその場を去ろうと背を向ける。

――――が。

「まぁちょっと待ちなよ！　逃げることないじゃないか」
芽衣の細い腕を掴みそう言う。

「そうだよ。お兄さん達とちょっとあっちでお話するだけだからさ」
「話して下さい！　警察呼びますよ！？」

力の限り振り払おうとするが、女性が男の腕力に叶うわけが無くその手が話される訳がなかった。
何をされるのだろう、と芽衣は恐怖するがされるがままではない。

「助けて下さい！　誰かぁ！」
「無理無理。わざわさ助けようとする正義心マックスな馬鹿なんて、居る訳無いじゃん」

ギャハハハハ、と下品な笑い声を上げて芽衣を引っ張る。が、足に力を入れその場に留まろうと必死に抵抗をする。このまま連れて行かれれば、一体何をされるか分かったものではない。歳不相応にしっかりした芽衣の考えでは、もしかしたら誰も居ない倉庫にでも連れて行かれこの身を欲望の限り蹂躙されるかもしれない。

考えるだけで涙が溢れてくる。さっきから助けを求めているにも拘わらず、彼等を見た途端に逃げるよう目を背けた。皆、自分が可愛くて仕方ないのだろう。
これはきっと夢に違いない。現実から逃避するように瞳を閉ざす。頬を伝う涙が、凍える程に冷たく……痛かった。

真っ暗な闇の中、兄の姿が浮かび上がる。いつも泣いている自分

を助けてくれる、頼れる兄の姿が。いつだって必死な顔で駆けつけ『芽衣を泣かせるんじゃねぇー！』と、相手から助けてくれる兄の姿を。

「お兄ちゃん、助けてぇ！」

気がつけば、そう叫んでいた。

気がつけば、自分の腕を掴む手の感触が無くなっていた。

気がつけば、男の鈍い悲鳴が聞こえていた。

恐る恐る瞼を開く。まさか……と思い視界を展開すると、そこには兄と同じ金髪の、兄とはまるで似つかぬとても綺麗な青年がスーパーの袋を片手に立っていた。

◇

「お兄ちゃん、助けてぇ！」

少女の悲痛な叫び声が響いた瞬間、悠は走る速度に体重を上乗せして少女……芽衣の腕を掴む男を跳び蹴りを脇腹辺りに当て、蹴り飛ばした。

『ごきゃっ』と鈍い人体のどこかが壊れる音と、男の醜い悲鳴が悠の耳に入った。蹴り飛ばされた男は、まるで河原で石を投げ跳ねるように凄まじい勢いで吹き飛び、地面の上を跳ね、柱に衝突した。直ぐに起き上がらないのと、うめき声一つ上げない事から恐らくは気絶したのだろう。

「ひぃいいい！　た、拓君？」

事の次第を目の前で見ていたもう一人の男が、信じられない光景

に恐怖し助けを求めるように気絶した男を見る。
突如として現れた悠に、呆気にとられる芽衣はただ事態を把握できずに救世主みたいな悠を見上げていた。
「もう大丈夫だからな。心配しなくて良いぞ」
優しい笑みを浮かべ悠は言った。
「あ、はい。……ありがとうございます」
横顔を見ただけでも綺麗だったのに、真正面から見ると更にキレが増し芽衣はもう違う意味で倒れそうだった。
顔を真っ赤にする芽衣を見て安堵すると、悠は春原のように怯える男へと歩み寄る。
「ひ、ひぃいいいっ！　止めてくれ、俺が悪かったから！　どうかこの通り！」
「黙れ。春原みたいな悲鳴上げるかと思ったら、中身はとんだ下衆野郎だな」
悠の後ろで、聞き覚えのある名前に芽衣が反応を示す。
一歩、また一歩。近づく度に男の寿命を縮める程の殺気を放ちながら、また一歩肉迫する。
悠の圧倒的なまでの力に恐れを抱いた男は、近づく悠から逃れようとするが、震える膝がそれを許さなかった。
「た、頼むから……命だけは…」
「馬鹿かお前は？　手前ェみたいな下衆の為に、何で俺が罪背負わなきゃなんねぇんだよ。悪いけど、ちゃっちゃと済ませるぜ。流石にそろそろポリ公が来るかもしれないしな」

「まっ……ぐぺぇっ！」

疾風の如き拳が――――パンチングマシンの筐体を壊す威力の拳が、男の顔面を捉えた。咥内に生え揃う歯が、崩壊する感触を右手が感じる。ブルッと興奮で身の毛がよだち、鳥肌が立った。

殴られた男は、最初吹き飛んだ男と同じ位置まで飛び、同じように気絶した。

「さて、ゴミ掃除は済んだな。……で、大丈夫だったか君？」

ポーッと惚ける芽衣に振り返り笑顔でそう言う。

良く見るとかなり可愛い。艶やかな黒髪を両サイドで縛っている髪に、クリクリとした純朴な瞳。その上小学生みたいな幼い顔立ちながら、しっかりと自分の意志をもっていそうなさっきの行動。しかも、一見悪戯っ子みたいな顔をして、しおらしい顔で上目遣いをされた日には、幸せすぎて死んでしまうかもしれない。

いや、死んでも良い。この子と手を繋げたら、この身が灰になろうとも大歓迎だ。

――――悠の全身に雷が如き電流が走った瞬間であった。

「あっ…た、助かりました。本当にありがとうございます」

ふと、我に返った芽衣が感謝の言葉と共に頭を下げる。

その仕草一つが可愛らしく、悠は卒倒しそうだった。

「いや、良いんだよ。休憩がてら見掛けたから助けただけだし。それより、何でまたあんな野郎に付き纏われてたんだ？　まさか……」

アイツもロリコンなのか？　なんて、根拠のない考えが浮かび上

がったが、一緒にしないで欲しいと思考を振り払う。

「ち、違うんです！　実は私、道に迷ってしまいまして……ちょうど目に入った人に訪ねたら、あんな事に…」

「なる程、それでか。つまり、この町に親族か誰かが住んでいるから会いにここまで来たものの、駅に着いた途端道に迷ったら…さっきみたいな事が起きた訳だ。さっきお兄ちゃんって言っていた線から考えると、兄に会いに来たんだな？」

「…凄いです。殆ど合っています！　お兄さん、エスパーってやつですか？」

目をキラキラと輝かせ尊敬の眼差しで見つめる芽衣。

出来れば“お兄ちゃん”と呼んで欲しかったが“お兄さん”でも、かなりの破壊力だった。

「そんな訳無いだろ。ちょっとばかし頭の回転が早いだけだよ。なんなら、その兄が住むって目的地に案内してあげようか？」

「良いんですか！？　わぁ、ありがとうございます！　それじゃあ、光坂高校の男子寮って知ってますか？」

目的地を聞いた途端、悠の全てが固まった。なまじ頭の良い悠には、お得意の先読みで全てを把握してしまった。

“兄”“会いに来た”“可愛い”“幼女”“光坂高校”“男子寮”

全ての単語を紡いでいくと、悠の予想ではこの子は春原の妹である芽衣ちゃんではないか、と脳内会議で出ている。

トドメを討つように芽衣が言う。

「春原陽平って言うんですけど、知ってますか？　さっきお兄さんが春原って言ってたからもしかして、と思ったんですけど」

嬉しそうな顔でそう言う芽衣。

確証は得た。

正真正銘、春原の妹。

「もしかして、と言うまでもないが……芽衣って名前？」

「はい、そうですけど。…なんで私の名前、知ってるんですか？」

――本人確認が出来ました。手続きを開始します。

変な電波を受信してしまったが、気を取り直して悠は言う。

「…春原陽平。俺の友達、何だよね……一応」

九章：停学最終日～邂逅～（後書き）

後半に続く～（ちびまる子ちゃんのアレ）

十章：停学最終日～男らしく？～（前書き）

お久しぶりです。
長々と放置してた為「もうコイツ更新しないだろ」と思った方、スイマセン。
ニートからの脱皮をしてしまった所為で、自分の事で手一杯になってました。

余裕も出て来たのでまたボチボチと更新していくのでよろしくお願いします。
それでは短いですがどうぞ――。

十章：停学最終日〜男らしく？〜

「…春原陽平。俺の友達、何だよね……一応」

まさか、偶然にも助けた少女が春原の妹である『春原　芽衣』だとは思わなかった。こんな偶然、彼にはあまり見たことのないドラマでしか経験がない。

それにしても……、と悠は思う。春原の話でしか聞いていなかった悠は、芽衣の素顔を知らなかった。改めて容姿を伺うと、やはり春原の妹とは思えない程に可愛かった。

柔らかそうな頬に、クリクリとした瞳。お世辞にも大きいとは言えず、つるぺたながらも僅かに膨らんでいる胸。その困ったような、春原の友人と言うことに驚愕した表情が、とてつもなく悠の守備範囲に弩ストライクだった。卒倒しそうになるも、なんとか気力で耐える。今倒れたらちょっと不味いことになりそうだったからだ。

悠は普段こそのらりくらりと捉えどころのない男で、客観的に見て馬鹿そうではあるが、そうではない。モラルは少々欠けているが、状況把握能力は常人の三倍はある。だから普段朋也たちと会話している時も、常に先が見えているのだ。その所為で悠の―《先読み説明》の癖が根付いてしまったのだ。

「えぇ！　お兄ちゃんとお友達？！　……よかったぁ、ちゃんと友達はいたんだねお兄ちゃん」

「なんだか友達って言いきるのも癪だから、とりあえず《友達候補生――ただし退学確定》みたいな感じでお願い」

「それって友達じゃないって遠まわしに言っただけじゃないですかっ！」

小さな体を全て――全身を駆使してのツッコミ。―《自称ロリコン》の悠には堪らない光景であった。

人目が無く、春原の妹でなければ襲っていたかもしれない。それほどに今の芽衣に魅力があったのだ。

「じゃあ友達で良いや。友達と書いて友達(どれい)と読む方向で」
「お兄ちゃんに何があったんですか！？」
「大丈夫だよ、まだ生きてるから」
「本当にどんな関係なんですか！？」
だんだんヒートアップする二人だが、ふと悠が思い出す。
「そういえば、春原が住んでる寮に行きたいんだっけ？」
「そうでした！　すっかり忘れてました」
哀れ春原。よもや実の妹に忘れらるとは。
芽衣は何かをお願いするように、悠を上目遣いで見つめる。その姿に悠がグッときてしまったのは秘密だ。
言いたいことは分かっている。寮までの道を教えて欲しいのだろう。
「あの初対面でその上助けてくれた人に、こんなお願いするのもアレなんですけど――」
もじもじと小さな手指を突っつき合わせる芽衣の姿に萌え――いや、暖かい気持ちになりながらも言いたいことは分かっている悠であった。
手助けしようかとも思ったが、芽衣の慌てふためく様をもう少し眺めていたい、という本人曰く純粋な気持ちが悠を留めるに至る。非常に最低な人間だが、欲望に忠実な悠にそんな事を行ったところで戯言に過ぎない。目を細め、目の前に映る芽衣の一挙一動を脳内メモリに保存しておく。保存先フォルダは《芽衣タン～動画の巻～》で、保護プロテクト設定。
いかん。可愛過ぎる。何でこんなに可愛いロリッ子が春原の妹なんだ？　オカシイ…何かが絶対におかしい。などなど、様々な思考が悠の頭の中で展開されていく。このまま放置したら性犯罪者になりかねない顔で、もじもじと俯いている芽衣をばれないように見つめる。
――芽衣が顔を上げたのも、ちょうどその時であった。
「お兄ちゃんの…春原陽平の住んでいる寮に案内してくれませんか

？」

精一杯の、なけなしの勇気を振り絞るように芽衣は懇願した。

もともとそのつもりであった悠にとっては、なにを今更、といった感じなのだが。芽衣にとっては、自分の地元では稀にも見ない超絶美形の男が運良く窮地から助けてもらい、さらには兄の友人ときた。運命を感じてしまう反面、なにか仕組まれてはいないかと疑いの心も多少だが感じていた。田舎出身だけあって、地元よりも都会に出ると警戒心が強くなってしまうらしい。兄の友人にこんなことを思ってはいけない、と思いつつもその疑問を拭い去ることが出来ない芽衣であった。

そんな芽衣に、悠は二つ返事で了承し春原の住む学生寮へと案内し始める。

「そういえば、芽衣ちゃん…って呼んで良いかな？」

「はい！　全然気にしないで下さい。私も……えっと、そういえば私お兄さんのお名前を聞いてませんでした」

学生寮へ向かう途中、悠と芽衣は互いのことを知るために情報交換と言う雑談に花を咲かせていた。芽衣の場合は、純粋に好奇心からであるが、悠の場合は違っていた。あの春原の妹と言うもんだから、内心どんな怪人かと戦々恐々としていたが実際のところ兄の春原なんかよりも数千倍よく出来た妹で、好みを完璧におさえた幼子に悠はこの機会を逃してなるものかと意気込んでいる。ニコニコしながら悠の返事を待つ芽衣に、理性の瓦解を恐れつつも悠は答える。

「悠だ……榊原悠。榊原なんて良いづらいから簡単にお兄ちゃ――いや、悠で良いぞ」

《お兄ちゃんで良い》と言いかけて、悠はとっさに言い換えた。

ここでお兄ちゃんと呼んでくれなんて言ってしまったら万が一にもロリコンという事がばれてしまう。そうでなくとも、確実に疑惑と疑心を自分に抱くだろう。そうなってしまうと、最初の出会い、つまりはあの運良く助けた時の好印象が全て台無しになってしまう可能性が大いにありえる。考えるだけでも恐ろしい。このすぐ隣で

歩いている天使のような微笑みを持った彼女に蔑んだ、もしくは恐怖の眼差しで見られるのだけは勘弁願いたいところである。
どんなに意識しないように勤めていても、どうしても負の方向へと思考が行ってしまう悠を余所に、何食わぬ顔で芽衣は「わかりました。でも、そちらの方が年上なんで《悠さん》って呼ぶことにします」と楽しそうに笑いながら言った。
この笑顔は危険だ、と悠は感じた。何をとってしてもこの笑顔を否定する材料が出てこない。
「わかった。なら、改めてよろしくだ――芽衣ちゃん」
「――――はい！」
本日最高の笑顔と共に最高の返事が返ってきた。
のどかな春の暖かな風に揺られながら彼女と歩く桜並木で、悠は不思議と温かな気持ちになっていることに気がついた。次々と移り変わる景色や風景を見て、楽しそうに自分の隣で道を歩く少女を見てみる。可愛らしい幼女に世間一般では残念なのかもしれない幼い躰。ロリコンの自分には確かにストライクだが、確かに興奮はするが、この体内から込み上げる熱はなんだろう。
春原の寮まで後三分もあれば着くだろう距離で、悠の足は立ち止まってしまった。
「あれ？　どうかしたんですか、悠さん」
突然の行動に芽衣は問いかけた。
なんだか深刻そうな表情のまま立ち尽くす悠を見ていると、酷く不安になってくる。恩人である悠が困っている。理由などそれで十分だった。
心配になった芽衣は悠の下へ近づき至近距離でもって顔を見上げてみる。整った美が付く顔が芽衣の視界に入る。助けてくれた時の彼は荒々しくも、それでいて優しさを兼ね備えていた。今でも思い出すだけで顔が熱くなってしまうが、そんな荒々しさも優しさも今は無く余裕の無さそうな表情で彼は虚空を見つめたままで芽衣を見ていない。

「あの…悠さん。聞こえてますか？　急に立ち止まってどうしたんですか。具合でも悪いならそこの木の下で休みましょうか？」
　こんなに近くに居るのに自分を見てくれない悠に、芽衣は悲しみを感じずにはいられなかった。その感情がなんなのかは分からないが、芽衣には少し怖かった。知らないうちに自分が変わっていまうのではないか、と己の知らぬ事に芽衣は恐怖していたのだ。
　そんな事を知らない悠は、自分の感情の整理するので手一杯な感じであった。今まで感じたことのない胸の高鳴り。体温が顔に集中する感じ。何もかもが初めてな所為か、真相を究明するのに忙しく目の前に居る芽衣に気が付かない。
　芽衣の笑顔に見入ってしまった。
　――俺はロリコンだ。そんなのは当たり前だ。
　芽衣の仕草や一挙一動にドキドキしてしまった。
　――幼女が好きなんだから当たり前だ。
　芽衣に悠さんと呼ばれて抱きしめたくなってしまった。
　――児ポ法の所為で抑圧された欲求の所為だから…当たり前だ。
　この子と一緒に居たいと思ってしまった。
　――……。

「……悠さん？」
　目の前の少女が愛らしい瞳に涙を浮かべている。
「そうか……そうだったんだ。……やっと…やっと、分かった……そういう事だったんだ」
　少女の涙はロクデナシの屑な人間である自分には勿体無く、何より見たくなかった。

《榊原さんは、私を邪険にしないんですね…》
その姿が、とある少女と被って見えた。
突発的に体が動いた。
「……えっ！？」
少女の――芽衣の驚いた声が、耳元で聞こえたが悠は構わなかった。
芽衣の小さなその躰を抱きしめ全身で体温を感じる。端から見ればただの犯罪者だが、そんな事は今の悠には瑣末事である。
高まる感情がうねりを上げ、止まることもせずに全てが弾き出される。感情は意志となり、意志は言葉となり、言葉は声となり悠の口から発せられた。
「……結婚してください！」

早朝から芽衣と会う緊張を酒で紛らわせようと瓶一気をしていた悠の男らしい？　……初プロポーズであった。

十章：停学最終日～男らしく？～（後書き）

さぁて、ネタが無いぞ……どうしましょ？
アドバイスや感想など募集中ですｗｗ

十一章：停学最終日～残酷な分岐～（前書き）

久しぶりの更新がこれ。
改めて自分は甘々な展開が苦手なようで、やはりこうなってしまう（汗

ひねくれた自分が嫌になる（涙
でも全身全霊執筆した話なのでどうかよろしく。ここから少しの間、色々とクラナドらしくない展開もあったりするかも。

感想、アドバイスなどなどくれたら執筆速度も上がります（現金な奴ｗｗ）

十一章：停学最終日～残酷な分岐～

――恋は、ある点では獣を人間にし、他の点では、人間を獣にする。

と言ったのは誰だっただろうか。少なくとも、今の自分は獣だろうと悠は思った。理性のタガが外れ、結果芽衣を抱き締めている。しかも、告白をすっ飛ばしプロポーズをしてしまった。

何故こんな事になってしまったのか、今日の出来事を振り返れば直ぐに分かる。現在へと繋がる過去の失敗を――。

「しかし緊張するな。如何に春原の妹と言えどもロリッ娘には変わりないから、下手に嫌われたくはないなぁ」

買い物に出掛ける二十分前の事であった。

それはまだ見ぬ春原の妹に想いを馳せ、高揚した気持ちになっていた昼下がりの時。これから春原に無理を言って会うことになっている芽衣に、人並みに緊張していたのがそもそもの発端だったのかもしれない。いくら《殲滅狂》として畏れられた悠でも人の子である。女相手に緊張をしてしまうのも仕方がない。

「……よし！　気付けに一杯行くか」

意気揚々と悠は台所にある棚を漁り始める。

そして出て来たのが一本の酒瓶。銘柄は《ＢＯＷＭＯＲＥ》と書かれている。

《ＢＯＷＭＯＲＥ》とは原産地がスコットランドのシングルモル

トで、まぁ俗に言うウィスキーだ。アルコール度数も結構高い酒で、まずストレートではお勧め出来ない酒である。

「これ高いんだけどなぁ。ま、良いか、呑んじゃえ」

値段のことを考えるも、微塵も気にした様子は無く封を開け一気に食道へと流し込む。

途端、食道から胃にかけて熱い液体が駆け抜ける。血液が沸騰し、細胞が熱く燃え、脳が活性化する。久しぶりに味わう感覚に、悠の気分は最高潮、とまではいかないが良かった。

「くぅぅぅ！　やっぱりウィスキーは一気飲みするもんじゃないな。躯が燃えるように熱いぜ」

だが、その姿に後悔の念は無く、逆に楽しそうであった。春原や朋也と行動を共にして一年、それまでの自分は最低だった。例え誰がなんと言おうとも、その評価は変わらないだろう。

光坂高校に編入するまでの悠は、悪逆とあらゆる暴力の極致に尽くし欲望のままに人生を生きてきた。偽りの仲間と生き、偽りの怒りに拳を振るい、偽りの快楽に身を任せ、偽りの人生を送ってきた。嘘でも楽しいと、充実した生活とは悠には思えなかったが、それしか知らなかったから。それしか出来なかった。

「変わったな、俺も。今の俺を見たら、アイツらなんて言うかな」

空になった瓶を弄りながら呟く。思い浮かぶのは嘲笑と失望が混濁した偽りの仲間の表情。

「別に何とも思っちゃいないけど、やっぱり気になるしな。……でも、今は噂の芽衣ちゃんの事で頭がいっぱいだし、まぁいいや」

くふふ、と少々不気味な笑い声を漏らすが表情は純粋そのもの。
その数時間後にプロポーズ事件が起こす事になるとも知らずに。

◇

時は戻り現在。
学生寮付近の道に佇む男女。
勢いでプロポーズをしてしまった悠は、混乱して硬直していた。
確かに芽衣は可愛い、がそれでもコレはやり過ぎだと客観的に自分を責める悠。出会って間もないと言うのに、いきなり抱きしめてしまったのだ、一体この硬直時間が解けたらどうなってしまうのだろうか。
肝心の芽衣はどのような反応をしているのだろう、と恐る恐る目線を下にやり顔を窺う。

「……えっ？　そ、その……わた、私なんか。あれっ…あ、えっ……？　い、いきなり言われても……」

林檎のように真っ赤になり、譫言を言う芽衣。初めての土地で困っていた所を、まるで王子様のように颯爽と現れては助けてくれた悠に少なからず好印象は持っていた。しかも百人が見れば百人が口を揃えてイケメンと言うほどの美形。多少ミーハーな芽衣には好みのタイプではある。そんな彼からの突然の告白。パニックに陥っても仕方がない。
しかし、答えないのも失礼だと思い、芽衣は勇気を振り絞って悠の顔を見上げる。

「あのっ……！」

「……何だよ、この状況」

声をあげようとした、その時だった。
お菓子やジュース類の入った買い物袋を手に持った春原が立っていた。恐らくは芽衣の為に買ってきたのだろう。普段の二倍以上買い込んでいた。

「あっ…あのねお兄ちゃん、これは……！」

「おっ、春原じゃねぇか。何やってんだよ」

芽衣が弁解しようとしたが、春原の声によって放心状態から解放された悠が横やりを入れた。全くもって悪気など一切無い声色で春原に話し掛ける。勿論芽衣から離れるのも忘れない。

「何って…芽衣が来るから、面倒だけど菓子とか色々買ってきたんだよ。それより！　なんで悠が芽衣に抱きついてるんだよ！？」

声こそ怒気が混じってはいるものの、その表情はどちらかと言うと困惑の色が濃かった。
買い物袋を道路に落とし二人に詰め寄り、春原は悠に掴みかかる。分けが分からないといった視線が悠に集中する。

「止めてよお兄ちゃん！　いきなりどうしたの！？」

「止めるな芽衣！　コイツは……駄目だっ！　コイツだけは…」

呆気に取られつつも、されるがままの悠を救うべく間に入ろうとするが、努力も虚しく怒り狂った春原は介入を許さなかった。

「慌てるなよ春原…、誤解だよ」

優しく、諭すように悠は言うが、

「誤解だって？　何がだよ悠っ！　今さっきまで芽衣を抱きしめてたじゃないか！」

春原には伝わらず敵意を悠に向けるだけだった。

事態について行けぬ芽衣はただただ二人を見つめることしかできないでいる。

「別に妹の事だ、僕が口出しすることじゃないけど……、それでも悠！　お前だけは駄目だ。岡崎が相手だったらしょうがないと思うけどお前が相手なのは絶対に許せない！」

「……それは、昨日話した事と関係があるのか？」

朋也は良い、自分は駄目。春原がここまで我を忘れて怒りに狂う姿を悠が見るのは、じつに一年振りだった。編入したてのあの頃、右も左も上も下も知らない悠に差しのべられた手。決して友情を誓う手ではなく外部からの危機を未然に防がんと圧力をかけまいとする手。差しのべられたその手を、その姿を認識してしまった悠はそれを期に大きな喧嘩を始める。その出来事が、朋也や春原と共に今を生き笑いあえるようにした。が、亀裂は埋まらなかったようだ。現に春原は朋也と悠を比べた、区別ではなく差別した。それが、何を意味するのか。悠に何を思わせるのか。わかっていて、悠はわかっていて救いを求め話を逸らそうと一年前をは全く関係のない話をした。

「お前が《あれ》なことだろ？　そんなの関係ない。本当に《あれ》だとしても、僕は気にしない。人間誰だってそういうのはあるんだからな…。僕が言いたいのはそんな《些細な》事じゃなくて、一年前の……」

その口が、その喉が、友人の顔をしたその顔が、決して言ってはならない事を口にしようとする。

「…一年前、お前が」

嗚呼、何故だろう。悠は視界がぐらつき世界が反転するのを見つめながらに思う。

自分は、どこで何を、間違えてしまったのだろう。ちょっとした気の迷いと欲に惑わされとってしまった行動。いまの自分は表面では馬鹿にしたり罠に嵌めたり、でも内心一緒に笑い会える数少ない友人である春原を怒らせた。傷つけた。そして今、自分自身が傷つけた者に傷つけられる。

なんという悲劇。

なんという喜劇。

残酷な神が書き連ねた悪魔的脚本は次なるページは、今か今かとめくられるのを待ち構えている。

「……お前が●●●●●●●●！」

春原が吐き出した声は言の葉は、言葉となり言霊となり対象を蝕む呪詛になる。

春原の叫びに似た声を耳にしてしまった芽衣は驚愕に瞳を丸くする。ぶっきらぼうだが、自分にいつも優しい兄が怒りを露にするのは始めての事じゃない。いつだって兄は自分を守るために憤慨する。傷つけようものなら容赦などせず、力尽きるか相手が逃げ出すまで力の限り暴れ続ける。それでも芽衣にはヒーローのような存在だった。

だから信じたかった。今回も勘違いした兄が自分を守るために憤慨しているのだと。それならば、頑張って誤解を解けば解決する話。そしたら、全ては丸く収まるのに。なのに、そんな芽衣の《たられば》の推測――願望はあっけなく砕け散った。

先日、悠達と別れやることも無かった朋也は、その夜父親と喧嘩とも言えぬ喧嘩をして家を飛び出し、夜の公園で《古川渚》と再び出会った。

演技の練習をしていた渚は、朋也の空洞になった胸を暖かく埋めてくれた。家に来ませんか、と言われ言われるがままに着いて行ってしまい、朋也を見て悠の後ということもあり暴走する秋生や娘に友達が増えて満開の笑顔を振りまく早苗と、そんな光景を見ながら微笑む渚に朋也は記憶にないはずの幸せを感じていた。また来ると渚に約束をして家に帰った朋也は、珍しく穏やかに眠ることができた。

翌日、友人の妹である芽衣が気になってやはり春原の寮に向かっていた矢先の事だった。

先日の出来事を帳消しにする、出来ることならこの先、一生聞きたくなかった単語が否が応にも聞こえてきた。

朋也に厭な予感が走る。

まるで一年前の再現だと、冷水を浴びたように冷えた脳が警告する。

気がつけば走り出していた。脇目も振らず走った。息が切れようとも。肺が裂けようとも。足の腱が切れ血反吐を吐くことになろう

とも、朋也は走った。守りたかったから。闇が深くなり夜が濃くなった世界で己を不安そうに打ち明けた親友の姿が脳裏に浮かんでは消えてゆく。まるでその存在が消え逝くような、新しいなにかに上書きされていくように浮かんでは消えてゆく。

「馬鹿野郎！　なんだってあいつはこんなにトラブルばっかり持ち込んで来るんだよっ！」

目指すは学生寮前。

未来を変える。それは簡単に、単純に考えれば実に容易なことである。

分かれ道を右に行くか左に行くか、はたまた引き返すか。それこそ無限に選択肢は存在する。が、しかし過去はまったくの別物。未来とは連結してはいるが、それは変えようのない足枷。吐いた唾が飲めないように、過ぎ去ってしまった事に出来るのは後悔しか許容されない。なら、今この瞬間に生まれた《過去》は変えられるのか？　否。断じて否である。出来るのは後悔。抗うのは自由。失うのは自律。

ならば、

「また……いや、もう終わりなのか。こんなにも些細な亀裂に耐え切れない日常なんて、とうに見限ったと、吹っ切れたと思ってたのに」

この悲劇のような、

「いつだってそうだ。一年前も、そのまた前も、そのさらに前も…今だって。何を勘違いしてたんだろうな俺は。そうだよ、何で気が

つかなかったんだよ俺は、ははっまるで莫迦まるで阿呆まるで愚図まるで愚鈍まるで……家畜」

喜劇のような御伽噺の

「ははっ……あははっ、アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

悪魔のような脚本の舞台が新たな一ページを、

「わかった、何もかもがワカッタ。春原、お前がそれを言った言ってしまったと言うことは、朋也もソウという訳か。イイゼ全てが舞台。太陽は照明となり登場人物を照らし。木々や草花は背景として物語のリアリティを表現し。エキストラは糞ったれな日常を描写し。夜は物語の《闇》を際立たせ、登場人物は皆道化を演じる。最高だ、最悪の気分だ」

新たな幕を残酷な神が、

「今日は帰る。…明日から、俺たちはまた回帰する。当然だよな、お前と朋也が望んだシナリオだ。俺は《好きにヤル》だけだ。一年前のやり直しだな。……それじゃあ芽衣ちゃん、縁が合ったら、また会おう」

上げ、そして始まる。

幾重にも可能性のあった未来は潰え、残酷な分岐を果たした世界に《殲滅狂》は這い上がり奇刃(きば)を剥く。

十一章：停学最終日～残酷な分岐～（後書き）

さて、物語も佳境に……なんて事はありませんｗｗ
次章は壊れて狂って本性と言うか本能剥き出しの悠がどこかで暴れる話、の予定ｗｗぶっちゃけ予定なんかしょっちゅう変わるしｗｗｗ

てな訳で、またいつかそのうち。

十二章：停学最終日～様々な葛藤、加速する物語～（前書き）

お久しぶりです。
さて、オリキャラと言うかモブキャラも登場して悠の暴走篇は起をへて承へと動き始めました。
どのような展開になるかはお楽しみ。

……感想、アドバイス等欲しています。
俺に、やる気を下さいｗｗｗｗ

十二章：停学最終日～様々な葛藤、加速する物語～

失われたものは取り戻せば良い。

なら、喪われたものは取り戻せるのだろうか。

全てを見限った悠が去った二分後、息を切らしながら朋也が春原と芽衣の前に現れた。

「はぁ、っはぁ…春原、悠は！？　悠はどこ行った！？」

「もう帰ったよ。それより、なんで岡崎がここにいるんだ？」

両手で膝をつき大きく深呼吸して呼吸を正常に正している朋也に、不機嫌な表情の春原は尋ねた。

「馬鹿野郎っ！　お前、アイツに《あれ》言ったのか？」

「……言ったさ」

「っ！　わかってるのか！？　《あれ》は絶対に、二度と言ってはいけない言葉なんだぞ！」

どうして！　と言葉に続いて朋也は半ばヤケになっている春原の胸倉に掴みかかる。

朋也の悲痛な叫びにも似た訴えに、驚いた芽衣がビクリと肩を震わす。

朋也が春原の友人だという事を芽衣は知っていた。以前、芽衣が寮に連絡した際に春原本人から聞いていたのだ。

朋也の顔は知らなかったが、先程春原が《岡崎》と呼んでいたので、この人が《岡崎朋也》なのか、と芽衣は理解していた。
少し酷い奴だが、根は良い友達だと春原は言っていた。にも拘わらず、その朋也は無抵抗の春原に怒りの形相で迫っていた。
芽衣には、もう訳がわからない。
窮地を救ってくれた悠に告白され、兄の春原がそれを糾弾し、悠が――――だと言った。

信じられなかった。
興奮した兄の戯れ言だと信じたかった。

「仕方ないだろ！　悠は芽衣に抱きついてたんだから。そんな奴、もう信じられるかっ！」

朋也の腕を振り払い、怒鳴る春原。
その顔は不安と憤りが混濁していた。
そんな春原の顔を見て朋也は、

「…怖かったんだろ」
「……はあ？」
「悠が怖かったんだろ？　そこに居る芽衣ちゃんに抱きついてた現場は見てない。けど、お前が取り乱すぐらいだ……あの時の悠と《あの子》が被って見えた。たがら怖かったんだろ」
辛そうに、そして悲しそうに言う。

「うっ……」

どうやら図星だったらしく、春原は二の句が続かず黙ってしまう。
そう、春原は少し後悔していた。
芽衣を抱く悠の姿に過去の事件を重ね、激情した感情がいつの間

にか悠を責めぬいていた。本心ではなかった。ただ、不安だったのだ。
昔の悠が戻って来てしまったようで、過去の、一年前朋也と春原の前に立ちふさがった《殲滅狂》としての悠が舞い戻って来たようで不安だったのだ。

「心配するな、まだ引き返せる。アイツは……悠は、そんなに弱くない」

春原の心情を察したように語る朋也は、堂々としており逞しく見えた。
思えば、岡崎朋也という男はそうだった。
いつだって友達想いで、冷たい男を演じてはいるが、根本では友のために立ち上がる熱い男なのだ。
春原は自分が恥ずかしかった。
芽衣と悠を見て取り乱し、なんでも出来る悠に嫉み、妬み、そして――憧れていた。

「ふっ、全く僕も何を考えていたんだろうね。ホント馬鹿みたいだ。そう思うだろ？　なぁ、岡崎」
「いや、お前は馬鹿なんかじゃないさ」
「……岡崎、お前」
「ただのクソッたれなロクデナシだよ」

朋也は良い笑顔で言い放った。

「ちょっと！　そこは『最高の友達だ』って言って僕との友情の深さを芽衣に見せつけるところでしょぉ！！」
「わりぃ……お前って、俺の友達だったっけ？」
「もはや友達でもないんですねぇ！？」

「いや、困ったなぁ。春原は俺と友達だったのか…すまんな」
「う、うわぁあああああああ！　俺もグレてやるぅうううううう！」

人目も憚らず男泣きして学生寮へと走り出す春原。
その後ろ姿は、なんとも哀愁漂う背中であった。

「ふぅ、本当に単純な奴だな」

そう溜息を吐く朋也の表情には、肩の荷が下りたようなスッキリとした笑顔が浮かんでいた。
まだやることは沢山ある。きっと、恐らくどこかで暴れているかも知れないアイツにも説教かましてやらなければならない。そう思う事で、朋也は自分を奮い立たせる。
自分にだってやれることは沢山あると。

「……あの、岡崎さん……でいいんですよね？」

ちょうどその時だった。
朋也の背後に立つ芽衣が話しかけてきたのは。

◇

榊原悠は珍しく湧き上がる昂揚感に身を震わせていた。
脳に随時送られる破壊衝動の信号。それは、悠を逆行させるにはそう時間を要さなかった。もともとが《そういう側》に立つ人間である悠が、迷わず本能に身を任せるのだ。獅子が兎を狩るよりもその速度は速い。
工業高校の連中が好んでたむろす通りを歩き、獲物を探す。
見つければ即座に己が持つ獰猛で歪な《奇刃》の餌食となる。抑

圧された欲望の塊が、あのキッカケを気に爆発的に広がり、悠をそうさせる。

「早く、早く見つけなきゃ。じゃないと――」

――一般人を襲ってしまう。

もはや、今の悠は一匹の餓えた狂狼だった。

元から他を拒絶させる切れ目から覗かせる金色の瞳は、今や朱が混じり酷く濁っている。口の端も歪につり上がり、全体的に圧倒的な美形であるその顔は、欲と憎悪に狂いまったくの別人へと変貌していた。

かろうじて残った理性の残滓が、朋也達を思い出させる。

みんなが笑顔で自分を見る姿が、たちまち恐怖の色に染まる。まるで自分を化け物みたいに見る。それが恐くて怖くてたまらない。

「……ふん、どうでもいい事だな。もう《戻れない》んだから」

自嘲する悠。

くるくるクルクル廻る。

「でよー、あの野郎ったら、あの光坂高校に居る坂上智代に復讐しようとして返り討ちにあったらしいぜ」

「ガチで！？　馬鹿だろアイツ、坂上にかなうはずねぇってのに」

道すがら工業高校の連中が、コンビニの駐車場でたむろしており以前起きた出来事を話していた。

《光坂高校》《坂上智代》その二つの単語に悠は反応を示し、隠れて立ち聞きする事にした。

「でもよぉ、確かに坂上は出て来たらしいけど……あの榊原まで出て来たらしいぜ」
男は険しい表情をしてそう言った。
「……榊原って！　そりゃお前まさか、あの《殲滅狂》の野郎か！？」
「そのまさかだよ。アイツ、コッチの高校ドロップアウトして良いとこの進学校に行ってたんだよ」
「それ、かなりヤバいだろ。榊原が報復しにこっちに来たらどうするんだよ」
男達は自分らに火の粉が降りかかるのを恐れ、どう逃れようかと思案している。
莫迦な会話を聞きつつ悠は考える。ここであの男達をヤッてしまってもいい。が、そうした事で更なる報復を恐れた工業高校の連中が、恐怖の芽を摘み取ろうと光坂高校に全面戦争を仕掛けて来るかもしれない。
それは悠も望まない、最悪の展開である。
今回だけはそれに免じて見逃してやろう、と思い立ち去ろうとした時、
「それなら、榊原が手を出せない状況にしちまえば良いんじゃないか？」
足が止まった。
「…なんか良い案でもあるのか？」
「簡単だ。アイツの家、引っ越しもしてなくてまだあの場所に住んでるんだよ」

背筋が凍る。

「だからどうしたんだよ。確かにアイツの家は大抵の奴が知ってる。野郎がうちらの学校から逃げ出した時に、けじめとして制裁しに行ったからな。……まぁ、全員三ヶ月は病院暮らしになったけどな」

全身を、体中を戦慄が駆け抜ける。

悠が思いつく六つの策の中でも、最低最悪、鬼畜中の鬼畜。

「野村達が光坂に乗り込んで返り討ちにあった。その後にな、まだ《殲滅狂》がこの町にいることが分かった。だから、俺と舎弟達でもって榊原の家を見に言ったんだよ。一度は半径三キロは近寄ったら半殺しどころか、九分殺しにあわせるって脅されたけど。それでも気になった俺達は、一体何を見たと思う？」

ニタァ、と男の顔が歪な笑顔になる。

駄目だ。どう考えても、どう思考しようとも結果が変わらない。

悠の背中から冷や汗が流れる。

「……一体何を見たんだよ」

「アイツ、今彼女がいるぜ。紫のロングで気の強そうな、それでいてスタイルも良い、美少女がよ」

それを聞いて、悠の予感は確信へと変わった。

後の事は聞かなくても分かる、《分かってしまう》。自分の先読みがこうも己を苦しめるのは耐え難い苦痛だった。

男達はそんな悠の心情などつゆ知らず、話しを進める。

「マジかよ！？　よく彼女なんて出来たな榊原の奴。確かに顔は上

の上だけど、本性を知ってる人間ならまず近寄らないぜ？」
「そんな事はどうでもいいんだよ。要はその女だ。多分……いや、絶対にそいつは光坂の人間だ。だから――――」

突如、男の下劣な笑い声が響く。
自分の聡明さに笑いが止まらないのだろう。
悠の方は既に憔悴しきっている。肉体的な苦痛など、どうにでもなるが精神的なことになると全くの別物。
だから、自分が持ち得る頭脳の全てを全開で駆動させ、事態の回避方法を演算する。

――――だが、撃鉄は起き、引き金は引かれ、弾丸は確かに飛び出した。

「――――攫っちまおう。既に舎弟達に命令は通ってる。今頃、《あの場所》に幽閉してるだろうさ」

その後はどうなったか、悠には分からない。
プツンと、ブレーカーが落ちたように視界も思考も真っ暗に閉ざされた。

いつだって悪は悪でしかない。

手に感じる温かさ。真っ赤な朱色の手。それを、真っ暗な世界から見て悠は思った。
後悔先立たずとは言うが、自分はいつだって後立たずだ。先に立つ後悔は闇を回避出来うる能力だと思っていたが、どうやら道化を演じる為らしい。
――――それにしても、嗚呼、手が温かい。

◇

その頃、藤林杏は双子の妹である椋と学校を出る途中で、まだ校舎内に居た。
授業も終わり、椋と合流した杏はこの後悠の家に訪問しようと考えていた。

「ねぇ、椋……そう言えば悠の停学って今日までじゃない？」
「えっ？　そうだけど、急にどうしたのお姉ちゃん？」
「いや…だ、だから停学終了をお祝いしてアイツの家で小さなパーティーでもしようかなって……思ってたりしたんだけど。べ、別にあたしがどうしてもやりたいって訳じゃないんだけど。ほ、ほらっ…アイツって強がってクールぶってるけど、意外と寂しがり屋じゃん？　だから……どう？」

さり気なく、間違っても自分がやりたいとは言わない。この思いは椋には知られてはいけないから。そうしなきゃ、この子は絶対に悲しみながらも、決してそれを表には出さずに笑顔で譲るから。
答えを待ちながら、杏はそんな事を考えていた。
肝心の椋は数秒ほど思案した後、顔を赤くする。これが漫画なら、絶対に頭から湯気が上がっていることだろう。

「そ、そうだね。榊原君も一人は寂しいもんね」
「じ、じゃあ決まり！　ほら、早速帰って準備するわよっ！」

肯定の答えを聞いた途端、嬉しそうな顔をする杏だが、それを隠すように椋の前に立ち背中を見せながらその手を引いて、走り出す。
放課後の廊下を、悠に好意を持つ二人の少女が走る。

意中の人が笑える、そんな空間を作りたいが為に。

「ほら、遅いわよ椋。早くしないと、アイツ寝ちゃうかもしれないわよ。ただでさえだらしない奴なんだから」
「ま、待ってよお姉ちゃん。そんなに速いと、転んじゃ……きゃっ！」

校門を走り抜けた瞬間、椋は誰かにぶつかり尻餅をついた。

「あっ、ご、ごめんなさい！」
「全く……ゴメンね、家の妹が……っ！」

振り返り、杏も謝罪をするがその顔が一気に険しくなった。
ぶつかった人物の風貌が、お世辞にも善人とは言い難い人物だったからだ。

「いってぇ～。どうしてくれんだよ姉ちゃん、これ絶対に肩いっちまったよ」

「おいおい、大丈夫か拓郎？」
「酷いなぁ、とりあえず車に乗ってくれない？　坂の下に止めてあるから」

それも単独ではない。人数は四人。悠が立ち聞きしていた男の舎弟達で、人攫いをやるなら複数人でないと直ぐに足が着く。そう危惧した男が命令したのだ。
拓郎と呼ばれた男を中心に、椋は取り囲まれる。厭らしい笑顔が鼻につく。

「えっ、あ、あのっ。……私、そんなに強く当たったつもりは……」

恐怖感から椋の声は途切れ途切れで、声も上擦っている。瞳からは既に涙が滲み出ていて、その顔は困惑の色に染まっている。
妹が危ないと思った杏は、どこからともなく辞書を取り出し力の限り投擲する。
辞書は見事に一人の男に命中した。

「あぐっ……！」

その一撃で男は昏倒した。
が、それで黙っているほど男達は根性なしではなかった。ましてや女相手に退くわけにもいかない。

「お姉ちゃん……！」
「てめぇ……覚悟は出来てんだろうな！？」
「ぶさけないで！　あんた達が家の妹に手を出そうとしたからでしょ！　そっちこそ、あたしに殺られる覚悟は出来てんでしょうね！」

毅然とした態度で男達と椋の間に立ちはだかる。

椋は嬉しそうに、けど恐怖感と不安が拭えないといった顔をしている。
だから、杏は椋を見て、
「大丈夫よ、あんたはあたしが守るんだから」
輝かしい笑顔を振り撒く。
全ては椋の不安を拭い去る為。
杏だって流石に怖い筈、だけどそれでは椋は守れない。自分が強くならなければ椋は守れない。
――だから。
「さぁ、どっからでもかかって来なさい！」
両手に辞書を持ち、杏は立ちはだかる。
そんな時、悠の顔が脳裏にちらついた。
「このアマァ、上等じゃねえか！　女だからって手加減なんかしねぇぞ！」
「待てよ拓郎！」
「あぁ！？　翔太、止めるならお前からやんぞ？　ごらぁ！」
「落ち着け、この女、写真の女だろ」
そう言って、翔太と呼ばれた男は懐から一枚の写真を取り出した。
そこには確かに杏の私服姿が写し出されていた。どうやら悠の家に入る際、盗撮されたらしい。
写真の女には手を出すなと言われていた拓郎は、「うぐっ」っと唸り渋々握った拳を解く。

「仕方ない、後藤さんには逆らえねぇ」
「だろ、目的を間違えたら駄目だろ？　じゃないと、俺達の身が危ういい」
「さっきからコソコソと、かかって来るの？　来ないの？　来ないならサッサと消えてくんない？」

痺れを切らした杏が、鋭い眼孔で拓郎達を睨む。

「いやいや、悪かったな姉ちゃん。でも、俺らも命令なんでな……悪いとは微塵も思っちゃいないが一緒に来てもらうぜ」

先立って拓郎が言う。
下劣な笑みを浮かべ杏ににじり寄る。

「冗談じゃないわ。そんな頼み事、通ると思ってんの？」

抵抗しようと辞書を振り上げ、投擲態勢に入る杏。
が、それが放たれる事はなかった。

「お、お姉ちゃん……」

振り返れば、椋が一人の男に拘束されていたからである。
耐えきれなくなった涙を流しながら顔面蒼白の椋は、杏には最大の足枷となっていた。不良をあまり知らない杏にだって分かる。手を出そうとするなら、椋がどんな酷い目にあうか。
「分かるだろ？　妹が綺麗な躰でいてほしいなら、大人しく着いて来い」
「おい、アブ！　その手ェ絶対に放すなよ！」
「わ、分かってるよ。…それにしても、可愛いなぁ……ぐひゅっぐひゅっぐひゅっ」

アブ、とは恐らくはあだ名だろう。その男は、椋の両手を後ろで拘束しながら低俗極まりない笑い声を上げている。
それが椋を更に恐怖へと誘う。足を中心に小刻みに震え始める。

「ふ、震えてる姿も…ぐひゅっ……たまんねぇなぁ」
「っ！　あんた椋に変な事してみなさい！？　絶対に、産まれてきた事を後悔させてあげるから！」

瞼を閉じ、背後から聞こえる厭らしい声に顔を歪める椋を見て、激高した杏が叫ぶ。

「おっと、そうはさせねぇよ。なんかしたら変態のアブが妹ちゃんをボロボロにしちまうよ？」
「くっ……！」

拓郎の言葉で失意に堕ちた杏は、仕方なく辞書を地面に捨てる。悔しいが、今は言うことを聞くしかない。そうしないと、椋が危ない。

杏が無抵抗を示すと、拓郎は満足したのか期限良さそうにしている。

「そうそう、そうやって大人しくしてれば何もしやしねえよ。お前、榊原悠の女なんだろ？　だったら優遇しなけりゃな」
「なっ！　あ、あたしが悠のお、おおおお女だって！？　なんでそうなるのよ！？」

顔を真っ赤にして否定する杏の姿は、拓郎達には全くの逆効果だった。

皆、ニヤニヤとした顔をするだけで杏の言葉を信じようとしない。
「謙遜するなよ。あの《殲滅狂》の彼女になるなんて度胸があるかそうとうの気違いじゃないと、そうそうなろうとも思わねえよ」
「何が、言いたいのよ」
《殲滅狂》と言う杏には聞き慣れない言葉に、つい耳を傾けてしまった。
「なんだ、知らないのか？　まぁ良いや、話は車内でゆっくりとしようや」
拓郎は杏に背を向け、坂道を下って行く。
それについて行く他の男達。当然アブと言う変態もついて行く。
その手に椋を引っ張って。
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　なんで椋まで……！」
「ん？　あぁ、保険だよ。万が一抵抗されちゃあ困るからな。安心しな、アブは俺達が命令しない限りは何もしやしないさ」
「そ、そういう事だ。ぐひゅっぐひゅっ……なぁ、りょ～おちゃん？」
「うっ……ひぐっ、うえ……お、お姉ちゃん」
アブが厭らしい声で椋に問う。が、椋は涙を流して嗚咽を漏らし、姉に助けを乞うだけだった。
苦しむ妹を目の当たりにして何も出来ない杏は、悔しくて仕方がなかった。握った拳は強すぎて血が滲んでいる。
「……卑怯者」
「ふんっ、なんとでも言いな。これであの榊原悠がブチのめす事が

出来るなら、俺だってなんでもするさ」

自嘲するように鼻で笑い、坂下の車に乗り込む。

時折、杏は願っていた。いきなり悠然と立ちふさがり、いつものように飄々と相手を言葉で翻弄し、不敵に笑う悠の姿を。

しかし、世界は残酷で、非情にもそんな希望的観測は現実にならなかった。

◇

「そうだけど…どうかしたのか、芽衣ちゃん？」

振り返った朋也が見たのは、さっきまでのオロオロと狼狽した芽衣ではなかった。しっかりと瞳の奥に強い意志を秘めていた。

「聞きたい事が、あるんです」

◇

杏の誘拐を唆した男と、一緒にいた他の男を九分殺しにした悠はある目的地に向かっていた。

男の意識を刈り取る前に、しっかりと全てを吐かせていた。

誘拐先から人数。それが誰で指揮は誰が取っているのかまで、洗いざらい聞き出していた。

「……間に合えよ」

地を揺るがす轟音を轟かせる鉄の塊に跨り、全速力で駆け抜ける。

どうやら《榊原悠》としての自分は捨て去れないらしい。どんな

に狂気と欲望に身を埋めても、いざ周囲の人間が危機に晒されると情が働く。

アクセルを全開まで開け、行動を駆ける。

いつの間にか髪型はポニーテールになっており、その姿を見た不良達は《殲滅狂》が再来した、と恐怖した。

――――だが、悪魔の手掛けた脚本は、まだ序章に過ぎない。

十二章：停学最終日～様々な葛藤、加速する物語～（後書き）

はい、厨二乙とか思ったアナタ。

……気にしたら負けです。

とりあえず、色々吹っ切れた春原。決意した朋也。悠の過去を知って何を思うのか芽衣。悪漢に捕まった藤林姉妹。物語の渦中にいる悠。

全てを一つにするのが辛い作者！ｗｗ

最早収集がつかなくなってる（汗

あっ、智代とかことみとかもちろん渚とかロリな風子とか本作で影が薄い彼女達にも活躍の場はあります？

十三章：停学最終日～救いを求める者～（前書き）

どもどもです。

今回は、なんだか自分にはらしくない程長文になってしまいました（汗

とりあえず、停学篇（いつそんな名前がついた）もなんとかそろそろクライマックス間際にｗｗｗｗ

感想まってま～す（キモッｗｗｗｗ

十三章：停学最終日～救いを求める者～

思えばあれはいつの出来事だっただろうか。
誘拐を唆した男から奪った改造バイクを走らせながら、悠は過去を振り返る。

藤林杏との出逢いは、ちょうど編入して間もない頃だった。
その時の悠は、今とは打って変わって人形のようだった。受け答えはするものの、芯に意志が存在しなかった。いつもつまらなそうでいて、この世の全てを憎んでいる。そんな、一風変わった編入生と見られていた。

「…殺してやる。あいつに指一本、いや髪一本でも触れた奴は……皆殺しだ」

人を殺す事に一変の躊躇いも無いように、怨嗟のごとき呪詛を吐き出す。が、バイクのマフラーから吐き出される轟音に掻き消える。
こんなにも悠が殺気立っているのは、別に杏が好きだからとかではない。ただ、自分の周囲にいる人間が、自分の所為で苦しませたくない。それだけなのだ。見限った朋也や春原はともかく、杏は今回の件には全くと言っていいほどに無関係。それは火を見るよりも明らかなこと。だから、これが己が招いた事態なら、黙って責任を取るだけ。

後方から懐かしい音が聞こえてくるが、今は構ってあげる時間は無い。
ポケットから取り出した小さな四角形の《何か》。ハンドルに付いたミラーを頼りに、目標を定め《何か》を放り投げる。《何か》は綺麗な放物線を描き、見事に命中した。

当たった対象はパトカー。投げた《何か》は、時間が経ってとろけかけたハイ〇ュウ。
ハ〇チュウはパトカーのフロントガラスにぶつかった瞬間、蜘蛛の巣状に弾け前方を塞ぐ。結果、視界が塞がれたパトカーは急ブレーキして追走を断念する形になる。

「さて、邪魔な奴もいなくなった。……なら、することは一つだな」

既に限界速度を越えているバイクに鞭を打つ。さらけ出している肌が刺すように脳へと痛覚信号を送るが、今はそんなの瑣末な事。

バイクを走らせながら、再び追憶する。
人形だったモノに命を吹き込んだ、勝ち気で気の強い、それでいて脆い少女を。

◇

「悠さんとは、その……友達なんですよね？」

先の出来事が原因か、少女――芽衣は気まずそうに朋也に問う。
春原が半ばヤケになって寮に帰った後、今後をどうするか、どうやって狂気に囚われた悠を救うか思案していた時。芽衣に声をかけられた。

顔を合わすのも初めてだが、どこからどう見てもやはり兄とは似ていない。遺伝子情報からして間違えているとしか朋也には思えなかった。

そんな芽衣が、自分に問うた。

悠とは友人なのか？　と、暗にそう言っているように感じた。

「…そうだな。あいつがどう思っているのかは知らないが、少なくとも俺はそう思っているよ」

自身はあった。堂々と親友だ、と言ってやりたいが気恥ずかしさがそれを制した。

答えに満足したのか、芽衣は安堵の笑みを浮かべた。

「良かった。これで何の関係もないなんて言われたら、どうしようかと思いました」

「おいおい、何で芽衣ちゃ……そう言えば自己紹介がまだだったな。俺は岡崎朋也、まぁ悠の友達で…一応春原の多分、主人でもある。よろしくな」

春原との関係に芽衣は苦笑いを浮かべるも、嫌悪感を示したりはしていない。兄がそう言われても仕方がない人物だと、芽衣自身も知っているからだろう。

「主人……ですか。なんとなく納得してしまう程の理由を持つ兄を持って、少し困ってます。でも……仲が良いんですね」

「まぁ、仲の良い悪いで言ったら確かに良いけど……」

「申し送れました。もうご存知かもしれませんが、私は春原陽平の妹で春原芽衣と言います。ついでに、別に《芽衣ちゃん》と呼んでも構いません」

兄の事に関しては頭を抱えたくなる芽衣だが、自己紹介の際には既に向日葵のような笑顔で話す。

あんな事があったにも拘わらず、芽衣は笑顔を浮かべる。ただの小さな少女とは思えない強さを、実は秘めているのではないだろうか。

夕暮れ時に、片や高校生で片や小学生にも間違われる恐れがある中学生が、二人向き合い楽しそうに会話をしている。

端から見れば、変態が幼子を毒牙にかけようとしていると見られても、おかしくない。

「わかった、じゃあ改めてよろしくな芽衣ちゃん」

「こちらこそ、あんな兄ですがこれからも仲良くしてくれると嬉しいです」

「あいつとは腐れ縁に近いからな。それより、寮に行かないか？積もる話もあるだろうし、俺も、俺が駆けつける前の居なかった間の話とかを訊きたいしね」

今はとりあえず、悠の状態が知りたい。それからでも行動は遅くない、と朋也は考える。

最悪の場合、一年前の焼き直しになる。出来ることならそれは、それだけは朋也としても避けたかった。だから、対策を練るためにも春原の存在は必要不可欠になる。だから、寮に入る事を朋也は提案した。

芽衣は朋也の提案に快く「分かりました、私も……悠さんの事は気になりますし、お兄ちゃんの部屋を見なければいけませんからね」と承諾し、寮へと向かい歩き出す。

後を追うような形で朋也が続いて寮に向かう。

春の夕暮れは、何かの終わりを告げるような静けさを持っていた。

◇

杏と初めて会ったのは、当時の悠と杏が在籍するクラスの教室だった。
簡略して言うと、単に担任の教師が編入生を紹介する時に、たまたま杏が目に入ったという、なんの特別でもない陳腐でありがちな出逢いだった。
視界に入っただけで、悠は気にもとめず指定された席に着く。空きの机が他にもあったが、それは当然のごとく遅刻をしている朋也と春原の机である。

容姿の良い悠は休み時間になれば編入生に対する好奇心と、その整った容姿が相乗効果を発揮して絶大の人気であった。
「ねぇねぇ、彼女とかいないの？　良かったら、今日一緒にご飯とか食べに行かない？」
「……」

悠の外見に惚れた女子はかなりいた。が、だからといってそれで悠が付き合うのとは直結しない。
当時、意志を持たなかった悠には目障りなだけであった。
自分に近寄る人間全てを遠ざけ、孤高であろうとした。孤独でいるなら孤高の方が良い。
編入してから一週間。悠の評判は、恐慌でも起きたのかと言うほどに暴落していた。度重なる遅刻と授業をサボり、編入当時の人気は雲の彼方まで吹き飛び、朋也や春原と同じ不良のカテゴリーに分類されていた。

その頃だろう、藤林杏と関わり始めたのは。

「《珈琲喫茶リア》…間違いなくここだな」

目的地に着いた悠は、バイクから降り気配と溢れる殺気を押し殺し静かに扉へと近づく。

本当に杏が居たならば、いや、居ないのが一番だ。居たら自分は一体何をしてしまうか、もう抑えが効かなくなっている。

ゆっくりと扉に手を掛ける。

――さぁ、茶番を始めようか。

◇

車内に幽閉されてから、およそ十五分が経過した頃。アブに捕まった椋は、もはや満身創痍。呼吸をするのが精一杯といった感じであった。

杏はこの状況で拓郎達が油断し、椋を連れて逃げるチャンスを虎視眈々と狙っていた。だが、考えでも考えても最善手が見つからない。

ワンボックスの車で、運転席に一人、助席に一人、後部座席には両側に二人、杏と椋は真ん中で逃げられないように挟まれている。

状況は絶望的。

どんなに考えを巡らしても解答が出てこない。

あいつなら、光輝く金髪の少年ならこの状況すら不敵に笑って簡単に、それも手品のように見事に打破するのだろう。

途端、不安と恐怖が杏を襲った。椋を守らなければいけないという脅迫観念に近い使命感が、これまで杏を支えていた。なのに、悠の事を想った途端にそれは襲いかかってきた。

――助けて欲しい。

しかし、願った所で叶わない。
現実は残酷にも事実を思い知らせる。
「しかし、まさかあの榊原に彼女がねぇ……お前、正気か？」
せせら笑いながら隣に座る拓郎は杏に言った。
「……それ、どういう意味よ？」
「そのままの意味さ。あんな危ない奴、友達にだってなりたくないさ」
「随分な物言いね。でも、あいつにだってちゃんと友達ぐらいいるわよ」
反撃のつもりで言った言葉を聞いて、拓郎は笑い始めた。
すると、他の三人も聞いていたのか、皆一同に笑い始めた。笑い声は合唱し、車内に響き渡った。
「お、お姉ちゃん……なんか、この人達変だよ」
「あんた達何がおかしいのよ！」
「だってよぉ、あの榊原に友達だぜ？　ありえねえよ。あいつはこの世の全てを利用しようとしてる最低の人間だぜ？　自分に不利になったら躊躇いなく、容赦なく、利用される前に利用する人間だ。そんな奴に友達……ぷっ、あはははははは！」
笑い声は止まらない。
怯える椋と、それをお首にも出さない杏は、ただ声が止むのを待った。
一番に笑うのを止めたのは翔太だった。
助席に座る彼は、杏と椋の方へ振り向き「あいつはな……」と、

語り始めた。

「俺らが通う工業高校にいた時、全校生徒の過半数を病院送りにしてるんだよ」

「えっ？　なんでそんなこと……」

「本人曰く《気に入らない》《目障り》《俺の視界に入ったから》だそうだ。ふざけてるだろ？　知らないようだから教えてやるよ。榊原はな、この町の不良なら知らない奴はいないって程のワルで、あいつの所為で人生をメチャクチャにされた奴も少なくない」

思いもよらぬ悠の過去に、杏と椋は言葉を失う。

悠が不良なのは二人とも一年前から知っていた。だけど、それは光坂高校に編入してからの話。それ以前の悠を、二人は知らない。

一年前に、朋也と春原の二人と大喧嘩をしたのは知ってはいる。だから、その事を言っているのかと最初は思ってた。

だけど。

「気に入らない奴に彼女がいれば、構わず横から奪って寝取るし。刃向かえば半殺しどころか、九分殺しっていう虫の息になるまで暴力で黙らせる。しかも、それを簡単に実行出来ちまう程の強さと頭脳があるんだよ。暴力事件だけでも一年間で七十以上は起してるのに、あいつは一度だって捕まらない。不良の俺達でさえ引いちまう恐ろしい奴なんだよ。だから、あいつに《殲滅狂》なんてあだ名がついたのさ」

「……《殲滅狂》？」

「周りにいる全てを殺し尽くす。文字通り《殲滅》だ。それをシャブでもやってるかの如く、狂ったように笑いながらやるから…《殲滅狂》なんだよ。見たことないか？　榊原がポニーテールになってる姿を」

杏はハッとした顔をした。
見たことがある。悠が朋也の変わりに喧嘩をした時、確かに髪型はポニーテールになっていた。椋もそれを校舎から見ていたから分かる。
でも信じられない。信じたくない。どんなに悪行を重ねようと、どんなに粗暴でも、好きだから悠を信じる。
隣で凛と座る、強い姉ならどうするのだろうか。受け入れる？
それとも改心させる？　どちらにせよ、姉の杏が悠を好きだと仮定しての話だ。例えばの話に自分は何を不安になるのだろうと椋は思った。でも、と心の中で自問する。もし、本当に悠を好きだったっら、姉はどう感じるのだろうか。
自分は何もかもが姉に劣っている。最近になってその思いは次第に大きくなっている。ああ、自分は空っぽなんだなぁ、と。
何も無くて、姉に守られるだけの無力な妹が出来るとしたら、きっと一つくらいしかないかもしれない。

「……でも」
――それでも。
「私は……榊原君はそんな人じゃないって、信じるます！」
――それが、榊原君に私が出来る唯一の事だから！

その時、車は目的地に到着した。

◇

扉を開くと、そこは蛻（もぬけ）の殻だった。
お洒落なアンティーク調のテーブルは無造作に散らばり、所々破壊された形跡がある。ささくれ立った床には、破壊され散らばるテーブルの破片と煙草の吸い殻や酒の空瓶。店内の奥に構えたカウン

ターは無惨にも傷だらけで、人間に例えれば惨殺死体と言っても過言ではなかった。
空気中に舞う埃が、人は居ないと告げていた。明らかに誰も居ない。念のためにと悠は床に耳をあて、人が居るであろう気配を探ってみる。
一人でも居るなら、足音や物音、それらが床から聞こえてくるはず。

しかし。
「誰もいない……？」

まさか、と続けて言葉を漏らす。
騙された？　と考える。しかし、それはあちら側、つまり誘拐の主犯にまだ反逆の意思が残っていることを意味する。

「今更引き返して、あの男を再度拷問にかけるのか？　……いや、それじゃあ意味がない。何より、あれ以上の拷問を俺は知らないじゃないか」

冷静になれ。ここで取り乱せば、全てが終わる。この手で終わらせなきゃいけなくなる。それだけは――――！？

外から車のエンジン音がした。普通なら、そんな事をいちいち気にしたりなど悠はしない。でも、ここら一帯は治安も悪く、店の前にある道もそっち側の人間しか通らない。
そんな辺鄙な場所に車が来たとなれば、

「俺が、先に着いちまったって事か……」
ぼやいて、右人差し指で露わになっている額をポリポリと掻く。
それも束の間、悠は何を思ってなのか外に出ず店内のトイレに隠

れた。
直後に、複数の気配を店内で感じた。悠の感だと、おそらくは六人。それに疑問を感じる。
男の話では四人で行動しているはず。それに杏が加われば合計は五人になる。
「……一人…多いな」
ポツリと呟き、再度思考する。
ありとあらゆる可能性を導き出すのに悠が没頭していると、話し声が聞こえてきた。
「それじゃあ、ここに座ってな姉ちゃん。間違っても…変な気は起こすなよ。そうなった時は、アブが妹を……その先は言わなくても分かるよな？」
「あんた達…本当にクズで最低の卑怯者ね」
「言ってろ。これが俺達の仕事なんだ。あいつと関わったのが運の尽きだと思え」
切迫感のある女性の声を聞いて確信する。
「大丈夫だよ……お姉ちゃん。だって、榊原君が助けてくれるもん」
予想外の声を聞いて驚愕する。
狙われてたのは杏だけのはず。しかし、何故か椋まで一緒にいる。
悠は驚いたが、考えれば直ぐに分かることだった。何故ならあの双子の一緒にいる光景は、悠もよく目にしていた。しかも帰る家が一緒ならそれは偶然じゃなく必然。
予期せぬ人物は姿こそ見えぬが、毅然としたその声が椋の姿そのものを表していると言える。

「あぁ、ちゃんと榊原は来るぜ。ただし、助ける為とは限らないけどな」
「……あたしらの…所為ってわけね」
「察しが良いじゃねぇか。そういうことさ、あんたらが居る限り《殲滅狂》も俺らに手は出せない」
「でも、それじゃおかしいじゃない。あんたさっき言ったわよね？あいつにとって、友達なんか利用するだけのモノだって。自分の為なら何でもする奴だって、そう言ったじゃない」

否定したかった。
そうじゃないと彼は来てしまう。自分らの所為でこの男達に彼が、いいようにされてしまう。

――だから。

「悠は絶対に助けに来ない！」

その時、店内の闇を照らす数個の照明が、一斉に消えた。

「残念だな杏。この賭……椋の勝ちだ」

闇の中から声がした。
それは救世主とは言い難い声色で、どちらかと言えば征服者に近かった。
飄々（ひょうひょう）としていて、山の天気みたいな気分屋の征服者。

杏が最初に感じたのは怒りだった。
どうして来てしまったのだろう、という気持ちが強くなって彼を責め立てたかった。
なのに――どうしてこんなにも、涙が止まらないのだろう。

椋が最初に感じたのは嬉しさだった。
だって、彼は助けに来てくれた。それが、嬉しかった。けど、姉の言葉と心情を察した椋は悲しくなった。
恥ずかしかった。自分は卑怯者だと自分を罵りたかった。わかってない。自分は何も彼の事をわかってなかった。それなのに、暢気にも他力本願な事を言っていた。
果たして、彼の隣に立つ権利が自分にはあるのだろうか。

悲しいはずなのに――不思議と涙は流れ出ない。

「残念だな杏。この賭……椋の勝ちだ」

そう言って悠が最初にとった行動は、杏と椋の身柄を安全に確保する事だった。
店内の奥にあるトイレ。そこから出て直ぐ上にあった照明を、配線をいじってショートさせ視界を閉ざす。
あらかじめ右目を閉じていた悠だけは、突然の闇にも光を見いだせる。

「……さて、お前ら全員あの世へ行くために六文銭は持ってるだろうな？　今夜の俺は、前みたいに止まらないぜ」

暗闇でポニーテールがなびいた。

「さ、榊原！？　なんでここに！　まだ深剣さんにも連絡は……！」

「偶然にもその深剣に天神通りで会ってなぁ。その時に……ってわけだ」

拓郎の質問に答えながら、悠は店内を駆け抜け、まず椋を助けた。

椋の傍にはアブが居たが、命令がなければ動けないアブはこの暗闇でアタフタとしていた。そんな輩から椋を取り戻すのは、目を回したトンボを捕まえるより簡単だった。

慌てるアブの横っ面を右の拳で殴りつける。空になった缶を殴った時みたいな勢いで、アブが声を上げる暇なく吹き飛んだ。

「榊原君……！」

「よぉ、藤林いも……椋。久しぶりだな、もう大丈夫だ。…怖い思いはまだするかもしれないけどな」

俗に言うお姫様抱っこで椋を抱き、カウンターの向こう側へと下ろす。

「ちっ、アブがやられたか。でもなぁ、まだこっちにはもう一枚切り札があるんだよ！」

アブがやられたのを引き金に、残りの三人が動き出した。

一人が店内の中央に鎮座している杏を脅迫に使おうと頬にナイフを突きつけるが、

「……遅い」

カウンターにあったアイスピックを悠は投擲し、ナイフを持った

男の手を串刺しにした。

「ひっ…ぎ、ぐあぁぁぁ！　てっ、手がぁ！」

自分の傷に気をとられている内に、すぐさまカウンターから飛び出し杏を救い出す。

オマケとして回し蹴りをするのを忘れない。

「悠…！　この、あんた馬鹿でしょ！　なんで、なんでここに来ちゃったのよ！？」

「さあな、実のところ俺にもわからない」

「…本当に、馬鹿なんだから」

押さえ込めた筈の涙が、再びこみ上げてきた。

でも泣かない。

泣かないと決めたから。

泣けば悠は茶化しながら、優しく慰めるだろう。

だから、泣かない。

今そんなことをされたら、諦めると決めた想いが更に強くなって蘇るから。

杏は泣き顔を見せまいと俯き、一拍置いて悠の顔を見上げる。

その顔に笑みを乗せて。

「ほらっ、あたしと椋を助けるんでしょ？　だったら早くしてよ、あたしも…椋だって、悠……あんたの過去なんて気にしてないから」

「……っ！　…そうか……知っちまったか。いいさ、いつか言わなきゃならなかった事だ……。これが終わったら話すよ」

親におねしょがバレたような顔で言い、杏を椋と同じカウンター

まで連れて行く。

「いいか、絶対にこのカウンターから頭を出すなよ？　そうしてりゃあ、世は事もなしだ。いい子にしてれば、後でリコリス飴でも買ってやるよ」

歪な笑みの上に、不敵な笑みを塗り重ねる。
バレても、損はあっても得は無い。
だから、二人に背を向けて一歩踏み出す。

――が。

「待って榊原君！」
「ん、なんだ？」

椋が呼び止めた。
不安そうな面持ちで悠を見据えている。
何か言いたげなその顔が、悠にはとても儚げに見えた。

「……ごめんなさい」

一瞬、何を言っているのかわからなかった。
けど、悠の優秀と言って過言ではない頭脳がそれを許さなかった。

「……あぁ」

だから多くは語らなかった。それでいて、許しはしない。
それが、椋を救う、たった一つの愚かな行動だと思ったから。

「榊原ぁ！　てめぇ、覚悟は出来てんだろうなぁ！？」
「覚悟？　くくっ、くははははははははっ！　なかなか面白いことを言うじゃあねえか！　褒美だ。…感涙するほどの苦悶もくれてやるよ！」
「…上等だぁ……切り札はまだあるんだよ！」

拓郎が懐に手を伸ばす。
が、それよりも早く、再びアイスピックが悠の手から投擲される。今度の数は二つ。一つは拓郎の懐に伸びた手に。もう一つは隣の翔太の膝に。
ぐぅ、と音を上げるより早く悠は二人に肉迫する。

「ほら、ご褒美だ。噛み締めろ」

空を裂くような速さで拳が疾(はし)る。
左のジャブで拓郎を怯ませ、その怯んだ僅かな間で悠の左側にいた翔太にストレートをくらわせる。
そして再び拓郎に左フックで顎を刈り取る。
止めと言わんばかりに翔太と拓郎の両足の膝を、自らの足で踏み折る。
くぐもった呻き声を上げる二人。瞳には涙を浮かべ床で悶えるように転がる。

「がぁ、ぐぅ……て、てめぇ……。はぁ、はぁはぁ…うっ」
「喘いでんじゃねえよクソ野郎……」

親の敵を見るような目で見る翔太の顔面を、鋭い蹴りで黙らせる。
耐えきれずに翔太はそのまま気絶した。
貼りつけた表情がボロボロと音を立てていくのがわかる。

ボロが出るってのはここから来てるのかもな、と思いつつ杏と椋を迎える。

薄汚い泥まみれの怨嗟にも似た悲鳴や叫び声に、てっきり二人は耳を塞ぎ目を閉ざしているもんだと思っていたが、

「……終わったの？」

「怪我はありませんか榊原君！？」

杞憂だったらしい。

気丈にも二人は、起こりうる全てを受け入れ、それでも悠の帰りを待っていた。

「終わったよ……、見ればわかるだろ？　ほら、傷一つない《汚い》身体だ」

「そう、別によかったとか思ってるわけじゃないのよ！？　ただ、あたし達の所為で怪我なんかしたらほら、目覚めが悪いじゃない？　だからよ！　なんか文句あるの！？」

「お、お姉ちゃん。それじゃあ言いがかりだよ」

「全くだ。お前、何が言いてぇんだ？」

悠と椋の二人からの言葉責めに、顔を真っ赤にする杏。

「う、うううっさい！　ほらっ、さっさとこんな薄気味悪い所から出るわよ！」

「あっ、待ってよぉお姉ちゃん。……榊原君、私、《頑張るから》…だから、見ていてくれると嬉しいな」

「……《何を》だ？」

「《何でも》だよ。……お姉ちゃんが呼んでるから行こう？」

そう言って悠の手を引く椋。
決意を言葉にした椋は、なにやら憑き物が取れたような爽快感を味わっていた。

「何やってんのよあんた達！　置いて行くわよ！？」
「…まったく、杏は道を知らないだろうが。おかしくなったのか？」
「ふふ、お姉ちゃんも恥ずかしいだけですよ。行きましょ？」
「あぁ、ちょっと先行っててくれ。靴紐が解けちまった」

繋がれた手を離し、その場に座り込み結びなおす悠。
手を離されたことを少々残念がる椋だが、姉が呼んでいるので仕方なく膨れっつらの姉の下へ走った。
まだ時間はあるんだ。あせる必要は無い。そう自分に言い聞かせる。先ほどから厭な予感が拭えないが、きっと気のせいだろう。と椋は自分で自分を説得する。

――その瞬間だった。

一瞬。瞬く間。刹那。あらゆる言葉を用いてもこの速さは説明できなかった。
何故なら、予想が出来ず、疑念すら持たず、《それ》に対してのあらゆる思考を破棄していたからだ。気がつかなければ気がつかない。ただそれだけの事である。

だから、鼓膜が破ける程の轟音にも、それが銃声だと言うことにも直ぐに気がつかなかった。
右のわき腹に灼熱の痛覚が奔る。その痛みは、悠にとって生きている証であって――――死に近づいている証でもあった。

「ゆ、悠……？」

「い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

杏が呆然と見ている。

椋が悲痛に叫んでいる。

なのに、悠は別のことを考えていた。

自分の考えを証明する為に背後へ振り返る。

「……や、っぱり…」

そこには、店内で幼虫のように寝そべり《銃》を構えた拓郎がいた。

殺気のこもった双眸が、標的である悠を睨んで離さなかった。

右手に握られた拳銃のトリガーに、再び指が掛かる。ギリギリと音が聞こえてきそうな感じだった。

「まっ、たく……ほん、とに…最高に……最、悪だ、な」

ぼやいて、安堵する。

友に裏切られ、狂気に染まり、悪逆の限りを尽くした自分が、真っ当に死のうとは思っていなかった。

だから、これは報いなのだ。

自然に笑みが零れる。

生きてきた中で、これほど綺麗な笑みは見せなかっただろうと言う位の笑みで、悠は受け入れた。

トリガーが絞られた。

「悠ぅーーーーーーーー！！」

「駄目ぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

銃声は、非情にも二度聞くことになった。

十三章：停学最終日～救いを求める者～（後書き）

なんだか……ＣＬＡＮＮＡＤらしくなくてすいません（涙
自分の悪い癖ですｗｗ路線がちょいちょいずれたりしますｗｗｗｗ
でも大丈夫。本線はずれてないから……今のところ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9954g/

CLANNAD～孤高の金～

2010年10月9日18時41分発行